

GOVP3198007715

朝鮮の金銀鑛業



目次

第一章	總論	一頁
第一節	金銀の概念	一
第二節	内鮮産金比較	四
第二章	朝鮮の金銀鑛	七
第一節	沿革	七
第二節	金銀鑛の分布	九
第三節	金銀鑛賦存の状態	一九
第四節	重なる金鑛地の説明	二三
	咸鏡北道、咸鏡南道、平安北道、平安南道、黄海道、京畿道、忠清北道、忠清南道、江原道、慶尙北道、慶尙南道、全羅北道、全羅南道	
第五節	保留金山	五七
第三章	金銀鑛の稼行狀況	五九
第一節	採鑛	五九

一、砂金の採取……………五九

二、金鑛の採掘……………六〇

 第二節 探 鑛……………六二

 第三節 選 鑛……………六三

 第四節 製 鑛……………六五

第四章 金銀鑛に對する諸施設……………六七

 第一節 選鑛製鑛試驗……………六七

 第二節 鑛業の指導誘掖……………六八

第五章 諸統計に現はれたる金銀鑛の盛衰……………六九

 第一節 出 願……………六九

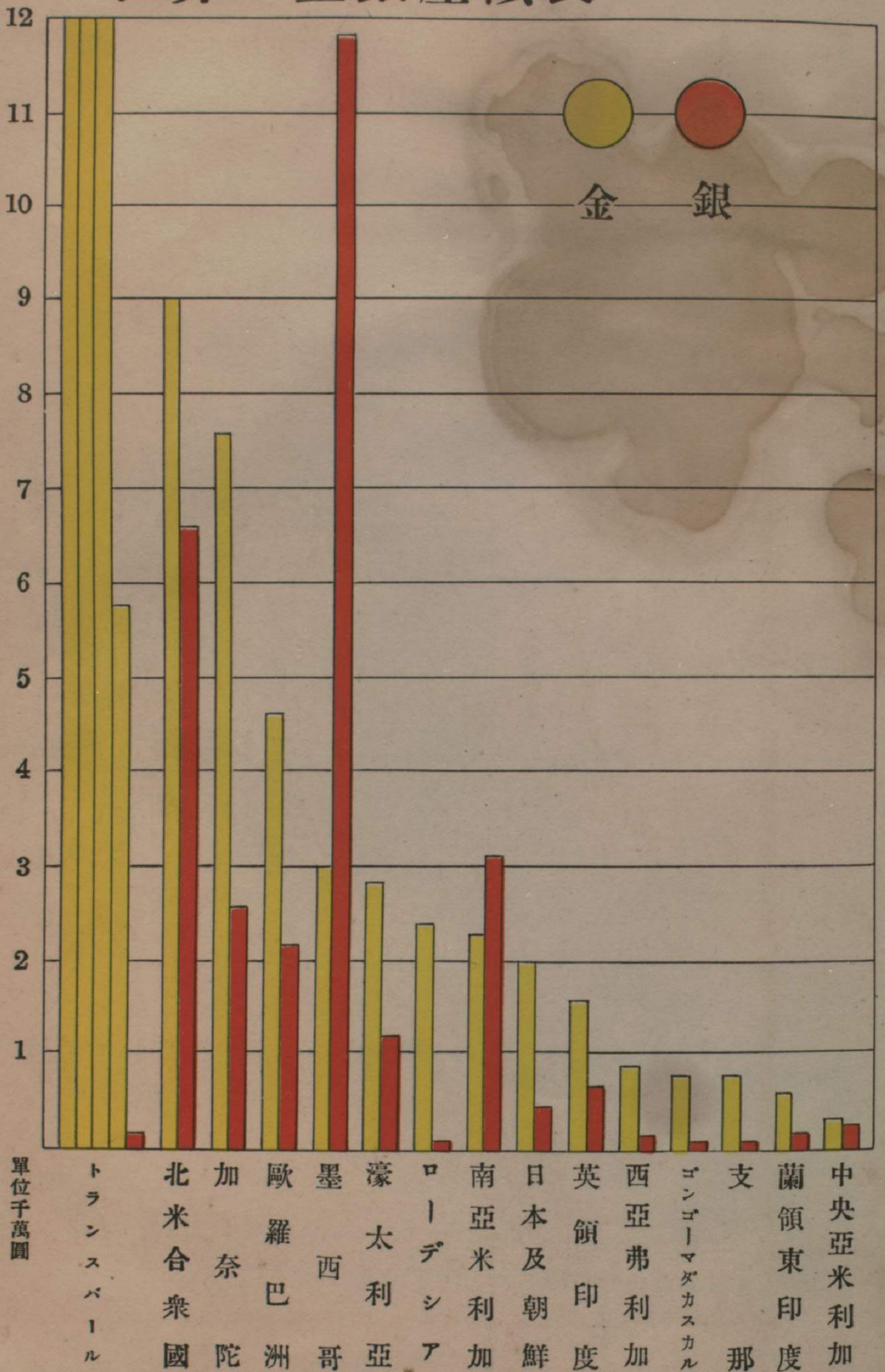
 第二節 鑛 區……………七一

 第三節 鑛 産……………七四

 第四節 輸 移 出 入……………八〇

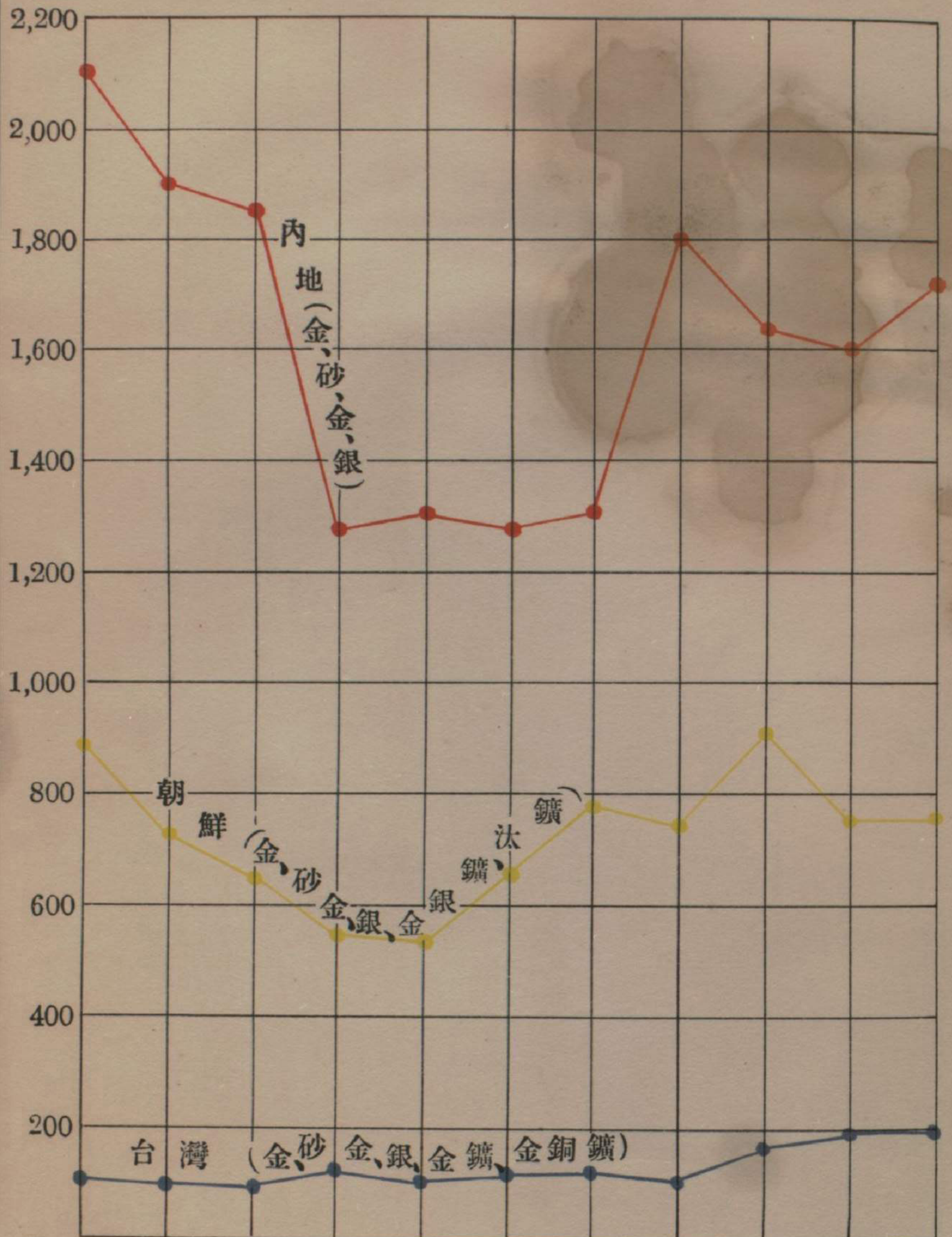
(附錄) 朝鮮主要金鑛概況

世界ノ金銀産額表 (昭和二年)



單位千萬圓

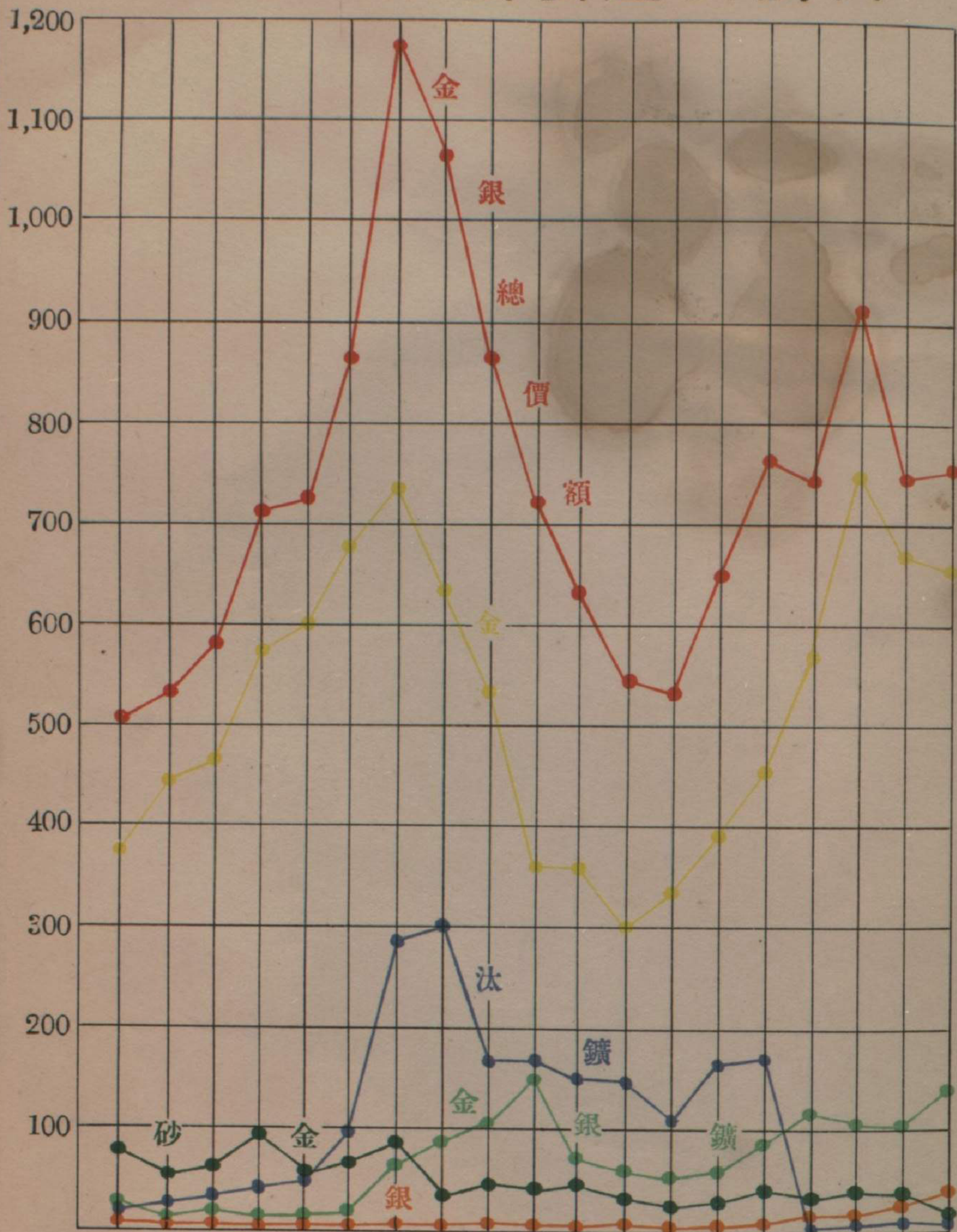
內鮮產金比較表



單位萬圓

年份	內地 (金、砂、金、銀)	朝鮮 (金、砂、金、銀、金、銀、金、銅)	台灣 (金、砂、金、銀、金、銅)
大正七年	2100	890	110
大正八年	1900	730	100
大正九年	1850	650	100
大正十年	1280	540	120
大正十一年	1310	530	110
大正十二年	1280	660	115
大正十三年	1310	780	110
大正十四年	1800	740	105
昭和元年	1630	910	160
昭和二年	1600	750	185
昭和三年	1720	750	190

朝鮮金銀鑛產價額表



單位萬圓

明治四十三年 明治四十四年 大正元年 大正二年 大正三年 大正四年 大正五年 大正六年 大正七年 大正八年 大正九年 大正十年 大正十一年 大正十二年 大正十三年 大正十四年 昭和元年 昭和二年 昭和三年

朝鮮の金銀鑛業

第一章 總論

第一節 金銀の概念

金銀は古來貴金屬として男女の別なく之を愛用せり、其愛用せる所以のものは金は黄金ゴウガンと稱し其美麗なる山吹色と燦爛たる光澤とは水及空氣の爲めに汚さるゝ事なく、銀は又白銀シロガネと稱して其色の純白なる雪を欺く燦爛たる光澤は大氣中にありて酸化する事も極めて少なきによるものなり、加之金銀は展性延性共に強くして打ちて箔となすべく引きて線となすべく、硬度高からざれば彫刻して美術品を作り鍛治して器具を製すべし故に祭壇衣裳の裝飾、指輪、耳輪、什器、齒療用などに使用せられ諸金屬中に冠たるものあり、且つ其産額の少なき事は其價值をして貴からしむ、然れども世人の金銀を貴重するは多く貨幣として流通せしが故なり、文明國と呼はるゝ總ての國は今日金貨本位にして純金の一匁は貨幣として常に五圓の價額を有す、各國が外債を起しつゝも尙自國の金を極力保留せんとするは非常時に備へむが爲めなり、一旦戦争の如き有事に際しては金貨ならでは物品の購入を得ざるもの

なり。

金は其存在量の最も少なき元素の一にして自然界に於ける分布は甚だ廣汎に亘り動植物の灰分、河水、海水中にも極めて微量を發見せらるゝものにして各種の岩石中には勿論微量ながら必ず含有せらるゝものなり、岩石中の金銀は多く遊離状態にありて他の元素と化合する事少なく、其多量の金銀を含み經濟上有利に採行し得るものを鑛石と言ふ、鑛石の多くは石英質の鑛脈状態を爲して存在す、殊に砂金として砂礫の中に混合するときは只淘汰のみにて分離し得らるゝを以て知識低き蠻人と雖ども之れを爲し得べし故に遠き古より採金術は備はりたり、世界に於て最も古きより金を産せるは印度、中央亞細亞、南部烏拉爾、地中海の沿岸及東部地方なりき、銀は金に比し其製鍊法困難なるため其發見は後れたるも元來金と銀とは常に同時に産するものにして金の鑛石より抽出したるものは普通金銀の合金をなし之を青金と稱す、純金純銀は青金より分離せしめて製するものなり。

今日世界の金を供給せるものは砂金と山金とによれり、山金は砂金の原生鑛床を爲し普通地下熱水液により生成せられる石英脈中に産するものなり、石英脈中の金は普通自然金の形にて存在し其割合は十萬分の一内外なり、内地に於けるものは百萬分の一に下るものあり、朝鮮に於ては十萬分の一三は普通にして萬分の一に達するものゝ如き珍らしからず、金鑛中比較的銀の多きものを銀鑛と稱す、砂金は普通千分中六〇—九〇の品位にして世界に於ける最大なるナゲットは漳州ウィクトリア産

のものにて、量は八三疋(二二・一三三三匁)あり、我國に於ては朝鮮端川産の〇・九一五疋(二四四匁)含金九一〇を最大とす、之れは大正五年寺内總督により宮内省に獻納せられたり、次に北海道枝幸産に〇・七六九疋及〇・七三九疋の兩塊あり。

全世界の金銀年産額は次の如く年々大差なき統計を表はせり。

	金産額	銀産額
大正五年	九億一千萬圓	二億二千萬圓
同 六年	八億四千萬圓	二億八千萬圓
同 七年	七億七千萬圓	三億八千萬圓
同 八年	七億三千萬圓	三億九千萬圓
同 九年	六億七千萬圓	三億六千萬圓
同 十年	六億六千萬圓	二億二千萬圓
同 十一年	六億四千萬圓	二億九千萬圓
同 十二年	七億三千萬圓	三億一千万圓
同 十三年	七億八千萬圓	三億二千萬圓
同 十四年	七億八千萬圓	三億四千萬圓

昭和元年	八億萬圓	三億一千萬圓
同 二年	八億一千萬圓	二億八千萬圓

世界の金産地として有名なるものは南阿トランスバールにて世界産金の過半を出し、次で北米合衆國、加奈陀、露西亞、墨西哥、濠州、ローデシア、南米にして日本及朝鮮は第九位にあり二千萬圓程度となれり。

世界の銀産地としては墨西哥、北米合衆國を第一とし此兩國にて世界産銀の七割を出し次で南米、加奈陀、濠州、歐羅巴州、英領印度、次に第八位として日本及朝鮮の六百萬圓程度あり。

第二節 内鮮産金比較

朝鮮に於ける最近の總産額は二千六百萬圓にして内地に於ける三億七千八百萬圓に比較すれば著しき遜色あり、之れ朝鮮は併合以來漸く十九年鑛業開發に對する歴史甚だ新しきによるものにして近くは歐洲戰亂後の財界不況も亦其因を爲し所謂鑛業過渡期に相等して充分其發展を見る能はざるものなり、その中にありて金銀鑛業は最近朝鮮に於けるもの七百六十萬圓内地に於けるもの二千一百二十萬圓なるが此の内地産額より朝鮮金銀鑛及汰鑛の移出額百八十九萬圓及臺灣産金銅鑛百四十九萬圓を差引き一千七百八十二萬圓として比較するに朝鮮の金銀鑛業は内地金銀鑛業に對し其約半數に達せる

を知る。

銅金銀鑛は鮮内普く分布せられ、これが産出を見ざる處なく朝鮮は實に産金國として其將來を嘱目せらるゝものなり、昭和三年の統計によれば全鮮の鑛區數は二、一五一なるが其中金銀鑛、砂金、及金銀を含む雜鑛を目的とせる鑛區數は一、二二六にして半數以上を占む、金銀の産額は七、五六六、九三一圓にして全鑛産額二六、四三四、九七二圓に二割九分を占めたり故に鐵及石炭と共に最も重要な鑛産物として注目せらる最近十箇年間の金銀産額を内地及臺灣に比較すれば次の如し。

	昭和三年	昭和二年	昭和元年	十四年正	十三年正	十二年正	十一年正	大正十年	大正九年	大正八年
内地	三、三二一、〇六四 <small>圓</small>	六、六三三、五五二 <small>圓</small>	六、六三三、五五二 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>
臺灣	一、〇六六、六六七 <small>圓</small>	一、九二一、九七二 <small>圓</small>	一、九二一、九七二 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>	九、九六六、五七〇 <small>圓</small>
朝鮮	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>	七、五五三、九三三 <small>圓</small>

内地の産額は金、砂金及銀よりなり臺灣は金、砂金、銀、金鑛、金銅鑛を含み朝鮮に於けるものは金、砂金、銀、金銀鑛、金銀法鑛に分類せらる、臺灣の金銅鑛及び朝鮮の金銀鑛、金銀法鑛は内地に於ける乾式製鍊場に於て鑛して金及銀に還元し算出せらるゝ爲めその産額を内地統計より差引く時に前述の如く内地産額は朝鮮産額の約二倍に相當せるを知らる、これを主要鑛山産出状況より見るに内地の産金(昭和二年)二千五百六十二貫中六割強は主として銅鑛乾式製鍊より産出するものにして濕式

の主なるものは鯛生金山の三百四十六貫、三井串木野金山の二百五十九貫、鴻の舞金山の百七十三貫、佐渡鑛山の八十一貫、山ヶ野金山の五十貫、轟鑛山の三十八貫、靜狩鑛山の十二貫、北の王鑛山の十貫を重なるものとす、朝鮮の産金は鑛石の性質が含金硫化鑛なるが爲め金銀鑛又は金銀汰鑛として乾式製鍊に適するもの多し又濕式製鍊によりて青金として産出するものもあり、産額より見るに現在後者は八割強を占めその重なるものとして三成鑛山の青金三百八十八貫、雲山金鑛の純金三百七十三貫、昌城金鑛の同二百三十二貫、新延金山青金三十八貫、靑岩金山同二十貫、宣川金山同三十貫、遂安金鑛同四十五貫、栗浦金山同二十三貫、中央鑛山同六十四貫、浩美金鑛同十七貫、滿里金山同十三貫、稷山金鑛同九十七貫、斗美金鑛同二十三貫を擧ぐ、その他の小金山は其數甚だ多きも極めて小規模の稼行にして採鑛は狸掘と俗稱せらるゝ土法により又製鍊は朝鮮式水車によりて僅かに收金せらるゝものなり故に各道に分布せらるゝ金銀鑛の埋藏鑛量は充分多量なるものあるも表面に現はれたる成績は鑛産額が不足なる爲め果して金銀鑛が豊富なりや否やを一般に疑はれつゝあるが如し、殊に金鑛開發に對する面白からざる現象はかの歐洲大戰爭當時鑛物の高値に刺戟されて内地一流の鑛業家を始め鑛業に經驗のなき素人迄何等の成算なく無暴なる出願を爲せる事にして其結果多くは失敗に歸し相當の技術者さへ朝鮮の金鑛は地表的一部の富化にして下底深く永續せざる事を口實に縮小又は内地に引上げたものなり、これが今日内地鑛業家の間に朝鮮の金鑛は下底に永續せざるものとして鑛業投資を妨害せ

る原因となれり、然るに朝鮮の金銀鑛開發に對し著しい貢獻をなせるものは特許鑛山と稱せらるゝ韓國政府時代よりの外人經營鑛山なるが東洋一と稱せらるる米人經營の雲山金鑛、英人經營の遂安金鑛或は佛人經營の昌城金鑛は今尙作業を繼續せるのみならず其下底は千尺乃至二千五百尺に至り最近に於ける著名の金銀鑛山たる栗浦金山、三成鑛山、三德鑛山、光陽鑛山、北洞金山の如きも現に稼行中にして何れも五百尺乃至二千尺に達せり、故に現在に於ては内地鑛業家間に傳唱せる誤解は明に根據のなきものとなれり、最も鑛石の種類は内地の含金石英鑛と異なり諸種の硫化鑛を伴隨せるが爲濕式製鍊にては容易に收金し難き缺點あり、地表酸化帶五十尺乃至百尺間は酸化鑛なるが爲簡單なる濕式製鍊によるも容易に收金せらるゝものなるが一且硫化帶に入れば收金意の如くならずして忽ち廢坑となるもの甚だ多しこれも亦誤解の一端なりしなるべし。

第二章 朝鮮の金銀鑛

第一節 沿革

朝鮮に金銀を産する事は古くより傳へられたり神功皇后は朝鮮を金銀の國と仰せられ金銀を持ち歸へられたりと言ふ、高麗文宗三十六年には既に金銀採鑛の匠起り地方官は鑛産を以て好個の財源とせ

り。

又朝鮮の役には加藤清正が咸鏡南道端川郡檢德鑛山の銀鑛を製鍊して之れる豊公に獻じ、隣邦支那にては朝鮮に黄金を産すと聞き早くも歲貢を命じたりき、然れ共金銀の產出豊富なる場合には隣邦の壓迫によりて其の侵略を受けむ事を懼れ、勉めて消極的政策を續け李朝の初め世宗の時には明への歲貢中より金銀を免れんが爲め金銀鑛の開鑛を禁止せる事もありたり。

孝宗二年（西曆一六五一年）端川郡外數箇所の銀鑛開發を許可して産銀の一部を收税し又英祖六年（西曆一七三〇年）には平安南道慈山の金店を開きて採金を許可したるを以て各地に採金事業勃興したり、然るに鑛山の隆盛に伴ひ山林は亂伐せられ無賴の徒は好むで騒動を起し爲めに鑛山開發意の如くならず、折角の目的たる收税も豫想の如くならざるを以て地方も政府も共に鑛業を非難するの傾向を生せり、要するに鑛業は不振の状態に陥れるものなり、吾明治時代に至り十八年頃より日本人及諸外國人の朝鮮鑛物に著手するものあり當時列國は韓國政府の威力振はざるを好機として各地の鑛業權獲得に努め茲に初めて鑛業界に對する覺醒を促すに至れり。

明治二十九年米國人は平安北道雲山郡の一切鑛物採掘特許を得たるを始めとして露西亞、獨逸、英吉利、日本、佛蘭西及伊太利等競ふて鑛業特許權を得鑛山開發に著手せり、當時列國の主眼とせるものは金鑛區にして今日特許鑛區として引續き稼行せらるゝものゝ殆ど總ては金銀鑛區なるものなり、

如何に外人が朝鮮の金銀鑛業を重視せるかを知るに足る。

爾後我日本の保護國となるに及び韓國政府は日本の忠言に基きて時弊を匡救せむが爲め明治三十九年鑛業法及砂鑛採取法を發布し明治四十三年日韓併合後は鑛業開發の一策として鑛床調査機關を置き一方内地鑛業家を招致して業務に着手せしめたり、茲に漸く發展の域に向ひ金銀賦存の狀況を明かにするに至れり、大正五年には舊法を廢して新に朝鮮鑛業令を實施し鑛業に關する制度の完備と共にその保護益々厚きを加へ金銀産出も一時一千萬圓を突破するの盛況を示したり。

時偶歐洲戰爭の影響をうけて金銀鑛業も一頓挫を來たしたるが其後漸次回復の氣運に向ひ昭和三年には朝鮮鑛産額二千六百萬圓に對し金銀は實に七百五十六萬圓にして二割九分の割合を示すに至る。

第二節 金銀鑛の分布

鮮内に於ける金銀鑛の分布狀態を知るに先立ち各道に於ける金銀の産額を擧ぐべし。

道 別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	合 計
黄 海 道	111,151,111	111,151,111	111,151,111	111,151,111	111,151,111	555,755,555
平 安 北 道	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	30,000,000	150,000,000
平 安 南 道	0	0	0	0	0	0
合 計	141,151,111	141,151,111	141,151,111	141,151,111	141,151,111	703,555,755

咸鏡南道	一九,九七〇	二九,九六〇	三三,六六七	四九,六八五	一八,八〇〇	二六,一九二
忠清南道	四八,八三〇	五九,六八八	五六,七三六	六一〇,三三三	六四,八四四	二八,五三三
咸鏡北道	四,九〇〇	五,三三三	二,四〇〇	一	七九,九三三	九二,四五五
慶尙北道	六〇,四八〇	一〇一,三三三	一五七,〇〇一	一六,五五六	一一二,四六〇	六七,七八四
慶尙南道	一〇〇,〇六八	一〇〇,五八三	一九九,一〇〇	一三三,四八七	四七,九七一	七五,七六一
全羅南道	一〇〇,〇三六	一六六,八三三	一九九,五〇〇	四六八,〇五二	四三三,二八〇	一,三四六,七四三
江原道	一八三,六六五	二五八,九三三	九九,一八九	一八八,二七三	一五〇,九九一	七五,九三二
忠清北道	三六,四〇八	一五,一九〇	一六,一〇三	一〇,五九一	二九,四〇八	一一九,〇〇八
京畿道	一四,八三〇	六,三七九	四,六三九	一三六,四七九	二四,六〇三	四六,九五元
全羅北道	四六,七元	五八,六一	〇〇,〇〇	一〇,五〇〇	四,五三〇	一一三,〇〇〇
計	六,五三,九二	七,六七,三三七	七,四三,三三〇	九,一三,〇三三	七,五〇,一七六	三八,三三,九三三

右は最近五箇年の産金銀額表なるが特に産額の多きは平安北道にして年々全鮮産額の半数以上を占む、次で黄海道、忠清南道、全羅南道、平安南道、慶尙南道、江原道、慶尙北道等なり、然れども金の産額は道内に於ける大鑛山により影響せらるゝ事多く例へば平安北道に於ける雲山金鑛、三成鑛山、昌城金鑛、新延金山、黄海道に於ける遂安金鑛、栗浦金山、忠清南道に於ける稷山金鑛、中央鑛山、全羅南道に於ける光陽鑛山の如きものにして一二の大金鑛存在が道内産額に非常なる影響を有す、故に資本又は技術上の關係にて發展の域に達せざる金銀鑛區は其數甚だ多し、左に年々の金銀鑛鑛區

數及新規出願の件数を擧ぐべし。

金銀鑛鑛區表

道別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	昭和二年	平均
京畿道	六二	六一	六三	六四	六九	六四
忠清北道	八七	九七	一〇三	八七	八〇	九一
忠清南道	九三	八四	一〇〇	一〇四	一〇六	九七
全羅北道	三三	三七	三五	三四	三五	三五
全羅南道	三四	三四	二五	二六	二六	二九
慶尙北道	九二	八五	八八	八八	八一	八七
慶尙南道	九〇	八二	七九	八五	八三	八四
黃海道	四四	四五	六〇	六四	六七	五六
平安南道	八四	八七	一一〇	一一三	一一七	一〇〇
平安北道	一一六	一五四	二〇四	二二四	二二八	一八五
江原道	一〇〇	一一六	一一三	一一四	一一三	一一一
咸鏡南道	一二六	一一五	一〇六	一一一	一〇八	一一三
咸鏡北道	二一	一六	一七	一七	二二	一九
計	九八二	一、〇一三	一、〇九四	一一三一	一一三五	一、〇七一

金銀出願件数表

道 別	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年 昭和元年	昭和二年	最近五箇年計
京 畿 道	一一	一四	二五	三四	二五	一〇九
忠 清 北 道	一三	二八	二八	二六	三一	一二六
忠 清 南 道	一八	一八	五八	三〇	四一	一六五
全 羅 北 道	一四	一五	一一	一五	四	五九
全 羅 南 道	七	九	一一	三	八	三八
慶 尙 北 道	四七	二九	三八	二二	二〇	一五六
慶 尙 南 道	九	一四	三七	三五	二九	一二四
黃 海 道	九	一一	三八	四三	四七	一四八
平 安 南 道	六	一七	五二	三九	一三	一二七
平 安 北 道	二三	一二八	一一九	九五	五七	四二二
江 原 道	七八	七四	八〇	八三	四七	三六二
咸 鏡 南 道	二三	一七	三一	三九	六八	一七八
咸 鏡 北 道	二	一六	六	二一	一一八	一七三
計	二六〇	三九〇	五三四	四八五	五一八	二、一八七

最近五箇年の金銀鏡出願表によれば五箇年を通じて最も多きは平安北道にして進年増加の趨勢にあ

り、次で咸鏡南道、江原道、平安南道、忠清南道、忠清北道等なり、逐年鑛區を増加しつゝあるは平南、忠南、黄海にして他は年により増減あり。

出願件数表に於ては五箇年の累計上平安北道を第一として江原道之に次ぐ最近出願を増加しつゝあるは咸鏡北道、咸鏡南道、黄海道、忠清南道等なり。

以上の統計より金銀鑛業の趨勢を道別によつて論ずれば金銀産額、鑛區數出願件數共に斬然頭角を顯はせるは平安北道にして全鮮第一の金銀鑛地帯とも言ふべきなり、次に忠南、平南、黄海等の順序なるが今左に各道の優劣を順次に列記すべし。

7	6	5	4	3	2	1	金銀産額	金銀鑛區數	出願件數	金銀産額	金銀鑛區數	出願件數
江原	慶南	平南	全南	忠南	黄海	平北	平北	平北	平北	慶北	慶北	平南
北	北	南	南	原	南	北	北	北	北	南	南	南
黄	慶	忠	咸	咸	江	平	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數
海	北	南	北	南	原	北	北	北	北	南	南	南
	13	12	11	10	9	8						
	咸	全	忠	咸	京	慶	金銀産額	金銀鑛區數	出願件數	金銀産額	金銀鑛區數	出願件數
	北	北	北	南	畿	北	北	北	北	南	南	南
	咸	全	全	黄	京	慶	北	北	北	南	南	南
	北	南	北	海	畿	南	北	北	北	南	南	南
	全	全	京	慶	忠	平	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數	出願件數
	南	北	畿	南	北	南						

黄海は産額多きも鑛區數少なし是れは遂安金鑛、栗浦金山によるところ大なるものあるなり。

忠南は年々産額鑛區出願件數を増加しつつある有望地方とすべし。

全南は産額多きも鑛區數と出願件數甚だ少なし、是れは光陽鑛山以外有望なる金鑛が少なきを示す。

平南、慶南、慶北は中等の金鑛地方とすべし。

咸南、江原兩道は鑛區及出願件數共に多きも産額は比較的少なし、是れは未開地なる事を示し將來を囑望せらる。

咸北は従來金鑛としては最も貧弱なる道として認められたるが昭和元年より出願件數激増して新金鑛地方として知られたり。

京畿、忠北、全北には良鑛の發見少なく就中、忠北、全北は金銀鑛としては全鮮中最も不振のものなり。

金銀鑛道別の狀況を更に區分して郡別にしその主なる賦存地を擧ぐれば次の如し。

道	郡數	昭和三年一月一日 現在産金する郡數	主なる賦存地
京畿道	二〇	一四	抱川郡、楊平郡、驪州郡、安城郡、開城郡
忠清北道	一〇	一〇	清州郡、永同郡、忠州郡
忠清南道	一四	一三	公州郡、扶餘郡、保寧郡、青陽郡、洪城郡、天

安郡、瑞山郡、牙山郡

全羅北道 一四 九 全州郡、茂朱郡、金堤郡、長水郡

全羅南道 二一 八 光陽郡、寶城郡、順天郡

慶尙北道 二二 七 義城郡、高靈郡、尙州郡、奉化郡、慶山郡、漆

谷郡、星州郡、金泉郡

慶尙南道 一九 一三 咸安郡、昌原郡、統營郡、陝川郡、居昌郡

黃海道 一七 一五 延白郡、長淵郡、松禾郡、遂安郡、平山郡

平安南道 一四 一一 大同郡、順川郡、成川郡、平原郡、价川郡、安

州郡

平安北道 一九 一七 義州郡、龜城郡、泰川郡、雲山郡、熙川郡、定

州郡、朔州郡、昌城郡、宣川郡

江原道 二一 一七 春川郡、高城郡、旌善郡、洪川郡、金化郡、平

康郡、淮陽郡、三陟郡

咸鏡南道 一六 一二 定平郡、永興郡、安邊郡、新興郡、咸興郡

咸鏡北道 一一 七 富寧郡、會寧郡、慶源郡

計 二一八 一六三

斯くの如く道としては夫々統計上の優劣を見るも郡に細別すれば全鮮二一八郡中一六三は金銀鑛區所在地にして其中主なる賦存地と認めらるゝものは右に示すが如く七三の各郡なり。

故に金銀鑛は他の鑛物即ち鐵鑛、黒鉛鑛、石炭等に比較すれば全鮮に普く布衍せられ、其内には自ら合金に貧富の別ありて金銀量の濃集せる地方即ち金鑛地帯なるものゝあるを知らる、良鑛山の開發は此の金鑛地帯に起るべきものなることは當然の理由にして右に示したる各郡は金鑛地帯を指示せるものなり。

然れ共郡別にせるのみにては尙諒解に苦しむ處多きを以て統計にあらはれたる處及び過去の稼行狀況を基準として是等金鑛地帯なるものゝ中重なるものを圖示して説明する事とすべし（金銀鑛分布圖 參照）

道	金鑛地帯名	代	表	鑛	山	範	圍
咸北	慶源砂金地	流水鑛山、金月洞砂金鑛山、龍西洞金鑛				慶源郡	
	會寧金鑛地	五峯鑛山				會寧郡	
	清津金鑛地	青岩金山、清津金鑛、水洞金鑛、石市金山、富寧金鑛				富寧郡	
	新興金鑛地	新興金山				新興郡、咸興郡	
	定平金鑛地	咸天洞鑛山、豐泉金鑛、太陽里鑛山				定平郡	

咸南	平北	平南	黃海	京畿
永興金鐵地 安邊金鐵地 長津砂金地	義州保留鐵區 龜城金鐵地 宣川金鐵地 雲山特許鐵區 昌城特許鐵區 朔州金鐵地 熙川金鐵地 寧邊金鐵地 泰川金鐵地	慈母山金鐵地 順安金鐵地 安順金鐵地 成川金鐵地 延白金鐵地	長淵松禾金鐵地 平山金鐵地 遂安特許鐵區	抱川金鐵地 楊平金鐵地 安城金鐵地
永興金山、翰林里鐵山、翰林鐵山、仁興鐵山、東昌金鐵、定平鐵山 大嶺鐵山、安邊鐵山、安邊金鐵、瑞谷鐵山 長津鐵山	義州保留鐵山 三威鐵山、龜城金山、大同鐵山、御宮鐵山、安倉里鐵山、新香鐵山 新府而金山、宣川金山、桃花金山、吉祥鐵山、郭山鐵山、日峰鐵山 雲山金鐵 昌城金鐵 新延金山、三泰全鐵、橋洞鐵山 三成金鐵、菊花金鐵、安突鐵山、清涼鐵山 北平金鐵、信興金鐵、河川鐵山 一福金山、泰成金鐵、泰川鐵山、泰觀金鐵、天溪金鐵 日置鐵山、大倉鐵山、三峰鐵山、三中金山 淺野岾安砂金鐵、龍田岩砂金鐵	大呂金鐵、昌成鐵山、元峰鐵山、雲龍金鐵、天王金山 三德鐵山、大德鐵山、大邱鐵山、成興鐵山、石隅里鐵山 栗浦金山、余谷鐵山、金野金山、菊根金山 長淵鐵山、樂山鐵山、松禾鐵山、溫泉金鐵、鷹岾金鐵	鐵峯鐵山、洗冠里鐵山、南川鐵山 遂安金鐵、荊洞金鐵、伊藤鐵山	一東鐵山、永中鐵山、永北鐵山 三王金山、金旺鐵山、麗州金山、麗水金山、天一金山 安城金山、斗美金鐵、浩美金鐵
永興郡、定平郡 安邊郡 長津郡、新興郡	義州郡 龜城郡 宣川郡、定州郡 總城郡 雲山郡 昌城郡 朔州郡 熙川郡 寧邊郡 泰川郡	平原郡、大同郡 順川郡 平原郡、安州郡 价川郡、平原郡 成川郡、陽德郡 延白郡	長淵郡、松禾郡 平山郡 遂安郡	抱川郡 楊平郡、麗州郡 安城郡

慶北	江原				忠南				忠北												
義城金鑛地	高靈星州金鑛地	尙州金鑛地	奉化金鑛地	淮陽金鑛地	旌善金鑛地	洪川金鑛地	春川金鑛地	高城金鑛地	金化金鑛地	平康金鑛地	稷山砂金地	扶餘金鑛地	青陽金鑛地	保寧金鑛地	天安金鑛地	永同金鑛地	清安金鑛地	清州金鑛地	忠州金鑛地		
大世金山、延命金鑛	義順鎮山、義城藏山	高靈鎮山、雲水金山、星山金鑛、青汶金鑛	尙州金山、黃金鎮山、新村砂金鑛	奉化金山、金井金鑛、春陽鎮山、蓮花鎮山、牛德金鑛、牛口鎮山、眞谷金山	同昌金鑛	沒雲鎮山、羅表鎮山、北洞金山、泉浦金山、三助金鑛	東亞金鑛、昌舜金鑛、月雲鎮山、堂岷金鑛、雲上金山、三浦金鑛、小林洪川鎮山、道寬里金鑛	乃城金鑛、融泉金鑛	海東金鑛、養珍鎮山	白易山鎮山、法首鎮山、金化鎮山	平康鎮山、佑益鎮山	稷山金鑛、中央鎮山	林川金山、石城鎮山、扶餘金山、龍城鎮山、利仁金山	九峯山金鑛、梅溪金山、龍馬里金鑛、北貨金山、昭和金山	滿里金山、陽地里鎮山、大山金鑛、鷄山金鑛、海美金鑛	成歡金鑛、旺地金山、溫陽金山	興德鎮山、黃淵金山、金泉鎮山、千番金鑛、月里里金鑛	嘉興鎮山、永同金山、昭和金山、矢頂金山、老川里鎮山、鮮山金山	七寶金鑛、清安金鑛	外川鎮山、鳳舞鎮山、忠北金鑛	大菱鎮山、龍堂金山、辰巳鎮山、智堂金鑛
金泉郡	義城郡、軍威郡	高靈郡、星州郡	尙州郡	奉化郡	淮陽郡	旌善郡、三陟郡	橫城郡、洪城郡	春川郡	高城郡	金化郡	平康郡	天安郡	扶餘郡、公州郡	青陽郡	保寧郡、洪城郡	天安郡、牙山郡	永同郡	槐山郡	清州郡	忠州郡	

全南	全北	慶南		
寶城金鑛地	順天金鑛地	光陽金鑛地	蟬岩金鑛地	茂朱金鑛地
寶城金鑛地	順天金鑛地	光陽鑛山、鳳岡鑛山	蟬岩金鑛、魯境金鑛、斗洞金鑛、靈臺金鑛	三加里鑛山、山野赤城鑛山
寶城金鑛地	順天鑛山、銀店鑛山	全寶金山、龜山金鑛、鳴鳳鑛山		母岳金山、全州鑛山、月田金山、三菱金堤砂金鑛、永川里鑛山
				鳳鏡山、流溪鑛山、龍州鑛山、大興鑛山
				龍藏鑛山、咸安鑛山、郡北鑛山、伏龍鑛山、合城鑛山、鯉山鑛山、陽德鑛山
				漆谷鑛山、飛龍金鑛
				咸安郡、昌原郡
				統營郡
				陝川郡、居昌郡
				全州郡、金堤郡
				長水郡
				光陽郡
				順天郡
				寶城郡、順天郡

右の外金鑛地帯と認められるものには平北の厚昌金鑛地（厚昌鑛山）黃海の委岱金鑛地（委岱鑛山）慶北の英陽金鑛地（英陽鑛山、七寶鑛山）慶南の蔚山東萊金鑛地（斗西鑛山、蔚山金山）等あるも未だ著しき鑛産を見ず。

第三節 金銀鑛賦存の狀態

然らば是等金鑛地帯に於ける金銀の賦存狀態は如何なる鑛床關係を有せりや、是れは其地方により夫々特徴あるも大別して含金石英脈、接觸鑛床、砂金鑛床の三に區分する事を得、就中含含金石英脈は最も普通の金銀鑛床にして極めて古き時代の前寒武利亞界に於ける片麻岩類、花崗岩類に胚胎せられ脈

狀を爲して或は並行し、或は交叉し脈幅は常に膨縮して或は扁豆狀を爲し、或は尖滅するものあり、脈質の大部は石英よりなるは勿論なるが、種々なる硫化礦物を伴ふ場合甚だ多し、この隨伴礦物の主なるものは黃鐵礦、磁硫鐵礦、方鉛礦、閃亜鉛礦、毒砂にして黃銅礦、白鐵礦、輝銀礦、輝水鉛礦、輝銻礦、長石、雲母、方解石、重石、螢石等を含むこともあり、脈石たる石英は無色透明、乳白色、暗灰色等種々ありて形狀も塊狀をなすもの結晶をなすもの玻璃狀を爲すもの等あり、金銀は石英中に鱗狀或は樹枝狀稀れに毛髮狀を爲して存す、最も普通なるは隨伴硫化礦物中に含有せらるゝものにして金は主として黃鐵礦に銀は主として方鉛礦に存するものなり、朝鮮の主要鑛山の多くは此種のものにして雲山、昌城、三成、光陽、三徳等皆此鑛床に屬す次に接觸鑛床に屬するものは北鮮西鮮地方に多くこれは古生代の石灰岩と花崗岩との接觸部に生じたる不規則なる鑛塊にして、黃銅礦、斑銅礦等の硫化銅鑛を隨伴せる場合多く遂安、厚昌、殷山は其代表的のものなり、其他此種に屬するもの多き如きも未だ研究充分ならず。

砂金鑛床は朝鮮に於て最古くより發見せられたり、金鑛の母岩たる片麻岩、花崗岩等の風化により分解崩壞して土砂となり雨水、河流は其粘土を拉し去り茲に洶汰漂積せられたる砂金鑛床を構成す、されば砂金鑛床の上流には必ず、金銀鑛脈の存在せらるるものにして、砂金が金鑛脈の賦存を指示し有名なる金鑛山發見の端緒を爲せる例少なからず、現に各地に分布せる金銀鑛山には必ず大小の砂金

鑛床を伴ふ、砂金床の内最も有名なるは順安(平南)、稷山(忠南)、金堤(全北)、長津(咸南)等にして此の外地理的に一括すれば重なるものは次の如し。

咸	北	會寧郡、慶源郡
咸	南	永興郡、定平郡、新興郡、長津郡
平	北	義州郡、寧邊郡、昌城郡、龜城郡、泰川郡、朔州郡
平	南	順川郡、成川郡、平原郡、价川郡、大同郡
黄	海	新溪郡、載寧郡、松禾郡、延白郡
京	畿	驪州郡、安城郡、廣州郡
忠	北	清州郡、永同郡、忠州郡、槐山郡
忠	南	保寧郡、天安郡、青陽郡
江	原	春川郡、淮陽郡、金化郡、旌善郡
慶	北	尙州郡、義城郡
慶	南	陝川郡、居昌郡
全	北	全州郡、金堤郡
全	南	光陽郡、谷城郡

全鮮砂金鑛區の數は金銀鑛鑛區の内約一割程度にして昭和二年末現在は一〇〇鑛區を算し最も多かりしは大正六年の三六四鑛區なり。

第四節 重なる金鑛地の説明

左に重なる金鑛地に就て概略を説明すべし。

一、咸鏡北道

(1) 慶源砂金地(慶源郡龍德面、東原面)

慶源の南五里なる古乾原三鶴洞間より西方一里半に位する羅丹洞間は往古より砂金地として知られたり、最近にては東原面の金月洞砂金鑛山、流水鑛山、龍西洞金鑛等の砂金鑛ありて知らる、沿革としては明治四十二年頃より採金せられた歴史あるのみなり、地質は古生紀の砂岩、粘板岩、疊岩の互層なるが砂金は溪間の沖積層にありて厚さ三四尺より十餘尺に達す砂金の品位は八五〇なり。

(2) 會寧金鑛地(會寧郡鳳儀面、西上面)

咸鏡線富寧會寧間鐵道線路の西側に當り本金鑛地あり、明治十八年頃より砂金の採取行はれ、上面砂金地及王城洞砂金地として名あり、昭和二年地境洞に於ける五峯鑛山が稼行せられしより本地方は一躍して重要な金鑛地となれり、地質は古生層に屬する千枚岩、粘板岩、疊岩の互層より成りて閃

雲花崗岩の噴出あり、五峯鑛山は綠色粘板岩中に於ける無數の閃綠岩脈により生成せられたる諸種の鑛脈にして脈幅一尺内外品位は含金萬分の一含銀は金分と同量なり。

(3) 清津金鑛地(富寧郡青岩面)

咸北の要港清津府の北側に接したる至便の地にあり、清津港、埋立工事の際河川より砂金を發見せしは有名なる談となれり、其の上流、斑竹洞、古竹洞は明治三十七年の頃より砂金を採取せられ大正十五年土幕洞に於ける青岩金山が稀有の良鑛を産出せし以來、本地方の金鑛熱は驚くべき勢を以て傳播し一時富寧、會寧兩郡に於ける金鑛出願件數は百餘に達せり、前記金銀出願件數表にて見る如く昭和二年の出願件數中一躍咸北が第一に上りしは、全く青岩金山の好成績に刺戟されたる結果よりなれり青岩金山は綠色粘板岩及花崗片麻岩より構成せられ、南北に走る蛇紋岩脈に沿ひて鑛脈を生成し其の延長四千尺に達せり、脈幅は一尺未満のもの二條ありて金品位は搗鑛々石より見るに平均十萬分の七となれり。

富寧郡には別に觀海面に金鑛あり、水洞金山、石甫金山はこれに屬す、母岩は角閃花崗岩にして脈幅二寸乃至一尺七寸なり。

二、咸鏡南道

(4) 新興金鑛地(新興郡元平面外二十三面)

大正三年六月總督府は咸興、新興兩郡内に於ける二十四面を包括し其の内に於ける金銀外五種の鑛物を保留せり、金鑛の中心地は元平面、加平面、東古川面、西古川面、下岐川面、下朝陽面にして咸興に近き徳川面、西湖面にも産金あり、保留區域東西十二里半、南北十七里、其面積一四七・五方里ありて既に一部の保留は解除せり。

其盤は主として片麻岩系の花崗質、片麻岩及雲母片岩の互層より成りて花崗岩を噴出し、溪間には處々沖積砂礫層を發達し砂金を含む、砂金の品位は八〇〇以上なり、鑛脈の大なるは元平面、新成里の新成鍾にして平行脈として八仙、佳庄、魚頭、鉢銅の各鍾あり、皆同一種の含金石英脈を爲せり、走向延長千尺乃至四千尺、傾斜五百尺まで採鑛せらる、脈幅四寸より十數尺に達し、各種の硫化鑛物を隣伴せり、金は重に黃鐵鑛に伴はれて十萬分の三あり、銀は主に方鉛鑛に含まれて萬分中四あり、西湖面に於ける酸化鑛は含金萬分の一にして徳川面に於ける孔雀石は含銀萬分の六あり。

(5) 定平金鑛地(定平郡府内面)

定平邑の北方二十四五丁に有名なる咸大洞鑛山あり、定平金鑛地と命名せる地方は咸大洞鑛山を中心としたる府内面一帯を稱す、一部は高山面にも達す、明治二十八年頃より砂金地として知られたるものにして咸大洞鑛山は明治三十年より創業せられ數度開廢せられて大正六年以降全く休業せり。

地質は花崗岩及片麻岩にして鑛床は含金石英脈なり脈幅三寸乃至二尺、黃鐵鑛と方鉛鑛を隣伴す含

金十萬分の一含銀十萬分の二程度なり。

(6) 永興金鑛地（永興郡德興面外五面）

永興金鑛地と稱せらるゝ地方は永興郡德興面、仁興面、鎮坪面、古寧面及定平郡長原面、文山面に跨る廣大なる區域に亘り北鮮に於ける重要な大金鑛地帯なり、本地域内には馬場、鎮興場、旺場等の樞要市場ありて交通は永興邑に連絡し甚だ便なり、永興、翰洞里、定平、仁興、翰興等の多數金山を有し、龍興江は郡内を東西に貫流す、其の沿岸地域は古來砂金を産する事を以つて名高く、上流は耀徳、倉坪に至るまで砂金地となり、下流は専ら江の北岸支流に沿ひて廣く分布せられ、永興郡金坡院、龍岩、金坡、菱洞、三洞、徳洞、定平郡新興里、徳化里、旺場附近は皆廣濶なる永興砂金地に屬するものなり、其の従業員も一時數萬人に達せりと稱せらるゝ、明治十七年より三十七八年頃迄盛にして大正三年に永興金山が閉坑され、次で仁興、翰洞里、三峰、慕老里、白安、定平、翰興等の諸鑛山出現となれり。

本金鑛地の山岳は花崗質片麻岩より成りて鑛床は扁桃狀を爲したる含金石英脈なり、永興金山に於けるものは脈幅最大八尺、翰洞里鑛山に於けるものは四尺ありて普通の金鑛脈に比し脈幅大なる方なり、随伴鑛物は普通硫化鑛、菱鐵鑛、磁硫鐵鑛を共有す、含金品位は十萬分の三又は四にして砂金の品位も六五〇より八五〇の間に變化せり。

(7) 安邊金鑛地(安邊郡衙益面外四面)

元山附近に鮮内有數の二大金鑛地帯あり、一は永興金鑛地帯他は即ち本金鑛地帯なり、此安邊金鑛地は衙益面、文山面、瑞谷面、鶴城面、安道面を總稱するものにして江原道、平康及淮陽の金鑛地は本金鑛地の延長とも見らるべき密接の關係あるものなり、龍池院附近の川床は明治十六、七年の頃より砂金を採取されたり、金鑛脈の開掘は瑞谷面、安邊面に始まり最近にては南下して衙益面に於ける大嶺、徳興、瑞昌、東昌、安邊の諸金鑛が盛に稼行せらる、地質は黒雲母片麻岩、黒雲母花崗岩にして鑛脈は含金石英脈なり、黄鐵鑛、磁硫鐵鑛、方鉛鑛及閃亜鉛鑛の多量と菱鐵鑛、黄銅鑛の小量を伴ふ一尺以上の大脈よりは一、二寸の小脈の方品位良好にて後者は普通十萬分の五以上の含金あり、殊に細脈の酸化したるものには、甚だ優良なるものありて萬分臺を示すもの少からず、往古採取されし砂金も八五〇といふ高品位のもの、如し。

(8) 長津砂金地(長津郡北面外數面)

長津郡の砂金は古來有名なるものにして其の產地として知られしは皆長津江及其の支流の河床又は沿岸の沖積砂礫層中なり、就中新興郡東上面達阿里、長津郡新南面碓隅里、同北面高岩里、同郡内面三浦里、烏蔓里は明治の初年頃より採金せられて産額も多量に上りし如く一時數千人の鑛夫蟻集せりと謂はる、本地方は咸興より北方十七里乃至二十五里の地域にありて海拔千數百米突の高臺にあるが

爲、氣候は甚だ寒冷にして毎年九月末既に降雪を見る、地質は花崗質片麻岩の河床中に於ける砂礫層なり、地表より十尺乃至二十尺下に於て磐石の表面一、二尺の間に砂金粒あり、粒は細微を常とせるが一匁以上のものもあり、達河峠附近にては七十匁の大塊を産せし異例あり、金の品位は七〇〇―八五〇なり。

三、平安 北道

(9) 義州保留鑛區(義州郡廣坪面外二面)

大正三年六月總督府は義州、新興、尙州の三金鑛地帯を保留して自ら探鑛を試みたり、本鑛區は其の内の一に當る義州郡に於ける廣坪面、玉尙面、古寧朔面を區域として最長距離南北十一里東西六里、其面積四十方里なり、地質は正片麻岩、準片麻岩、綠色千枚岩、花崗岩、結晶質石灰岩にて長石、斑岩、玢岩等の岩脈を伴ふ、最も發達せる岩石は片麻岩、花崗岩にて鑛床は其中に胚胎されし含金硫化質石英脈なり、脈石は石英及少量の方解石にて黄鐵鑛、磁硫鐵鑛、硫化鐵鑛、黃銅鑛、閃亜鉛鑛及方鉛鑛を伴ふ、主なる鑛脈は玉尙面に於ける中臺谷鑛、廣坪面に於ける日傾谷鑛、松山嶺鑛、古寧朔面に於ける天麻鑛、桑谷鑛、達岐谷鑛、草直里鑛にして鑛幅平均二尺品位平均十萬分の二の含金あり。

(10) 龜城金鑛地(龜城郡館西面外一面)

京義線宜川驛より北東十數里の地域にある、館西面及天摩面は鮮内にて一、二を争ふ重要なる金鑛

地なり、是を龜城金鑛地と言ふ。

龜城郡内の金山は韓國政府時代に於て悉く宮内府の所有に屬せし爲、古來金鑛地として甚だ有名なものあり。

現在に於ける著名の金山は三成鑛山にして大正十二年末に現はれたる新金山なるが僅に四、五年の採行にて七百萬圓以上の産金を得し稀有のものたり、其鑛量の豊富たること、含金品位の優良なる事は人口に膾炙されし良鑛山なり、次いで龜城金山、安倉里鑛山は本地方に於ける最も古き金山にて今尙採行せらる。

地質は花崗片麻岩又は準片麻岩にて玢岩脈又は斑岩脈を伴ひたる金鑛脈を有す、鑛脈幅は最大五、六尺に達するものあれども普通一、二尺とす、鑛脈の数は無數あり、其中三成の卓脈、黃哥谷脈、十字脈、春鳴谷脈、龜城の筑波鑛、比叡鑛、富士鑛、日光鑛は有名なるものなり、品位は著しく變化して一定せず、龜城金山は十萬分の一乃至四、三成鑛鑛山は平均萬分の一の鑛石を出す。

(11) 宣川金鑛地(宣川郡新府面外五面)

京義線宣川驛附近より定州驛以北數里の地點に亘れる區域にて新府面、東面、宣川面、定州郡玉泉面、高峴面、龜城郡梨峴面を含み恰も龜城金鑛地の南方に位せるが鐵道沿線にある關係上比較的早く發達せり、三成鑛山の如き特別の良鑛山はなきも桃花金山、新府面金山、吉祥鑛山、郭山鑛山等著名

のもの甚だ多く、明治三十五年頃、吉祥鑛山にては數千の鑛夫蟬集して盛に稼行せし事あり、吉祥と郭山とは四十年頃英人により作業せられ多量の産金あり、宣川金山の鑛脈は其幅四十尺に達する偉大なるものにして桃花、新府面日峰は良鑛を産する事を以て知らる。

地質は花崗岩及花崗片麻岩なるが鑛床は裂罅充填の含金石英脈にて種々の硫化鑛を伴ふ事は勿論なり、本地方には萬分代の含金ある良鑛甚だ多く概して大脈より小脈の方良鑛なり。

(12) 雲山特許鑛區(雲山郡北鎮面外數面)

明治二十八年米國人は韓廷と協約を結び雲山郡一圓の一切鑛物に關する採掘特權を得たり、その區域は約四百平方哩の廣大なるものにして永年稼行の結果、現在は北鎮面を中心として其處に大岩及橋頭の二製鍊所を置き、大岩、橋頭の二大脈を始め數鑛脈を採掘しつつあり、雲山金鑛と稱し世界的に其名を知らる、此大岩、橋頭は元來同一鑛脈なるが中央を横斷する大岩川の斷層によりて兩脈に分離せられ其變位約四千尺あり、各脈は上下二枚に分岐して下磐脈を主脈と言ひ上磐脈をA脈と稱せり、延長は大岩、橋頭共に二千尺に達し、傾斜に沿ひ最深二千八百尺掘り下る脈幅は最大二十尺にて鑛石は諸種の硫化鑛を伴ひ、平均品位は十萬分の〇・八概して貧鑛なり、是等の鑛脈を胚胎せる母岩は花崗岩及複雲母花崗岩にて鑛脈は含金銀石英脈を爲す。

雲山金鑛は事業開始以來既に二十有五年の長日月に亘り常に終始一貫して八千二百萬圓の鑛産價額

を出せるは朝鮮金鑛界の白眉否東洋第一の稱ある所以なり。

(13) 昌城特許鑛區（昌城郡東倉面外五面）

明治三十四年佛國人は雲山金鑛に見倣ひて韓國政府と協約を締結し、明治四十二年より二十五箇年間の特許期間を得り、今日の昌城佛國人鑛山は即ち之なり。

東倉面外五面に跨り本鑛區の面積一億二千萬坪、事務所及製鍊所を東倉面大楡洞に置き、大楡洞鑛脈及東楡洞鑛脈の二脈を採鑛す。同時に地表探鑛を爲し、昌城面、田倉面、祐面は將來有望視せらる、元來本地方は平北に於ける主要なる産金地として雲山郡と共に知られ、高麗朝、李朝には砂金の採取されし形跡あり、地質は剝狀花崗岩、壓碎花崗岩等の花崗岩類にして準片麻岩玢岩をも有し、最も有力なる大楡洞鑛脈は其幅平均七尺E及Wなる二富鑛帶よりなりて「落し」の方向に沿ひたる掘下延長は千二百尺以上に降り、鑛石は石英質に黃鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛を伴ひ、平均の含金品位十萬分の一・六になれり、雲山に次ぐ大金鑛にして探鑛の結果將來を囑望せらる。

(14) 朔州金鑛地（朔州郡九曲面外五面）

本金鑛地は朔州を中心とせる九曲面、南西面、西北面、外南面、水豊面の六面に跨り、東は昌城特許鑛區に接し西は義州保留鑛區に隣し南は龜城金鑛地に續き北は鴨綠江を隔て、支那地となる、有望なる金鑛地により圍繞せられる本金鑛地も亦有望なる事勿論なり、されば本郡の砂金は各河流の河床

又は洪涵地に於て舊時より採取せられ、九曲川及大寧江流域は特に有名なるものなり、山金採掘の濫觴は明治四十一年朔州邑の北方隱上洞、隱中洞及延坪洞に於て始まる、朔州金山は古來著名なるものにして今の新延金山の舊名なり、正準片麻岩中に無數の岩脈あり、金鑛脈も又一種の酸性岩脈と見らる走向方面へは三百尺探掘せらる脈幅一尺乃至二尺合金含銀共平均十萬分の三にて萬分臺の良鑛もあり、外南面の三泰、橋洞の兩金鑛は比較的新らしき鑛山なるが品位甚だ良鑛にして合金十萬分の四より萬分の四あり、脈幅五、六寸より四尺に達し將來の發達を期待せらる。

(15) 熙川金鑛地（熙川郡熙川面外四面）

熙川邑を中心としたる熙川面、東面、西面、南面、北面の各面には小金鑛夥多あり、比較的新らしき開發にして有名なるものなし、金山として安突鑛山、清涼鑛山、菊花金鑛、三成金鑛を有す、内安突鑛山のみは古くより採行せられ、大正二年より大正十二年まで二十七萬圓の産額を擧げて休業せり、地質は剝狀眼珠片麻岩にて鑛脈は其剝理に平行して胚胎せる合金銀石英脈なり、安突鑛山の本鍾は延長五千尺脈幅平均五尺の大脈なるが、合金品位は十萬分の一又は二にて稀に萬分臺の鑛石を出す、清涼、菊花、三成の鑛脈は五寸より大なるは二尺五寸に至り合金は十萬分の四内外を普通とせり。

(16) 寧邊金鑛地（寧邊郡北薪峴面外二面）

寧邊邑の東北方又は雲山邑の西方に位置せる地方にて泰平面、北薪峴面南松面を指す本地方も亦小

金鑛地なり重なるものを北平金鑛となす、鑛床は薄片麻岩中にある鑛囊狀鑛體にて幅一尺乃至二尺を普通とし、走向又は傾斜何れか一方にのみ連續する傾向あり、交代成因の疑をもつ品位は金十萬分の七にして方鉛鑛には含金含銀共に萬分の三を有す。

信魂金鑛は花崗片麻岩中にある真正の鑛脈にして一千尺の延長と一尺の脈幅とを有し、硫化鑛には含金十萬分の四含銀萬分の二をもつものあり、河川鑛山は砂金にして各金鑛の下流に當れる清川江流域を稼行し、砂礫層の厚さは三尺乃至六尺基岩より三寸乃至五寸の間に砂金粒あり。

(17) 泰川金鑛地（泰川郡江東面外二面）

泰川邑に近き江東面、東面、江西面は到る處に金鑛あり、殊に江東面は全面に亘り金を産す、比較的不便なる爲一部識者間に其有望なるを傳へられたるのみにて注目するもの少かりき、明治二十年頃江東面南松里、天福里、龍岩里の沖積層に約百名の採金夫集まり一箇年約三百匁の砂金を産出したる傳説あり、今も尙此附近は重要な産金地として一福、泰成、天溪、泰褸、泰川の諸金山相隣接し往時盛に掘採したる露頭を漁りつゝあり、鑛床は巨晶花崗片麻岩中にある一尺内外の小脈にて帶狀を爲して數千尺乃至二里に至る、脈質も石英質、粘土質、硫化鑛質等あり、含金は十萬分の二より五に變化し金粒は大なり將來開發さるべき金鑛處女地たるべし。

四、平安南道

(18) 慈母山金鑛地（平原郡東頭面外四面）

本金鑛地の著名なる金鑛山は日置鑛山と大倉鑛山なり、共に東頭面にありて相接す、明治三十五、六年頃金鑛を開掘せしに始まる鑛脈は夥多ありて慈母山城跡の南方に展開し、日置の備後、安藝、肥前、肥後、薩摩、大倉の彦山、鶴山、青龍山、向山は重なる鑛脈なり、各脈ともに準片麻岩に胚胎せられ、含金銀石英脈として鍾幅一尺乃至十尺、含金は十萬分中三内外にて含銀は萬分の一又は二なり、比較的銀分多く南方にある三峯鑛山の如きは金十萬分の三銀萬分の三五・〇を示せり、平原郡東頭面、公平面、順安面、順川郡豊山面、大同郡龍岳面に跨る本地方は平壤安州間、平壤順川間の兩鐵道線路に夾まりて交通は至便なり。

(19) 順安砂金地（平原郡石岩面外五面）

京義線順安驛より鐵道線路に沿ひ北方石岩驛に至る間に両方廣漠たる平野は大同江の支流たる普通江の順安砂金地なり。

往古より朝鮮に於ける著名なる産金地として廣く世人に知らる、韓國政府は當地方が交通の要路に當れるが爲支那の使者により此地の産金を概奪せらるゝを懼れ、之が隱蔽の手段として一時封鎖せし事さへありたり、明治三十年頃から採金を開始して三十八年には採金夫一萬人を算し盛況を呈せり、其有名なるものは淺野順安砂金鑛にして明治四十一年より大正十五年まで二百八十一萬圓の産金あり

其上流東頭面に於ける龍田岩砂金鑛は大正六年より十五年までの間に四萬五千圓を産出せり、此地の基盤を爲せる岩石は片麻岩類にして、其碎屑物たる粘土及礫の重層が砂金地を構造する第四系を爲せり、此砂金床の深さは十尺乃至三十尺にて下底三尺の間を甘土と稱し、砂金を含有す砂金は稜角磨滅の程度少く多少鑽滓状を爲し扁平状なるもの多く粒は普通小豆大以下なるが稀に塊金を出す、砂金の純度八三〇―八六〇なり。

(20) 安順金鑛地(安州郡雲谷面外六面)

安順金鑛地とは慈母山金鑛地の北部に接する地方にして、區域は安州郡雲谷面、東面、价川郡中西面、外西面、順川郡内南面、慈山面、平原郡東松面を含む故に地質鑛床共慈母山金鑛地と同一なり、金銀量は北するに従ひ含金に對し低下する傾向あり、最北の价川郡に於ける天王鑛山は少しく鑛床状態を異にし、下盤は石灰岩にて上盤は粘板岩なり、脈石として黝色石英を有す、脈幅五尺、走向延長七百尺を探鑛せられたり、安州郡雲龍金鑛も亦四五尺の大脈にて走向方面に約六百尺探鑛せらる、同郡昌成鑛山の梅南鍾、順川郡元峯鑛山の西、鑛脈も亦大なり。

(21) 成川金鑛地(成川郡三德面外數面)

本地帯は成川郡一圓に跨り且つ陽徳郡下龍面、九龍面に及べり、近來亞鉛鑛を以て有名なる地方なるが其間に介在せる金銀鑛は寧ろ銀鑛と稱すべき程銀分に富む、成川面麻田里には山頂に舊坑三十有

餘ありて明治以前には銀を稼行し、崇仁面興仁里に於ても銀鉛鑛を採鑛せられたる舊坑あり。又近來世界的銀鑛として名をなせるは三徳面に於ける三徳鑛山にして大正六年に發見せられ、爾來昭和三年に至る十二箇年間に百六十四萬圓の銀鑛產出あり、益々發展しつゝある良山なり、此地方の地質は陽徳層と稱せらる、砂岩、雲母片岩、粘板岩にして大石灰岩層により整合に成層せらる鑛脈は母岩の弱點に充填せられたる眞正鑛脈なるが一部接觸交代鑛床をも爲せり、岩脈は石英斑岩、砂長岩、煌斑岩等種々あり。

含金は十萬分の一内外なるが含銀は萬分の二より百分の七まであり、三徳鑛山にては平均千分の五の含銀成績を示す、鑛脈の幅は普通五、六寸にて一尺以上に膨脹する事もあり、脈の走向は良く連續す、本地方は特種の銀鑛地帯なり。

五、黃 海 道

(22) 延白金鑛地(延白郡海月面外三面)

延白郡内の砂金地として辛存官、金野及栗浦の三箇所を擧ぐ明治三十五年頃盛に採金せられたり、就中栗浦は最も有名にして累々として丘陵の如く堆積せる土砂によるも其盛時を推量する事を得、栗浦金山が名を爲すに至りしは大正六年以來十一年間二百三十餘萬圓の産額を擧げたるものにて鑛脈の掘下進行二千尺に及び漸く不況に陥れり、本地方の地質は準片麻岩に正片麻岩を夾有したるも

のにて巨品花崗岩を噴起せしむ、鑛脈は緩傾斜にて十二、三度を普通とし殆ど水平を爲せる處もあり、脈幅は三四尺含金品位は十萬分一乃至五程度なり、鑛石は白色石英にて硫化物は少なく海月面に近き御谷面、雲山面、京畿道開城郡西面にも同種の金鑛を産す、金野、金谷、菊根、西面の諸金山は將來開運の機あるべし、禮成江なる天然の運河を有する本地方は大金鑛地たるべき自然の運命を有するものと言ふべし。

(23) 長淵松禾金鑛地（長淵郡樂道面外五面）

松禾郡松禾面及栗里面を北端として長淵郡蓮井面、蓬來面、樂道面に至る六面は小鑛山所在地なり、松禾郡の砂金は一時有名にして松禾邑の西方約一里、今の松禾金山區域は内店砂金地と稱せられ、松禾温泉の西方一里、金村は中店砂金地と呼ばれ、永橋の東方一帯は外店砂金地と稱せられて最も廣大なる地域を占む、是等の砂金は明治二十五年頃最も盛に採掘せられたり、地質は松禾附近に粒狀黒雲母花崗岩あり、長淵郡は古生層の雲母片岩及石灰岩よりなり、鑛床として松禾鑛山は網狀脈、溫泉鑛は正規鑛脈、樂山鑛山は夥多の細脈よりなり、其の王樂脈は多量の方鉛鑛を含み銀鉛鑛として知られ、長淵鑛山は金鑛以外に銅鉛亜鉛の交代鑛床を以て有名なり、金脈は一尺以内にして含金は十萬分臺より千分臺まで變化せり概して北方は金分に富み南方は銀分に富む。

(24) 平山金鑛地（平山郡古之面外三面）

京義線物開驛附近より南方西峯面、古之面に至る區域には古生層の粘板岩、石灰岩及び長石の斑晶を有する黒雲母花崗岩の發達するあり、古生層中には金銀銅鑛の交代鑛床を有し、花崗岩中には金銀鑛の網狀脈を有す未だ著名のものなし。

(25) 遂安特許鑛區(遂安郡大千面外四面)

彥真山を中心とする水口面、泉谷面、梧桐面、大千面、道所面の五面には數百年前より砂金の採取ありたり、明治三十八年英人により特許鑛區が設定せられ爾來、水口面の笏洞と大千面の楠亭とに於て大規模に稼行せられたり、地質は古生層の變質石灰岩、粘板岩及び雲母片岩の累層よりなり、鑛床は彥真山の花崗岩噴起によつて兩岩の接觸部に生成されたる有名なる接觸交代鑛床なり、接觸部の幅は平均四百五十尺噴出岩の周圍約十一里の間に鑛帶を胚胎し一大鑛床をなせり、本鑛體の下底は約一千尺迄稼業せられ貧鑛となりし理由を以て中止せり、大正四年より昭和二年まで十八箇年間に二千七百三十三萬圓の鑛産額を擧ぐ、合金は原鑛中に平均百萬分中の七・五を有し、選鑛の結果汰鑛として十萬分中一三・〇まで上昇せり含銀は合金の約二倍にして且つ銅分を多量に含む。

六、京畿道

(26) 抱川金鑛地(抱川郡永中面外二面)

抱川邑の北東二里餘萬世橋里と稱する一村は明治三十五年頃一時砂金を採取せし事あるが其の上流

に當る永中面には一東鑛山、永中鑛山と呼ぶる、二金鑛相隣接し永中は乾式製鍊場を、一東は機械選場を建設し盛大に稼行せり、地質は眼球片麻岩及び複雲母花崗岩にして煌斑岩の岩脈を露出し、鑛床は合金石英脈にして岩脈に沿ふ事多く或は又岩脈によつて切斷せらる、鑛脈の幅は一尺内外にして黄銅鑛、黄鐵鑛、蒼鉛鑛等の硫化鑛を多量に含み合金品位は試料採取個所によつて相違あるも普通十萬分中一・五合銀も同量なり、永北面文岩里に於ける永北金鑛には方鉛鑛及亞鉛鑛を多く産す。

(27) 楊平金鑛地（楊平郡楊東面外三面）

楊東面黃巨論山を中心とせる一里以内の地は複雲母花崗岩より成立ち、至るところ、採掘場及び舊坑を見る、溪間には水車搗鑛機の設けられたるもの多し、此附近に於ける金鑛は金旺鑛山、三王鑛山、東旺金鑛にて青雲面に於ける高麗金鑛、大成金鑛も亦本金鑛地に入るべし、大正の初の頃最盛に採掘せられたり、脈幅は一尺内外にて扁豆狀を爲し稀れに四五尺に達するものあり、品位は不等にして貧鑛多きも稀れに良鑛を産す、驪州郡北内面の驪州金鑛は元玉女峯金鑛と稱して其大露頭は脈幅數十尺あるが晶簇質石英にて少量の硫化鑛を伴ひ比較的銀分に富む、稍隔りたる金砂面にも灰色花崗片麻岩中に胚胎されたる脈幅五寸乃至六尺の金鑛脈ありて、明治四十四年頃より稼行せられ麗水金山、天一金山は其重なるものとして金分よりは銀分を多く出す。

(28) 安城金鑛地（安城郡金光面外二面）

本鑛地は金光面、寶蓋面、瑞雲面に跨り南は忠南の稷山砂金地に續く京南鐵道沿線にありて安城邑に近く至便の地なり、最近有名なるは安城金山にして千分の四より百分の八に至る甚だ優良なる銀鑛を産す、地質は花崗片麻岩なるが鑛脈は柱長岩及煌斑岩に沿つて發達せる乳白色石英質の濃紅銀鑛、輝鉬鑛の縞狀或は斑狀に含有せるものにして脈幅六寸より五尺に膨縮し走向六百尺を採鑛されたり、附近に於ける斗美、浩美、積財の金鑛も亦同種のものなるが採鑛不充分なる傾向あり。

七、忠清 北道

(29) 忠州金鑛地（忠州郡仰城面外一面）

京南鐵道長湖院驛の東方數里の地點にある仰城面、老隱面の二面には昔より金脈多くして盜掘盛行はれ國望山、寶連山と稱せらるゝ、花崗片麻岩の丘陵を廻る附近には二寸より三尺に至る含金石英脈が到る處に賦存す、大菱鑛山、龍堂金山、辰巳鑛山、智堂金鑛等の諸金山は相隣接し採掘せり、本地方の金鑛は黃鐵鑛と方鉛鑛を隨伴し金は多く方鉛鑛に伴はる、往々稀有の良鑛即ち「ノダチ」を産す、辰巳鑛山は一時機械製鍊場を建設して盛に稼行し今は大菱鑛山の名最も高し、本地帶の東方は有名な「タングステン」水鉛の産地なり。

(30) 清州金鑛地（清州郡南二面外三面）

清州邑の南方南一面、南二面、文義面、芙蓉面には合金の甚だ高き小脈多し、明治四十四年頃外川

里附近に砂金を採取されて大正四年に外川金山の金鑛脈が発見されたり、本金山は青色の準片麻岩内に胚胎されたる數寸の細脈を採掘するものたるが含金黄鐵鑛より成立して平均の金品位百分の一に當り、小鑛山乍ら相當の純益を擧げ得たるものなり、附近に於ける鳳舞鑛山、忠北金鑛等皆同種のものに屬し、含金の高き點に於て特長あり、鑛脈が「レンズ」形を爲して尖滅し易きと脈幅小なるが缺點と言ふべし。

(31) 清安金鑛地（槐山郡清安面外二面）

鮮鐵忠北線に沿へる沙梨面、清安面、會坪面には處々に砂金を産す、會坪面三巨里龍江里、清安面孝根里、沙梨面に近き虎岩砂金地の如き明治三十五年頃より採金せられたり、龍江里に於ける清安金鑛は黒雲母花崗岩より成り數寸より十二尺に達する大脈にして、品位含金十萬分一富鑛帶の延長は約六十尺あり、岩脈を伴ふ嘗て獨國人により稼行せられたり、孝根里の七寶金鑛も亦大脈なるが却て細脈の品位良好なり、一般に銀は金よりも多く存す、陰城郡金旺面の無極金鑛は高麗朝時代より朝鮮五大金産地の一として砂金を採取されたる歴史あるが、本金鑛地の延長と見做すべきものにて此地方に於ける有名なる金山なり。

(32) 永同金鑛地（永同郡黃淵面外六面）

永同金鑛地と稱するは京義線黃淵及秋風嶺兩驛間の南北に亘れる地域にして、永同郡黄金、梅谷、

上村、永同、楊江、黃澗及龍化の七面に及び東西幅約二里半、北々東より南々西に至る延長八里、南朝鮮に於ける一等の金鑛地なり、明治初年の頃梅谷面老川里附近の砂金採取が濫觸の如く、記録としては明治三十八九年同面長尺里泥村に於て砂金を採取せしに始まる、山金の發見は極めて新らしき歴史を有し、明治四十四年の交同面水院里の鑛脈探掘に初まり、次で梅谷面、上村面、黃金面の鑛脈發見となれり、大正四五年の頃には年産金が十五萬圓を下らず、是れ皆簡單なる水車搗鑛によりしものなり、本金鑛地帯の鑛脈は其數甚だ多くして約二百に達す尙發見の餘地あり、母岩は總て剝狀花崗岩にして其剝理に沿ひ數寸乃至二、三尺の石英脈發達す、弓村里に於けるものは幅十二尺に達し、佳景洞にあるものは延長二千餘尺に達す、良鑛には必ず黃鐵鑛、方鉛鑛、黃銅鑛、閃亜鉛鑛、磁硫鐵鑛等の硫化物を夾雜し、自然金及特種の良鑛は地表近き酸化帯に發見せらる、稼行せる鑛石は含金十萬分の一より五まであり、下底への探鑛は最深百五十尺程度にして幼稚なる徳大法に因る爲め地表探掘に過ぎざる有様なり、技術と資本の流入によつて本金鑛地は南鮮に於ける産金地としての價値を現はす時期あるべし、有名なる金鑛は嘉興、永同、昭和、月田里、矢項、三峰野、老川里、鮮山、金泉、興徳、黃澗、千番、林山、敦大里、黃岳山なり、慶北金泉郡の大也、延命も亦本金鑛地と接す。

八、忠清南道

(33) 天安金鑛地(天安郡成轍面外三面)

京釜線成歡驛より西方牙山郡屯浦面に到る低き丘陵には石英脈が處々露出して自然金を有す、元稷山金礦の一部として存せしを減區せし爲め大正十二年より旺油金山、成歡金礦を成立せり、地質は白雲母花崗岩にして鑛脈は幅一尺内外石英質に黄鐵鑛、方鉛鑛の少量を伴ひ含金十萬分の一より萬分の二に至り平均して十萬分の三を示す、地表風化の爲め地盤軟弱にして下底を知る事能はざるも小規模の金山として適せるものなり。

(34) 保寧金鑛地(保寧郡川北面外數面)

保寧舊邑より北方洪城郡廣川里に至る道路の東方、丘阜地には小規模の金鑛が約一里半の間存在せり、鑛脈は略南北に走り北方洪城郡廣川面、長谷面、洪東面を通過して唐津郡へ向へり、重なる金山は川北面滿里金山にして大正八年より引續き採鑛せらる、地質は主として角閃片麻岩、雲母片岩等の準片麻岩よりなり、鑛脈は黄鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛及黄銅鑛を有せる白色堅緻の石英よりなれり、脈幅は五寸乃至二尺滿里金山に於けるものは十二尺に達す。其他の金山は川北面の鳳頭、保寧、青所面の竹林里、陽地里、青巖面の蟻坪里なるが、品位は不同にして十萬分の一より八まで移動せり、滿里金山の産額は大正八年より昭和三年迄十年間に十三萬餘圓を産出せり。

洪城郡、瑞川郡に於けるものは本金鑛の北方に當り、母岩は剝狀複雲母優白花崗岩と、石墨質千枚岩、砂岩、珪岩、石灰岩より成り、鑛脈は晶簇質石英脈又は玻璃質石英脈となれり、稀れに良鑛を

産するも概して脈幅小にして貧鑛多し。

(35) 青陽金鑛地（青陽郡斜陽面外五面）

青陽邑の南方は幅十町延長一里に亘る一大平原なり、其南隅に當る金井里附近は有名なる砂金地にして明治三十年頃一千名の採金夫入込み多量の産金あり、約五十町の地積より二百匁を出せりと傳へらる、本金鑛地域は斜陽面、青陽面、化城面、飛鳳面、雲谷面、赤谷面に跨り南北約七里東西四里の廣表を有す、保寧金鑛地は其西側に隣接するものなり、地質は準片麻岩にして之を貫き、花崗片麻岩と花崗岩、煌斑岩等の岩脈噴出す、鑛脈は概ね岩層の走向に沿ひて發達し、南北又は北東々に走る脈幅は數寸乃至二尺を普通とし、青陽面軍糧里、斜陽面興山里に於けるものゝ如く六尺に達するものもあり品簇質石英脈は黄鐵鑛を散點するも一般に貧鑛にして、乳白色石英は種々の硫化鑛を伴ひ、萬分臺の含金あるものあり、重なる金鑛を斜陽面の九峯山金鑛、興山里鑛山、軍糧里鑛山、龍馬里鑛山、雲谷面光成金山とす、九峯山金鑛は忠南に於ける第一位の金山として知られ、明治四十四年より昭和三年に至る迄十八年間に三十萬圓の産額を擧げ將來をも囑望せらるゝものなり、金井里より下流約二里、鶴川里に至るまでは善く開掘採金せられたる砂金地なり、赤谷面美堂里に於ける三晶金山、甲山金鑛は花崗片麻岩中にありて二三寸の細脈を縦行せるが品位は甚だ良好にして十萬分の六より萬分の一以上を示し硫化物多し。

(36) 扶餘金鑛地 (扶餘郡場岩面外四面)

公州南西約三里なる公州郡木洞面利仁里の東方にある城頂山より起つて南西に走り、淵川面及扶餘郡草村面、石城面、場岩面、林川面に至る金鑛地あり、其幅半里乃至一里延長約七里に達し、縱横に發達せる道路を有して湖南線論山又は江景驛に近く交通は至便の地なり、本區域に於ける重なる金山は林川、石城、扶餘、龍城、利仁の諸金鑛にして就中林川鑛山は著名なるものなり、大正六年より昭和二年までに四十萬圓の産額を擧げたり、地質は複雲母花崗岩及び花崗片麻岩にして巨品花崗岩及煌斑岩の岩脈が之等の岩類を貫く、晶簇質石英脈たる硅石鑛は一般に母岩片を夾雜し僅に黃鐵鑛を散點し稀れに方鉛鑛を見る、硫化鑛脈は灘川面附近に多く諸種の硫化物を含む、金は黃鐵鑛及び毒砂の中に銀は方鉛鑛の中に多く存す、往時の稼行鑛山は何れも多孔質酸化鑛の採掘なりき、今や既に硫化鑛採掘時代に至れるものなり、脈幅は一尺内外にして其數頗る多く品位は含金十萬分の二より十萬分の七八まであり、時に萬分臺に上る鑛石を發見する事珍らしからず。

(37) 稷山砂金地 (天安郡笠場面外二面)

天安郡笠場面良瓮里に東洋一の砂金鑛區ありて稷山金鑛と稱せらる、京南鐵道笠場驛へ一里至便の地にあり、當地は古來安城金山と稱し、韓國宮内府に屬し相當に重要視せられたる金山なるが明治三十三年宮内府は日本の濫澤、淺野兩氏に稷山を中心とせる東西約六里、南北四里の地域に於ける一切

鑛物の採掘權を許可し種々の協約を締結したり、明治三十八年米國人と共同經營の契約成立し、爾來稷山鑛業株式會社なる名稱の下に今日まで之を繼續せり、砂金は試錐の結果其豊富なるを確め砂金浚漑機を使用して大規模の採金を爲せり、明治四十一年以降昭和二年五月に至るまでの砂金採取高は五百萬圓にして内大正七年浚漑機使用後の採取高は四百萬圓なり、山金稼行の大部分は中央鑛山に移轉せり、其地質は花崗岩大部分を占め片岩片麻岩等より成る、鑛脈は花崗岩株の縁邊に生じたる鑛泉作用の石英脈と花崗岩株の放冷に因る裂隙に沿ひ生成せられし石英脈との二あり、前者即ち他働作用の鑛脈は弧形を爲して延長南北五里に亘り點々鑛脈を露出せり、含金の豊富なるは花崗岩と片麻岩との接觸面に孕胎す、後者は自働作用による裂隙にして含金不良なるが普通なり、良瓮里に於ける鑛脈の採掘は水平坑道最大延長二、〇〇〇尺、最深一、〇〇〇尺に達せり、鑛脈最大十二尺平均五六尺にして鑛石は石英に硫化鑛物を散點し品位良好なり、京畿道安城金鑛地は本砂金地の北方に隣接せり。

九、江 原 道

(38) 平康金鑛地(平康郡榆津面外一面)

京元線洗浦驛より西方約七里、高挿面と榆津面と相接する處、即ち馬輪里附近に本金鑛地あり、三防驛よりすれば四里にして達せらるゝも麻桑山と稱せらるゝ高嶺を横斷せざる可らず、馬輪里の溪流は距今四十年前即ち明治二十年の頃、砂金を採取せられし事あるも山金に就ては知識なかりしが、大正

十二年始めて内院鑛山に於て鑛脈を發見せられたり、爾來殆ど民家なき此山間は忽ち金鑛地と化し、平康、馬輪、内院の三金鑛は續々良鑛を産出して其名を著はすに至れり、馬輪、内院兩山は最近佑益と改稱せり、地質は粗粒狀黑雲母花崗岩にして山頂には石灰岩を存す、鑛脈は花崗岩中に存する石英質鑛脈と石灰岩中に存する交代鑛床とあり、兩者は母岩により夫々生成状態を異にせるものにして山上は硫化物に富み下底は概して石英質に富む、脈數夥多ありて脈幅一尺より三尺に至り品位は一定せず、方鉛鑛の存在比較的多くして鮮内に於ける鉛鑛の産地なり、又銀店洞なる地方は一時銀鉛鑛を採鑛せしことありと稱せらる、本區域の北に接して咸南安邊金鑛地あり。

(39) 金化金鑛地（金化郡遠北面外一面）

白易山の南方、遠北面、岐梧面の兩面には硫化鑛物を隨伴する銀鉛鑛あり、地質は古生代の石灰岩及陽徳層よりなれり、鑛床は交代鑛床に屬し塊狀、脈狀、鑛染狀、條線狀又は雲狀等種々不規則なる形狀を爲せる鑛體の集合にして母岩との境界不明なり、鑛床の上部は多く銀鉛鑛にして下底は亞鉛鑛、銅鑛及硫化鐵鑛を増加する傾向あり、故に本地方は銀鑛と稱するよりも寧ろ鉛、亞鉛鑛賦存地と稱する方を可とすべく岐梧面に於ては特に諸種の硫化鑛多し、砂金としては遠北面堂峴砂金地を有名とす、基盤は陽徳層なるが砂礫は上流より來りし花崗岩及片麻岩にして表土の厚さ三十尺に及ぶ、砂金は粉金にして時に指頭大の粒金あり、明治三十年頃獨逸人により採金せられしことあり、本地方の鑛山は

白易山、法首、金化等あるも皆銀鉛鑛を目的とし含金量位は百萬分の二にして含銀品位は普通千分の一乃至二あり。

(41) 高城金鑛地（高城郡新北面）

金剛山溫井里東方約一里の地點にある養珍里及龍溪里に金鑛あり、花崗片麻岩中にある白色堅緻の石英脈にして黄鐵鑛を含有する數條の鑛脈よりなる其幅五寸より五尺に至り、稀れに萬分の一の良鑛を出すことあるも其多くは貧鑛なり。

(41) 春川金鑛地（春川郡西上面外三面）

春川邑の北方に當る西上面、新北面、北山面、東面に小金鑛あり、地質は準片麻岩類にして各處に灰色壓碎花崗岩を噴起せしめ、白色石英に硫化鑛物を縞狀に散點せる四寸乃至一尺五寸の鑛脈よりなり、方鉛鑛の塊狀又は脈狀を爲すものを有せり、北山面に於けるものは舊時銀鑛として稼行せしものゝ如し其重なるものを融泉金鑛と稱す、同地より春川を通過する照陽江には砂金を産す、砂礫層は三尺乃至三十尺にして含金量は一坪に付一分乃至一匁なり、乃城金鑛は乳白色の石英脈にして脈幅一尺内外その上盤四寸に硫化物を濃集せしめ十萬分の五の含金を有す。

(42) 洪川金鑛地（洪川郡斗村面外八面）

本金鑛地は洪川郡全部に亘り一部横城郡晴日面に至る廣大なる區域を占む、南面陽徳院は韓國政府

時代より産金地として知らる、其他各面に亘り金鑛脈數甚だ多し、地質は黒雲母花崗岩及び黒雲母片麻岩にして鑛石は白色石英より成り淡灰色の部分を雜へ細品の黃鐵鑛を有す、黃鐵鑛に富める部分は含金豊富なり、脈幅數寸より四尺に至り含金品位は良好なるもの萬分臺あり、横城郡に於けるものは昔時鉛鑛として採掘せられし跡あり、本地方は交通比較的不便にして鐵道沿線に遠く、鑛業の發達は他地方に比し甚だしく遅れたる觀あり、最近に至り小林洪川鑛山、昌舜金鑛、東亞金鑛、月雲鑛山等の新らしく稼行せらるゝものありて將來の發展を期待せらる。

(43) 旌善金鑛地(旌善郡東面外二面)

本金鑛地は東面金鑛地と稱せられて大正十一年の春より遽に喧傳せられたり、其原因は淸岩里に於ける新脈より甚だ珍らしき良鑛を發見せられたるによる、金鑛の中心たる東面は旌善邑の東方四里、江原道東海岸に近き脊梁山脈に沿ひて海拔二三千尺の高地にあり、鮮内に於ても最も不便なる山間なり、明治二十一年頃より華表洞、淸岩里、沒雲里、汗峙里、鳶浦は砂金の産地として知られ、大正五年に沒雲里の主要鑛脈が發見せられしが、大正十一年淸岩鑛山に於て「ノグチ」を發見せし以來鑛區の出願は劇烈なる競争となり、新徳、泉浦、北洞、沒雲、華表の諸金山競ふて發達するに至れり、地質は寒武利亞紀に屬する大石灰層及粘板岩にして本地方廣大なる地域に敷衍し其間に噴出したる花崗質閃綠岩ありて運鑛岩と見做さる脈幅は數寸より一尺に至り、小脈多きも品位は甚だ良好にして普

通十萬分の二、三の鑛石中往々自然金の塊及「ノダチ」を發見せらる本區域は臨溪面及三陟郡下長面に及び下長面三助金鑛は最近に於て名あり。

(14) 淮陽金鑛地（淮陽郡下北面外二面）

上北面、下北面、蘭谷面の三面に跨る區域にして小金鑛地域なり、下北面仙岩里附近は金谷砂金地として昔時より稼行せられたるが如し、一尺乃至二尺の石英脈を存す、鐵嶺里に於ける同昌金鑛は正六年頃より稼行せられ最も名あり、脈幅一尺内外なり、縞狀黒雲母片麻岩に於ける石英脈なり種々硫化物に富む、品位良好なる部分含金十萬分の五六あり、上北面、蘭谷面に於けるものも略同一性質のものにして方鉛鑛、閃亜鉛鑛を多量に含有し附近一帶に銀鉛鑛として採掘せられたるもの、如し。

十、慶尙北道

(45) 奉化金鑛地（奉化郡法田面外四面）

奉化金鑛地と稱するは乃城の東方一帶に亘れる法田、春陽、明湖、鳳城、小川の各面に於ける區域にして乃城より五里内外の地點にあり。

地質は花崗岩にして南方明湖面は花崗片麻岩となり、北方春陽面は淮片麻岩に變ず、岩脈の迸發多くして法田面に於けるものに硅長岩中に網狀脈を爲せる金鑛脈あり、春陽面金井鑛山の「ベグマタイト」岩脈中にある岩漿分體鑛床の如き、特種の鑛床に屬するものとせらる、其品位は含金萬分の三を有

し金粒大にして其の名鮮内に高し、又裂隙充填の石英鑛脈もありて、奉化金山の如きは平均十萬分の五の金品位を有し鑛量豊富なり。

本地方は不便なる山地にあるを以て比較的開發遅く、漸く大正十一年頃より金鑛地として知られたり、朝鮮鐵道の慶北線は金泉を基點として今や本金鑛地に向ひ延長しつゝあり、奉化、金井、春陽、蓮花、牛徳、牛口、眞谷等の諸金鑛を有せる本地方は將來を期待せらるゝ事大なるものあるなり。

(46) 尙州金鑛地（尙州郡洛東面外五面）

尙州邑の東方に於ける洛東面、王城面には無數の金鑛脈ありて古くより小金山多く又砂金を採取せらる大正二 總督府は本地帯の有量なるに着眼し是れを保留し、八ケ年間之れを採鑛して民間に讓渡せり。

採鑛の結査發見したる重なる鑛脈を息山鍾、洛東鍾及屏風山鍾とす、地質は主として石英の罅隙を以て横斷せられたる花崗岩質片麻岩及黒雲母片麻岩よりなる。

鑛石は金・銀・鉛及亜鉛を含有し銅を含む部分もあり、走向延長數千尺脈幅四五寸より二尺に至り十尺以上に膨大せる處もあり、含金は十萬分の五あり含銀は萬分の一を示す、貧鑛に至りては其の量頗る多し。

(47) 高靈星州金鑛地（高靈郡雲水面外數面）

高靈邑の北方より星州邑の西方に至る間に於ける雲水面、高靈面より星州郡志水、青坡、伽泉、大家、聖岩、碧珍に至る間に金鑛を藏す、高靈郡に於けるものは慶尙層と稱せらる粘板岩、蟹岩、砂岩及泥灰岩より成れる水成岩にして柱長岩の岩脈あり、岩脈に沿ひて生成せられし銀鑛脈とその支脈と思はるゝ細脈に含金脈あり脈中數寸より二尺餘に及ぶ、高靈鑛山は毛狀の自然銀を産するを以て有名なり、鑛石の含銀品位千分の二乃至百分の二あり。

星州郡に於けるものは正片麻岩にして淮片麻岩を介在花崗岩及柱長岩脈を存す、金鑛床は主として正片麻岩及花崗岩中にあり、石英質にして黄鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛を不規則に混有し脈幅五寸内外の小脈を爲して平均含金十萬の一程度未だ有望なる金鑛を發見するに至らず。

(46) 義城金鑛地(義城郡春山面外三面)

本金鑛地は義城邑の東南數里の區域にして義城面、山雲面、舍谷面、春山面に跨る、錦泉洞、水溪洞は古來砂金地として知られ、曾て三千の鑛夫螺集せりと傳へらる、距今八九百年前高麗時代に於て銀銅を製鍊したりと言ふも詳ならず、金鑛脈は約五十年前に發見せられたりと稱せらる本地方は含金黄銅鑛にして金・銀・銅共に品位優良なり、地質は粘板岩と砂岩の互層たる慶尙層及び其間を貫ける黒雲母花崗岩より成り、該岩類を貫ける扁豆狀鑛脈を形成せり、脈幅二寸より四尺五寸に至り四寸内外を普通とす、多量の輝水鉛鑛を伴ふものもあり、乾式製鍊に好適の鑛石として將來有望視せらる。

(49) 金泉金鑛地 (金泉郡釜頃面外三面)

金泉邑の西方永同郡に接せる釜頃、代頃兩面は永同金鑛地の延長として良質の金鑛を産す、金泉邑の東方に於ける南面、豊所面にも玢岩脈中に胚胎せらるゝ、一尺内外の石英脈あり、本地方は永同金鑛地と相關聯して發達すべき處なり。

(50) 漆谷金鑛地 (漆谷郡若木面外三面)

本地方は鐵道沿線に近き若木面、架山面、東明面、仁同面にして黒雲母花崗岩中にある數寸の小鑛脈なり、稀れに數尺に達する膨大部あるも鑛質良好なる所は小局部に限定せられ、黄鐵鑛と共存して極めて小規模の稼行にのみ適す、本地方は明治三十一年頃小規模の砂金採取行はれしも直ちに中止せり、大正二年頃東明面、南昌に於て十馬力石油發動機を以て四百封度搗鑛機十二本と青化槽十樽を以て混乘青化製鍊を試みたる事あり。

十一、慶尙南道

(51) 咸安昌原金鑛地 (昌原郡昌原面外數面)

昌原咸安兩郡は慶南に於ける銅鑛賦存地として明治三十年より知らる本區域としての範圍は昌原より馬山を経て郡北に至る鐵道沿線の各面に跨り交通運搬至便の地にあり、就中昌原郡北面、昌原面、内西面、熊南面、咸安郡漆北面、漆原面、山仁面、伽倻面郡北面、咸安面、餘航面は其重なる區域な

り、地質は昌原郡は暗綠色、暗灰色及灰色の玢岩よりなり、咸安郡は上部慶尙層にして粘板岩よりなる是等岩類の間に迸發したるものは馬山岩と稱せらるゝ、花崗岩及諸岩脈にして種々なる金鑛床を構成す、脈質は石英を鍾石とし之に黃鐵鑛、黃銅鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛及磁硫鐵鑛の内一種若しくは數種を含有し金銀を伴ふ、銅鑛床は只黃銅鑛を多量に有するのみ、脈幅は咸安郡に於けるものは二寸内外にして合金品位萬分室あり、昌原郡に於けるものは五六寸の鑛脈にして合金十萬分中二乃至三なるも銅又は亜鉛を有す、有名なる鑛山は金城鑛山、合金銅鑛として咸安鑛山、郡北金山、陽德鑛山、鯉山鑛山、合金鉛亜鉛鑛として合城鑛山あり。

(52) 陝川金鑛地(陝川郡陝川面外六面)

陝川邑の西北に於ける龍洲面、大井面、鳳山面、陝川面、治城面、伽倻面及居昌郡南下面は前寒武利亞大統の正片麻岩類よりなり、慶南に於ける金鑛主産地として古くより砂金を採取せられ、殊に海印寺より南東及南西に流るゝ溪谷は有名にして明治三十七年頃多數の採金夫來集せりと傳へらる、鑛脈走向一定せざる裂縫充填脈にして脈幅數寸の細脈多きも延長は數百尺乃至二千尺に達するもの多く合金品位は良好なる部分萬分の一の合金ありて約二倍の銀を含有す、重なる鑛山を鳳、龍洲、流溪、大興の諸金鑛とす、諸種の硫化物を伴隨し銀分に富む傾向あり。

十二、全羅北道

(53) 母岳金鑛地（金堤郡金溝面外三面）

全州郡龍田、兩林、金堤郡水流、金溝の四面は母岳山を中心として古くより金鑛脈及砂金の稼業行はれたり、其の發見時代は詳かならざるも明治二十年頃に再興せられ爾後興廢ありしも明治三十八年頃には従業員約六七百名あり、東西三里南北二里半の地域なるが一時十二の金鑛區、四の砂金鑛區隣接し南鮮中有數の金鑛地帯を爲せり。

岩石は正片麻岩系の剝埋と走向を同ふする斑岩及玢岩脈を伴ひ之れと一致する含金石英脈をなす、脈質は硫化鑛物に富み延長長きも脈幅は一般に小にして五寸以内のもの多し、母岳金山は其巨擘にして含金品位十萬分の一ありしを以て知らる含金は約三倍あり、本地帯西方院坪川流域は最近三菱に於て大規模の砂金採取の爲め浚漂機械の組立中にして昭和四年秋期より創業する豫定なり。

(54) 茂朱金鑛地（茂朱郡赤裳面外四面）

本金鑛地は永同金鑛地の西南に當り茂朱面、雪川面、茂豊面、赤裳面、安城面に跨り、剝狀花崗岩に胚胎する幅一寸より一尺七寸に至る石英脈にして永同金鑛地に於けるものと同一なり、黄鐵鑛、黄銅鑛、磁鐵鑛、褐鐵鑛、赤鐵鑛を伴隨す、又方鉛鑛及閃亜鉛鑛を含みて銀鉛鑛を爲せるものもあり、重なる金鑛を三加里鑛山及山野赤城鑛山とす、大正四五年の發見なり、前者は金・銀・銅にして金十萬分の四銀萬分の一銅百分の五を有し、後者は金十萬分の四、銀千分の一を有する方鉛鑛にして共に將來を囑

望せらる、本地方は永同の延長にして有望なり。

(55) 蟠岩金鑛地（長水郡蟠岩面外一面）

蟠岩面に於ける金鑛は比較的新らしき發見にして、大正十一年一鮮人坑夫により發見せられたり、當時露頭部の含金甚だ多くして一千餘名の坑夫蟠集し、農民との係争問題を惹起したる有名なる蟠岩金鑛之れなり、爾來魯壇、斗洞、山西面の靈臺の諸金山相次いで顯れたり、發見の後れたるは交通不便の爲なるが此の地は南原の東北六里の地點にあり、其の間道路平坦にして車馬の往來自由なり、地質は花崗片麻岩にして脈幅二、三寸の小脈よりなり、脈質は灰色石英に硫化鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛を隨伴し、殊に硫化鐵鑛を多く含む、蟠岩金鑛の含金は十萬分の七八乃至萬分の三あり、茂朱金鑛地の西南に連れる金鑛地として同じく將來を期待せらる。

十三、全羅南道

(56) 光陽金鑛地（光陽郡光陽面外三面）

本金鑛地帯は光陽面を中心とし骨若、玉漣、鳳岡の四面に跨り光陽邑に近く、又下浦港を控へ氣候和暖にして至便の地にあり、大正四年前は唯光陽邑附近に二個の砂金鑛區を存するのみにして之れとても微々たるものなりしが大正四年末、光陽の東方一里弱、紗谷里に於て金鑛脈を發見して以來、隣接地に二三鑛區の新設あり、一時三千人の鑛夫蟠集し光陽邑の繁榮を來たせり、現在の光陽鑛山は南鮮

隨一の金鑛として其名高く本金鑛地内に四鑛區を有して其中心を爲せり、地質は粗粒灰色花崗片麻岩及河東片麻岩にして壓碎狀又は千枚岩狀を呈し、岩脈として玢岩及微文象岩類あり、鑛脈は含金銀石英脈にして銅分を有し、片麻岩微文象岩又は粗粒佳砂岩中に存す、又玢岩により横斷され或は之に沿ひて走る、脈幅は一般に小にして七八寸のもの多く、脈數は多くして北二十度東の走向と北四十五度東のものとの二群に大別せらる。

賣鑛の含金平均品位は十萬分の四となり含金は普通金の二倍半あり、光陽鑛山の如き脈質より見ると時は特種の良脈とは稱し難きも全く資本と技術の調和により今日の盛大を爲せるものなり、大正五年より昭和三年に至る光陽鑛山の鑛産額に二百十萬圓なり。

(57) 順天金鑛地(順天郡西面外二面)

順天郡に於けるものも光陽郡に於けるものと同種の地質にして、灰色花崗片麻岩及河東片麻岩よりなり、之を被覆せる玢岩及其集塊岩並凝灰岩の累層あり、主要なる金鑛床は此境界線以南一里なる片麻岩系の地に存す、鑛脈は光陽金鑛地に比すれば優勢にして脈幅二尺乃至六尺に達し、最大二十尺に及ぶものもあり、重なるものは西面に於ける順天鑛山住岩面に於ける銀店鑛山なるが、何れも鑛脈附近に玢岩脈を有し、黃鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛を伴ふ。

本地方は口碑によれば比較的古き開發にして、距今三四百年前に支那人により銀を採取せられたり

と傳ふ、最近に至りては光陽の鑛業熱に従ひ稼行せられたるものなるが、含金良好なる部分少なく、住岩面は寧ろ銀鉛として名あり、銀店の如きは含金千分の三含鉛百分の五十のものの多量にあり。

(58) 寶城金鑛地(寶城郡文德面外四面)

寶城より北々東四里福内場四近に至る山地に鑛脈あり寶城金鑛地と呼ぶ、寶城郡芦洞、彌力、福内、兼白、文德の五面に跨る、延長北東より南西に四里幅員一里半に亘れり。

地質は灰色花崗片麻岩より成り千 岩を介立す、岩脈として微文象斑岩、玢岩及燧斑岩あり、白色堅緻の石英より成りて黃鐵鑛、毒砂、方鉛鑛及閃亜鉛鑛を多量に有す、脈幅は三尺乃至十八尺にして大脈の方なるか含金ある部分は上盤又は下盤側一尺内外にして、絞目ある石英中特に硫化物に富む處にあり、斯かるものは十萬分の四五の含金品位を有す、往時砂金を産し金鑛熱盛なりし事あるも富鑛部は濫掘せられ現在は不振の状態にあり重なる金山を全寶、龜山、鳴鳳の三鑛山とす。

第五節 保留金山

保留金山とは明治四十四年以降實施せられたる鑛床調査に基きて最も有望と認めらるゝ金鑛地帯を總督府に於て保留せしものなり。

元來鑛床調査なるものは其目的が從來不明瞭なりし朝鮮に於ける鑛床の性状を概査して其の鑛業的

價値を窺知し、一面鑛業の開發を促進するにありたり、而して明治四十四年より大正五年に至る六ヶ年間に亘り朝鮮全道の大部分を概査し得たり。

其の結果義州、尙州、新興の三金鑛區は是れを民間の自由出願に放任しては或は鑛業開發上不適當と認むる者の手に落つる事なきにしもあらず、當時の鑛山經營法は一般に極めて幼稚なりしが爲め産業政策上及國土保安上頗る考慮を要するものとして大正二年三月十二日に保留する事とせり、而して大正三年以降鑛務課出張所を各鑛區に置きて試掘を開始する事となれり其作業期間は次の如し。

探 鑛 期 間

義州出張所	作業	開始	大正三年六月三日	五年八月
尙州出張所	同	開始	同 九年二月一日	同 同
新興出張所	同	開始	同 十一年六月三十一日	同 同
新興出張所	同	開始	同 十三年六月三十一日	同 同
新興出張所	同	開始	同 十二年三月三十一日	同 同

作業休止の理由は義州は豫定の探鑛を遂げたる結果大規模の探掘經營の價値疑はしきものありと云ふにあり、大正八年度限り探鑛作業を閉鎖せり。

尙州と新興とは豫定の探鑛作業を遂げ、相當鑛量を有する鑛脈の賦存を確め得たるを以て作業を中止する事とせり、此の間に投資したる金額は義州鑛區に對しては二十五萬圓、尙州鑛區には四十萬圓、新興鑛區には四十二萬圓、合計百七萬圓に達す。

右結果より知り得たる鑛脈數は義州に於ては八百五條にて其中探鑛の價値ありと認められたるもの百七十六條探鑛坑道掘進の總延尺三四、五三〇尺に達す、尙州に於ては鑛脈二百三十五條を發見して内優良と認められたるもの百十條、坑道總掘進尺は三七、四七二尺なり、新興は鑛脈數一千七百三十一條を發見し内鑛量を算出せるもの百十條、其他有望なるもの百三十八條を出し坑道の總延長五五、三〇三尺に及べり。

之れ等保留金山に對しては大正十年九月に開かれたる産業調査會に於て民營事業に移すを適當なりと決定せられ、尙州、新興の二鑛山は大正十二年九月松方其外三名に鑛業權を讓渡し、義州鑛區に就ては多數の許可請願者を網羅して株式會社を創立せしめ以て其の開發に當らしむることとなり日下會社創立中に屬す。

第三章 金銀鑛の稼行狀況

第一節 探 鑛

一、砂金の採取

砂金鑛業は其方法の容易なる爲め金鑛々業の先驅として太古より存在せしもの、如し、然れども其

の採取方法は現今に至るまで極めて幼稚にして大正六年末稷山金鑛に於て本邦唯一の砂金浚漈機を使用し大規模の採金を見るに至り、朝鮮砂金鑛業界に一新機軸を劃したるが昭和二年五月限り豫定の作業を終りて事業を廢止せり、然れども最近三菱鑛業會社は全北金堤に於て砂金浚漈機を使用して大規模の採金を爲さんとし目下機械据付中なり、本鑛業も亦再び盛況に趣くべしと期待せらる。

然れども砂金の分布は金鑛と相關して北鮮に多く南鮮に少なき傾向あり、其多くの採取法は全、原始時代其儘にして、先づ表土を排除し、人力により湧水を汲出しつゝ、甘土即ち砂金床に達す、甘土は水溜又は水流ある場所に運搬し斜に配置されたる木樋に放流し、掻き混せて土砂礫を除去し、沈積せる砂利を木鉢にて洗滌淘汰し砂金を採取するものなり。

二、金鑛の採掘

朝鮮の金鑛業は或る數ヶ山を除けば甚だ幼稚なるものにして改善の餘地甚だ多く、年々幾分の進歩を見つゝあるも其の多くは舊式の井戸掘又は斜坑道掘にして、露頭部のみの採鑛に腐心せる結果、大局を誤る場合少なしとせず、朝鮮在來の稼行法に徳大法と稱するものあり、是れは請負に似たる一種の契約法にして、鑛業權者が徳大と稱する委任經營者數名を置き、採掘すべき地表上の區域を分割して直接實務に當らしむ、故に徳大法は鑛業權者の鑛區内に於て更に幾多の小鑛山を建設したると同様に、徳大自から數名乃至十數名の坑夫を引率して規定の區域内に於て自由に採掘を爲し、收入の一部

を鑛主に納付す、此徳大なるものは多く金鑛採掘の經驗者なるが、資金の關係上作業の始めより收益を目的とするが爲め、良鑛の刳取を以て唯一の採掘と心得、貧鑛に遭遇すれば忽ち作業を中止して探鑛を爲さず、新たに地表に於ける富鑛部を探索す、朝鮮に於ける金鑛が數十尺にして廢止せるは、皆此の貧鑛に遭遇すると同時に、排水、運搬の經費膨脹の爲め、徳大自ら放棄するによるものにして、地表到る處に存在する金鑛脈は、強いて下底の採掘を必要とせざりしによるものなるべし。

從て金鑛の採掘法は濫掘となり、俗に狸掘と稱せらるも故なきに非ず、然れども時勢は何時迄も濫掘を許さず、今や各所に改善の聲を聞き秩序ある採掘法を要望するに至れり、井戸掘を改めて堅坑となし、斜坑道を改めて横坑道となし、狸掘を改めて階段掘となすの時期に到達せり、唯溜水を有する舊坑は容易に資本家の投資を得ざるも、此の埋没せる舊坑こそ意外の富鑛を藏するもの多きを以て、之れが取明け開發は最も必要の事にして、金鑛復活の第一捷徑たるべし。

秩序ある洋式採掘を應用せるものは、外人經營の特許鑛區及専門技術者を傭聘せる大資本家の金山のみにして、數ヶ山に過ぎず、左に全鮮稼行中設備ある金鑛の統計を表記すべし。

道	別	稼行金山數	排水設備(ポンプ)を有するもの	運輸用設備(レール)を有するもの	火藥庫(假貯藏所)を有するもの	分析所を有するもの	鑿岩機を有するもの	技術者(専門學校出身者)を有するもの
成	北	六	○	○	—	○	○	—

計	全南	全北	慶南	慶北	江原	忠南	忠北	京畿	黃海	平南	平北	咸南
一六三	二	三	一五	一	一七	二	二	二	二	一四	二六	一二
二	一	〇	三	二	〇	四	〇	一	二	三	五	〇
四二	一	〇	八	一	一	五	二	四	六	五	六	三
六八	一	〇	九	四	九	一〇	六	九	五	四	七	三
一七	一	一	一	二	〇	三	一	〇	二	三	二	一
四	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	〇	一	〇
五六	一	二	七	三	一	一〇	四	三	五	八	八	三

第二節 探鑛

金鑛探掘の狀況以上の如きが爲め、特に探鑛を爲す鑛山甚だ稀なり、其の多くの鑛山は、地表よりの探鑛が同時に探鑛を兼ねたるものとなれり、殊に徳大法に於て然りとす。

探鑛は探鑛の準備作業にして、鑛山の壽命を長からしめんとせば常に探鑛を繼續するの必要あり、全

南、光陽鑛山が今日の發展を見たるは、全く探鑛の結果なる事は何人も肯ずるところなり、又雲山金鑛が永年作業を繼續するが如き、汾洞金鑛が新鑛體を發見せるが如き、探鑛費を惜しまざりし結果に外ならず、新富鑛體の發見は地表と坑内と相連絡して始めて發見さるべきものなり、姑息なる徳大法は新露頭の發見即ち地表探鑛には却つて貢獻するものなるも、坑内の探鑛は地質と鑛脈質と露頭とによるものなれば、知識と資本との協和によるところならざるべからず。鮮内の金鑛は秩序ある探鑛によりて將來の盛況を期待せらるゝものと言ふべし。

第三節 選 鑛

選鑛設備は小數の鑛山を除きては未だ不備なるもの多く、爲めに蒙る所の不利少なからず、其の概況を述べれば朝鮮の金鑛は概ね硫化鑛にして金銀は主として之等硫化鑛中に含有せらるゝが故に、其の選鑛は鑛業上最も肝要なる所なるに、選鑛の機械的設備を有する鑛山は一二金屬鑛山を算するのみにして、其の他は殆んど不完全なる手選を爲すに止まる、普通に行はるゝ方法は、探鑛の際坑夫が坑内にて荒割手選を兼ねるか、又は坑外に於て雜夫或は鮮童により手選鑛法を爲すに止る、其の鑛石として分離されたるものは、其儘搗鑛に投せられて混汞金を得る事とす、其の採取率は甚だ不良にして、含有金の大部分は其の儘鑛尾として放流せらるゝか、或は亦青化に投せられ僅に一部の含金を回收す、

含金硫化鑛は汰物として賣鑛し乾式製鍊による法有利なる場合甚だ多し、然るに賣鑛は普通の鑛山にありては手選のみにより選別分類せらる、故に夥多の貧鑛は其の儘放棄せらるゝものなり、之れを機械的選鑛設備により汰鑛として回収する事を得ば最も理想的のものにして、國家經濟上必要の事なり模範的選鑛設備を有する鑛山としては黃海道に於ける遂安全鑛あり、原鑛含金百萬分中の七・五を汰鑛として萬分中一・三に上昇し之れを賣鑛せり、其の他選鑛設備を有するものは、雲山、昌城、栗浦、一東、桃花の數山あるに過ぎず、元來金鑛の選鑛と其製鍊とは密接なる關係を有し其の間明確なる區分を缺くものあり、例へば普通に選鑛と稱せらるゝ、搗鑛磨鑛の如きは、選鑛機械にして製鍊を營み青金を製するものなり、其簡單なるものは俗に水車製鍊と稱し全く製鍊作用を爲すものなるを以て投入鑛石の性質を吟味すること必要なり、かの露頭附近の酸化帶、硫化物の少なき石英鑛の如きは其の儘搗鑛青化に投じ得るも、硫化物の多き石英鑛、含金の少なき貧鑛は機械力により淘汰選別して品位を上昇したる後是が適法を講ずる必要あり、既に鮮内の金銀鑛は地表酸化帶の濫掘時代を過ぎて地下硫化帶を秩序的に採掘製鍊する時代となれり、各金鑛地の説明に於て見る如く硫化鑛の増加と貧鑛の處理とは益々緊急を要する事となる可く、將來は選鑛施設を完備したる濕式製鍊所の普及を計ることと、選鑛によりて生じたる汰鑛を、乾式製鍊場に賣鑛することが最も必要な事項なるべし。

第四節 製 鍊

金鑛の製鍊には濕式と乾式との二法あり、普通行はるゝは濕式にして水車により簡單に混汞金を得らるゝにより幼稚なる鑛山は皆此の法による、最も幼稚なるものは十本立木製搗鑛杵（一本重量約八十封度）を徑八尺乃至十四尺の水車により運轉して鑛石を搗碎し、適量の水銀を混入して混汞金を得、然れども其の實收率五〇%以下なるを以て、鑛尾を青化槽に入れ、青化加里溶液を以て鑛石中の金銀を溶解し得たる金溶液を削亞鉛を以て沈澱せしめ、澱物を灰吹法により青金とするにあり、是れも徳大法にありては、水車所有主は水銀を負擔し、搗鑛費として百貫の搗鑛量に對し青金七分五厘を徵收し、鑛尾を全部獲得する事を普通とせり、稍進歩せるものによりては二百五十封度乃至四百封度の鐵製搗鑛杵五本乃至十本を以て搗碎し、鑛尾はテーブル一臺又は二臺にて處理し、其動力として石油エンジン又は瓦斯エンジンをを用ゆ、又鑛尾は青化に投ず、此種のものには皆鑛山事務所直轄たるものなり、最進歩したるものは千封度内外の搗鑛機械十本を有し碎鑛機、給鑛機、分級器、汰盤、濃集槽、溶解槽、浸出槽等を具備して大規模に混汞及青化法を試みるものなり。

乾式製鍊に至りては唯一の鎮南浦製鍊所あるに過ぎず、本製鍊所は日本鑛業株式會社の經營なるが大正四年の建設に係り同年十月より作業開始せり、其の目的は鮮内産金銀鑛を蒐集し之れに配するに

金銀吸收劑として内地其他より輸移入する鹽基性含銅硫化鐵鑛又は鉛鑛を以てす、重なる設備として

燒粉爐 六箇（一晝夜粉鑛四千貫處理）

溶鑛爐 三座（一晝夜鑛石三萬貫處理）

煉鉞爐 一座（一晝夜鉞三萬貫處理）

眞吹爐 一二床（一床一操業千二百貫處理）

鉛鑛製鍊爐 一座（一爐一晝夜鉛鑛三千貫處理）

送風機 百馬力ラト式、ターボ送風機

原動橫置型吸入瓦斯機關 三十馬力同

三相式回轉田磁型發電機 百七十五馬力

等あり、又同會社所屬の咸南甲山銅山に於ても同種の製煉所を有し含金粗銅を産出せるが、山間僻

地に處在せる關係上、廣く金鑛を買鑛するに至らず。

此種の乾式製煉場は朝鮮産金銀鑛の大部分にとりては、其鑛質上最適切なる處理機關と認めらるゝところなるが、鮮内には配合すべき含銅硫化鐵鑛の産出少くして、之が發達を阻止せるものと言ふべし

尙金銀鑛開發策として鮮内に新たなる乾式又は濕式の中央製鍊所設置案を議するものもあるも、乾式は既に鎮南浦に於けるものゝみにて充分なるべく、濕式に至りては各地に散在せる低品位鑛石を蒐集

一臺
一臺
一臺
一臺
一臺

するには交通不備の關係上多額の運賃を要し、之が實現を期し難く、勢ひ既設製鍊所に賣鑛するより外途なきものと言ふべし。

第四章 金銀鑛に對する諸施設

第一節 選鑛製鍊試驗

選鑛製鍊は鑛業成否の岐るゝ中心作業なるに拘らず、朝鮮に於ける鑛山には未だ之が施設を爲すもの少なく、其の施設を爲すものと雖も多くは姑息幼稚なるものに屬し、目的鑛物を完全に收取するを得ず、爲めに鑛利を損し國益を害すること尠なしとせず、而も從來之に對する研究機關の設備なく常に遺憾とする所なりしが、大正十一年總督府は鑛業の振興發展に資せむが爲め、京城市外鷺梁津に石炭調査試験機關と併せ鑛物の選鑛研究機關を設備し、大正三年五月施設を完了して研究に着手せり、其の試験事項とするところは主として金銀鑛の經濟的處理法なるが、單に學術上の研究のみを目的とせず専ら選鑛製鍊に關する實際的改良方法を目的とせるものにして、其の研究上得たる所の結果は隨時之を公表すると共に、營業者の調査研究及施設等に對して事情の許す限り相當の便宜を與へ、成る可く鮮内營業者の共同機關たるが如き一種の使命に任せむ事を期せり、故に鑛石に對する選鑛設備と

して一晝夜五十噸能力の所謂比重選鑛工場を有し實地試験を爲し、又製鍊設備に就ては金銀の濕式製鍊として一晝夜三噸の能力ある設備を有し、乾式製鍊としては相當の設備を計畫中なりしが最近略之が完成を見たり、而して昭和二年十二月總督府令第百三十一號を以て鑛物の選鑛製鍊依託試験規則を發表し、低廉なる手數料を納入せしめて民間に於ける選鑛製鍊の試験又は鑑定に應ずる事とせり。

第二節 鑛業の指導誘掖

金銀鑛は朝鮮鑛物の大宗なるが、概して製鍊上の難物たる硫化鑛物を隨伴せる石英鑛なる事は既述の如く、之が製鍊に付ては特種の設備方法を必要とするに拘らず、朝鮮人は殆ど不完全なる舊來の操業方法を墨守し、又内地人に於ても鑛石の性質を異にする内地鑛山の設備を其儘模倣するに止り、爲めに往々失敗を招き徒に鑛利を損すること多し、殊に戰時中及戰後に於ける物價及勞銀の昂騰に伴ひ、斯る幼稚の鑛山は一層の打撃を受け廢山休鑛するもの續出し極度の沈衰を見たるが如きは、採算不引合に原因するもの多しと雖も亦操業方法の幼稚姑息にして經濟的移行の行はれざりしに因るものなきにあらざる、仍て是等の當業者を實地に就き指導誘掖して操業の知識を注文し有利に經營せしむる爲め、總督府は技術員を派して普く稼行鑛山を巡視せしめ鑛業の發展を企圖しつゝあり、既に第三章第一節中金鑛の採掘に述べし統計表に見るが如く、鑛主の經營上に於ける知識、技術に關する素養等に乏

しきが上、相當技術員を有せるもの甚だ少なく、操業方法の改善は困難とするところなりしが、大正十二年新に鑛業に關する技術員派遣制度を設け、民間の希望に應じ鑛業に關する調査設計及鑑定を爲さしむる爲め申請に基づき技術官を派遣する事とせり、漸次之が利用は民間に普及せられて稼行鑛山の漸増、鑛産額の増加等に年々好果を見つゝあり。

第五章 諸統計に現はれたる金銀鑛の盛衰

第一節 出 願

金銀鑛の出願は、逐年増加して大正五年乃至七年の如き、一般經濟界の好況に依り一年の出願件數一千件乃至二千八百件の間を上下せるも、世界大戰の終熄以來諸鑛物市價の暴落による企業心沮喪は、金銀鑛にも影響して大正九年には俄然七十七件に激減し、不況の深刻を表明せり、大正十年以來漸次好轉歩調となり、大正十四年以來變化なき趨勢を辿りて、略一ヶ年五百件内外となり戰前に髣髴たるものあるも、砂金件數を減して金・銀・銅・鉛・亜鉛件數の増加せるは、鮮内の金銀鑛が硫化鑛を目的とする時代に入りし事を顯せるものなり。

金 銀 鑛 出 願 表

區別	明治		大正		昭和	
	十三年	十四年	元年	二年	三年	四年
金銀	四八九	三六六	三三三	三五四	八七	八七
金	一〇〇	七三	七三	五九	七九	八七
銀	三八九	二九三	二六〇	二九五	七九	八七
銅	二六	一九	四	八三	六六	六六
鉛	一〇	七三	一六五	一五三	一、九九	一、七九
鋅	二七	一七	一五	一六	一、九六	一、九三
銻	二七	一七	一五	一六	一、九六	一、九三
錳	二七	一七	一五	一六	一、九六	一、九三
砂金	一〇〇	七三	七三	五九	七九	八七
合計	一〇〇	九六	六六	五七	九〇	一〇〇

次に是等出願件数を内鮮人別の割合にして表記すれば、次表に示す如く年により増減あるも、近年は却て鮮人の出願數増加せる傾向あり。

内鮮人別出願割合

區別	大正	昭和
内地人	五、五	四、六
朝鮮人	五、五	五、四
合計	一〇、〇	一〇、〇

外人出願は大正五年四月外人に對する鑛業權の新規享有禁止後絶無なり、道別の金銀出願件数は、第二章第二節に最近五ヶ年の統計を表記せり。

第二節 鑛 區

明治四十三年四六七を算せし鑛區數は逐年増加し、大正七年約四倍に達し一、八一四を數ふるに至れり爾來漸減の步調に轉じ、大正十二年九八二を最低として再び増加し、最近に於ては一千一百臺にあり、稼行鑛區も亦略同一歩調を辿り大正五年の三八五を最高とし九年の八八を最低とせり、最近に於ては二百を算し、總鑛區數に對し七分乃至三割の間を上下せり。

鑛區の内鮮外人別狀況は明治四十三年始政當時に於ては總鑛區數に對し内地人六割朝鮮人三割四分外國人六分の割合なりしが、大正五年外國人の鑛業權享有禁止せられ爾來外國人鑛區は漸次減少し昭和三年には僅に四鑛區を残すのみとなり、結局内地人六割六分朝鮮人三割四分外國人三厘の割合なり

金 銀 鑛 區 表

區 別	明治四十三年	同四十四年	大正元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年	同二年	同三年
	金 一 鑛區數	四七六	三三七	三三三	三三五	三〇六	二七〇	二七八	二九九	二八五	二八一	二八八	二五三	二四三	二四六	二四四	二三三	二二〇	二二二
指 數	一〇〇	九二	九一	九二	八六	七二	七三	七五	七四	七五	七六	六九	六八	六六	六五	六三	五二	五三	五五

第五章 諸統計に現はれたる金銀鑛の盛衰

金銀鑛	銅鑛	砂金	鐵物切	合計	鐵物切		砂金	銅鑛	金銀鑛
					指數	指數			
112	112	112	112	112	112	112	112	112	112
114	114	114	114	114	114	114	114	114	114
116	116	116	116	116	116	116	116	116	116
118	118	118	118	118	118	118	118	118	118
120	120	120	120	120	120	120	120	120	120
122	122	122	122	122	122	122	122	122	122
124	124	124	124	124	124	124	124	124	124
126	126	126	126	126	126	126	126	126	126
128	128	128	128	128	128	128	128	128	128
130	130	130	130	130	130	130	130	130	130
132	132	132	132	132	132	132	132	132	132
134	134	134	134	134	134	134	134	134	134
136	136	136	136	136	136	136	136	136	136
138	138	138	138	138	138	138	138	138	138
140	140	140	140	140	140	140	140	140	140
142	142	142	142	142	142	142	142	142	142
144	144	144	144	144	144	144	144	144	144
146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
148	148	148	148	148	148	148	148	148	148
150	150	150	150	150	150	150	150	150	150
152	152	152	152	152	152	152	152	152	152
154	154	154	154	154	154	154	154	154	154
156	156	156	156	156	156	156	156	156	156
158	158	158	158	158	158	158	158	158	158
160	160	160	160	160	160	160	160	160	160
162	162	162	162	162	162	162	162	162	162
164	164	164	164	164	164	164	164	164	164
166	166	166	166	166	166	166	166	166	166
168	168	168	168	168	168	168	168	168	168
170	170	170	170	170	170	170	170	170	170
172	172	172	172	172	172	172	172	172	172
174	174	174	174	174	174	174	174	174	174
176	176	176	176	176	176	176	176	176	176
178	178	178	178	178	178	178	178	178	178
180	180	180	180	180	180	180	180	180	180
182	182	182	182	182	182	182	182	182	182
184	184	184	184	184	184	184	184	184	184
186	186	186	186	186	186	186	186	186	186
188	188	188	188	188	188	188	188	188	188
190	190	190	190	190	190	190	190	190	190
192	192	192	192	192	192	192	192	192	192
194	194	194	194	194	194	194	194	194	194
196	196	196	196	196	196	196	196	196	196
198	198	198	198	198	198	198	198	198	198
200	200	200	200	200	200	200	200	200	200

金銀鑛稼行鑛區表

鑛別	明治同	明治十	明治十	大正	大正	大正	大正	昭和	昭和	昭和	金銀		銅鉛	
											總鑛區	稼行鑛區	總鑛區	稼行鑛區
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	111	111	111	111
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	112	112	112	112
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	113	113	113	113
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	114	114	114	114
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	115	115	115	115
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	116	116	116	116
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	117	117	117	117
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	118	118	118	118
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	119	119	119	119
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	120	120	120	120
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	121	121	121	121
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	122	122	122	122
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	123	123	123	123
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	124	124	124	124
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	125	125	125	125
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	126	126	126	126
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	127	127	127	127
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	128	128	128	128
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	129	129	129	129
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	130	130	130	130
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	131	131	131	131
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	132	132	132	132
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	133	133	133	133
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	134	134	134	134
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	135	135	135	135
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	136	136	136	136
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	137	137	137	137
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	138	138	138	138
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	139	139	139	139
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	140	140	140	140

砂金	一切		合計
	稼行鑛區	總鑛區	
七九	四四	一〇・〇	二七
六六	二二	〇・〇	二五
四三	一七	〇・〇	二六
七三	二七	〇・〇	二九
四一	一七	〇・〇	二九
四五	一六	〇・〇	二九
一〇	一	〇・〇	一九
三三	一〇	〇・〇	一九
二	〇	〇・〇	一一
一	〇	〇・〇	〇・九
一〇	〇	〇・〇	一〇
七	〇	〇・〇	一〇
一三	一〇	〇・〇	一三
七	五	〇・〇	一六
一一	七	〇・〇	二〇
九	四	〇・〇	一八
五	三	〇・〇	一五
五	三	〇・〇	一五
五	三	〇・〇	一五

内鮮外人別金銀稼行鑛區表

區別	内地人		朝鮮人	
	總鑛區	稼行鑛區	總鑛區	稼行鑛區
明治三十四年	二六三	七四	一五七	四一
同三十五年	二五七	七三	一五七	四一
同三十六年	二五七	七三	一五七	四一
同三十七年	二五七	七三	一五七	四一
同三十八年	二五七	七三	一五七	四一
同三十九年	二五七	七三	一五七	四一
同四十年	二五七	七三	一五七	四一
同四十一年	二五七	七三	一五七	四一
同四十二年	二五七	七三	一五七	四一
同四十三年	二五七	七三	一五七	四一
同四十四年	二五七	七三	一五七	四一
同四十五年	二五七	七三	一五七	四一
同四十六年	二五七	七三	一五七	四一
同四十七年	二五七	七三	一五七	四一
同四十八年	二五七	七三	一五七	四一
同四十九年	二五七	七三	一五七	四一
同五十年	二五七	七三	一五七	四一
同五十一年	二五七	七三	一五七	四一
同五十二年	二五七	七三	一五七	四一
同五十三年	二五七	七三	一五七	四一
同五十四年	二五七	七三	一五七	四一
同五十五年	二五七	七三	一五七	四一
同五十六年	二五七	七三	一五七	四一
同五十七年	二五七	七三	一五七	四一
同五十八年	二五七	七三	一五七	四一
同五十九年	二五七	七三	一五七	四一
同六十年	二五七	七三	一五七	四一
同六十一年	二五七	七三	一五七	四一
同六十二年	二五七	七三	一五七	四一
同六十三年	二五七	七三	一五七	四一
同六十四年	二五七	七三	一五七	四一
同六十五年	二五七	七三	一五七	四一
同六十六年	二五七	七三	一五七	四一
同六十七年	二五七	七三	一五七	四一
同六十八年	二五七	七三	一五七	四一
同六十九年	二五七	七三	一五七	四一
同七十年	二五七	七三	一五七	四一
同七十一年	二五七	七三	一五七	四一
同七十二年	二五七	七三	一五七	四一
同七十三年	二五七	七三	一五七	四一
同七十四年	二五七	七三	一五七	四一
同七十五年	二五七	七三	一五七	四一
同七十六年	二五七	七三	一五七	四一
同七十七年	二五七	七三	一五七	四一
同七十八年	二五七	七三	一五七	四一
同七十九年	二五七	七三	一五七	四一
同八十年	二五七	七三	一五七	四一
同八十一年	二五七	七三	一五七	四一
同八十二年	二五七	七三	一五七	四一
同八十三年	二五七	七三	一五七	四一
同八十四年	二五七	七三	一五七	四一
同八十五年	二五七	七三	一五七	四一
同八十六年	二五七	七三	一五七	四一
同八十七年	二五七	七三	一五七	四一
同八十八年	二五七	七三	一五七	四一
同八十九年	二五七	七三	一五七	四一
同九十年	二五七	七三	一五七	四一
同九十一年	二五七	七三	一五七	四一
同九十二年	二五七	七三	一五七	四一
同九十三年	二五七	七三	一五七	四一
同九十四年	二五七	七三	一五七	四一
同九十五年	二五七	七三	一五七	四一
同九十六年	二五七	七三	一五七	四一
同九十七年	二五七	七三	一五七	四一
同九十八年	二五七	七三	一五七	四一
同九十九年	二五七	七三	一五七	四一
同一百年	二五七	七三	一五七	四一

第五卷 諸統計に現れたる金銀鑛の盛衰

外國人	稼行鑛區		割合	總鑛區	稼行鑛區	合計	外國人	合計	外國人	合計	外國人	合計	外國人	合計	外國人	合計	外國人	合計	外國人	合計
	割合	稼行鑛區																		
一・三	一・二	一・一	四・三	四・七	一・六	二・七	一・三	二・七	一・二	二・五	一・〇	二・〇	一・一	二・一	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇
一・二	一・一	一・〇	三・五	四・〇	一・四	二・五	一・二	二・五	一・一	二・六	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇	一・〇	二・〇
三・四	三・〇	二・八	五・七	六・四	二・四	三・九	三・〇	三・九	二・九	三・〇	二・九	三・〇	二・九	三・〇	二・九	三・〇	二・九	三・〇	二・九	三・〇
一・八	一・六	一・六	五・三	六・〇	二・四	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇
一・八	一・六	一・六	四・九	五・四	二・四	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇	二・七	三・〇
一・四	一・二	一・二	五・六	六・一	三・三	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇	一・五	四・〇
五	四	四	四・三	四・八	二・四	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八	一・六	二・八
四	三	三	三・六	四・一	二・四	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七	一・六	二・七
四	三	三	四・七	五・二	二・四	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇
四	三	三	五・六	六・一	二・四	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇	一・〇	三・〇
四	三	三	六・七	七・二	二・四	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇	一・三	三・〇
四	三	三	七・五	八・〇	二・四	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇	一・六	三・〇
四	三	三	七・五	八・〇	二・四	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇	二・〇	三・〇
四	三	三	七・五	八・〇	二・四	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇
四	三	三	一〇・〇	一〇・五	二・四	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇	一・八	三・〇

備考 明治四十三年及大正元年は確かなる記録なきを以て推定の数字を記入せり

第三節 鑛 産

金銀鑛産額は年に依り増減ありと雖、大體に於て漸次増加し來り、明治四十三年には五百七萬餘圓を示せるもの大正四年八百六十五萬圓に達する迄は年々徐々に増加し、大正五六年には一千萬圓を突破して併合當時の倍額以上を産出したるも、戦後不況の影響を受けて其後漸減の趨勢を辿り、大正十一年には再び併合當時の状況迄墜落せり、而して金・銀・砂金は最も不振にして僅に金銀鑛及汰鑛により産金の不足を補充し維持せられたり。大正十一年以降は再び産額を増加し、未だ好況時代の産額に達せざるも好轉の趨勢を示せり、内鮮外人別鑛産状況は明治四十三年以降大正八九年迄は外國人の生産に係はるもの最も多く、雲山、昌城、遂安、稷山の四鑛山にて總金銀産額の八割以上を占め、他は内地人にして朝鮮人は一二%に過ぎざりしが、大正十三年以降三成鑛山の異常なる産金の爲め鮮人

の割合順に増加し昭和元年には外國人五二%朝鮮人四二%内地人六%となり、昭和二年には三成鑛山の減産の爲め外國人五二%朝鮮人二五%内地人二三%となれり
 而して各道別の金銀鑛産額は第二章第二節に擧げたる如く、常に平安北道を第一とし、全鮮金産額の六割以上を占む、併合以來の金銀鑛産額及價額を擧ぐれば次の如し。

金銀鑛々産額表

區別	明治		大正		昭和	
	三十三年	三十四年	元年	二年	元年	二年
金	七五五	九五九	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一
砂	二〇四	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇	二四〇
金銀	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一	一,〇〇一
銀	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

金銀鑛々産價額 (單位千圓)

區別	明治		大正		昭和	
	三十三年	三十四年	元年	二年	元年	二年
金	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
砂	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
金銀	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
銀	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

産地	金	銀	鐵	金銀鐵	金	銀	鐵	金銀鐵	金	銀	鐵	金銀鐵
青岩金山	金銀鐵											
佑益鐵山	金											
橋洞鐵山	金											
雲龍鐵山	金											
大興鐵山	金											
安城金山	金銀鐵											
翰興鐵山	金銀鐵											
新延金山	金銀鐵											
龜山金鐵	金銀鐵											
合計												

第四節 輸移出入

金銀及地金の輸移出は殆ど内地移出にして、輸移入は大正三四年及大正九十年の交に於て輸入額

大なりし外は内地より移入する方多し、而して金銀の主なる外國取引先は支那にして、金地金、銀地に就ては詳ならず、金鑛及法鑛の輸出先は米國及支那にして、移出先は久原鑛業會社を第一とし、三菱鑛業會社及藤田鑛業會社なり、金鑛及法鑛の輸入は絶無なり。

金銀輸移出入累年比較表

年次	金及金地金			銀及銀地金		
	輸出	移入	計	輸出	移入	計
明治四十三年	8,000,000	1,000,000	9,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同三十四年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
大正元年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同二年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同三年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同四年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同五年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同六年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同七年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同八年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同九年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同十年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000
同十一年	1,000,000	1,000,000	2,000,000	1,000,000	1,000,000	2,000,000

同三年									
同二年				一、八九七、八三三	三、一五三、九七九				
同元年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
昭和元年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十一年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十四年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十五年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十三年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十二年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十一年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同十年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同九年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同八年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				
同七年				一、四五一、三六八	三、〇〇八、六八七				

(附錄)

朝鮮主要金鑛概況

附 錄

朝鮮主要金鑛概況

(昭和三年中鑛產額三萬圓以上)

目 次

京畿道

天一金鑛……………一頁

安城金山……………四

斗美金鑛……………七

忠清南道

滿里金山……………九

九峰山金鑛……………三

中央鑛山……………一七

浩美金鑛……………一〇

目次

稷山金鑛……………三三

大興鑛山……………二八

全羅南道

光陽鑛山……………三〇

慶尙北道

高靈鑛山……………三六

金井金鑛……………四〇

黃海道

栗浦金山……………四四

遂安金鑛……………五四

平安南道

三德鑛山……………六九

雲龍金鑛……………七

平安北道

三成鑛山……………七四

雲山金鑛……………七九

桃花金山……………九二

新府面金山……………九五

昌坡鑛山……………九八

新延金山……………一〇六

橋洞鑛山……………一〇九

江原道

泉浦金山……………一一一

北洞金山……………一二四

佑益鑛山……………一二七

目次

咸鏡南道

幹興鎮山……………一三〇

翰洞里鎮山……………一三三

咸鏡北道

青岩金山……………一三五

天一 金鑛 (金)

京畿道驪州郡金沙面

鑛業權者 驪州鑛山株式會社

登錄第二七四八號

面積 四九九、二〇〇坪

沿革 本山は大正五年九月金溶出許可を受け後金溶泰に次いで株式會社京城工業社の手を經、昭和三年三月現權者之を讓受け今日に至れり。

交通 本山事務所は驪州郡金沙面上虎里にあり京城より本山に到るには自動車にて漢江々岸梨浦に至り其れより山路一里にして達するを得べし鑛業用主要材料は京城より漢江を溯航し梨浦にて陸揚げするを便とす。

地質及鑛床 本鑛區一帶の地を構成する岩石は主として前寒武利亞大統に屬する眼球狀、縞狀、流紋狀又は片狀を呈せる灰色花崗片麻岩にして鑛床は之に胚胎する含金石英脈なり其數二三條あるもの如く何れも隣鑛區驪水金山の鑛脈の鍾先に該當す現今採行中のものは其の内の一條にして走向北十四度西傾斜は北東に六十度脈幅は三尺乃至六尺あり兩巖平滑にして剝離し易し鑛脈を構成する石英は主として白色堅緻にして時に母岩の角礫又は碎片を多量に介在する事あり隨伴する硫化鑛物として

は單に少量の黃鐵鑛のみにして其の微晶を散點し富鑛帶に於ては肉眼を以て良く金の存在を認識し得
 べし。

採鑛 採鑛は手掘發破法にて階段掘を行ふ坑内には第一第二の兩斜坑あり第一斜坑は鑛石捲揚用
 とし第二斜坑は鑛夫昇降用の梯子及排水「パイプ」を設置す主要水平坑道三あり各坑道の垂直距離約
 百尺とす捲揚機は坑外にありて附屬原動機は四〇馬力「ガンリン、エンヂン」を使用す排水用として
 は三吋の「セントリン、ニューガルボンブ」一臺を備へ。

選鑛 坑内より捲上げられたる鑛石は坑口附近にて手選をなし良鑛石は壹噸容量の鑛車に入れ人
 力及電力にて機械選鑛場に運ぶ機械選鑛場設備の主なるものは一日四十噸能力の「ロッドミル」一臺
 七十馬力「デイゼル、エンヂン」一臺等あり鑛石中の金は銅板にて汞化金として採取せらる。

原 動 機

アトラス、デイゼル、エンヂン七〇馬力	一	臺
附屬發電機五四キロボルトアンペヤ	一	臺
ガンリン、エンヂン四〇馬力	一	臺

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末現在）

年次	取賣	
	數量	價額
大正十五年	地金 四、二五三 <small>匁</small>	二一、七二六 <small>匁</small>
昭和二年	地金 九、〇七六	三七、八〇〇
昭和三年	地金 二〇、七一 <small>匁</small>	六四、〇九〇
天正三年	汰鑛 一三、三三三 <small>匁</small>	一、九七一

鑛產額

種別	人員	貨金		
		最高	最低	平均
坑搬夫	二七	一・〇〇	〇・六〇 <small>匁</small>	〇・八〇 <small>匁</small>
運搬夫	六	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
選鑛夫	四	一・〇〇	〇・六〇	〇・八〇
製鍊夫	二	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇
機械夫	一〇	二・〇〇	一・〇〇	一・五〇
工作夫	四	一・二〇	〇・八〇	一・〇〇
雜計	七五	〇・七五	〇・六五	〇・七〇

安城金山 (金銀)

京畿道安城郡金光面

鑛業權者 山田正雄

登錄第七三七四號

面積 四六四、六〇〇坪

沿革 本山は曾て某鑛業者探鑛を試みたるも露頭淨の品位貧弱なる爲廢止せりと云ふ。

大正十五年三月現鑛主鑛業權の許可を受けて直營稼行し爾後鑛況良好にして年産額十萬圓を越ゆるの盛況にあり。

交通 本山は安城邑の南一里半にあつて京城より本山に至るには京釜線平澤驛より自動車にて四里安城に着し或は京釜線天安驛より京南線にて安城に至るも可なり安城本山間は車馬を通し交通便なり。

地質及鑛床 附近の地質は花崗片麻岩より成る鑛脈は數條あるも現在採鑛中の本山鑛は走向北三十度 四十度東、傾斜東南八十度 九十度脈幅一尺乃至五尺に膨縮し露頭の延長遠大なるか如きも探鑛不充分にして其の露頭もたゞ鑛脈の品位は走向三十度の場合良好にして四十度の場合貧弱なる傾向あり富鑛帶の落しは四十度の方向にて傾斜に沿ひ南方に向ふ。

鑛石は乳白色石英に濃紅銀鑛、輝銀鑛及自然銀を縞狀或は班狀に含有し其の外方鉛鑛、閃亜鉛鑛、硫化鐵鑛、黃銅鑛及微量の安員母尾を含有し合金量甚だ貧弱にして普通百萬分臺に過ぎざるも合金量豊富にして千分臺を普通とし最上鑛百分の二十あり。

鑛脈の上管に斜長岩、下管に輝斑岩の岩脈ありて鑛脈幅員の膨縮に影響すること多し。

採 鑛 採鑛は總て手堀にして鑿坑及水平坑道を掘鑿し階段掘法を行ふ。

坑内作業は二交代にして普通鑛夫約五十名、運搬夫約三十名を使投し一日組鑛一千五百貫位を採掘し手選により含銀千分の四以上の精鑛約四百貫を産す。

昭和三年末に於ける坑道延長鑿坑二百尺、鑿押水平坑道は一坑百尺、二坑三百三十尺、三坑百八十尺、四坑二百七十尺、五坑百尺、六坑百八十尺、七坑四十尺なり。

選 鑛 従來坑外に於て鑿坑卷揚をなし選鑛場に送りしが昭和三年大切坑の岩脈貫通と共に坑内捲揚に變更し下部の鑛石は大切坑建蓋（四坑）に手捲揚をなし坑口前の選鑛場に於て小割選鑛を行ひ千分四以上を精鑛とし塊鑛及粉鑛を區分し品位により之を更に四種に別けて鎮南浦製鍊所に賣鑛す。

廢鑛は坑外に貯積せるもの約五十萬貫に達す、之れも相當量の含銀あるを以て後日何等かの方法にて處理すべきものなりと云ふ。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末現在）

種別	人員	最高		最低		平均
		量	價	量	價	
坑夫	三四		〇・七〇 ^円		〇・五五 ^円	〇・六三 ^円
支柱夫	三		〇・八五		〇・六八	〇・七七
見習坑夫	一〇		〇・五五		〇・五二	〇・五四
運搬夫	三四		〇・五三		〇・四五	〇・四九
鍛冶夫	四		〇・九〇		〇・四二	〇・六六
雜夫	一〇		〇・五五		〇・四五	〇・五〇
選鑛計	一五〇		〇・六〇		〇・二〇	〇・四〇

鑛產額

年次	販賣		種類
	數量	價額	
大正十一年	三二、四九九 ^匁	一八、〇三九 ^円	正碓
昭和二年	一三、四、五一七	一〇、〇、二四五	和碓
昭和三年	二二、四、〇二〇	一〇、一、〇〇五	和碓

斗美金鑛 (金)

京畿道安城郡瑞雲面

鑛業權者 徐承元

登錄第六四〇二號

面積 五四二、六三〇坪

沿革 本山は大正十年十月洪文弼、崔永安等許可を受け同十二月三日阿部今雄の所有となり同十三年十一月現鑛主に移轉し今日に至れり。

交通 本山に到るには京釜線成歡驛より自動車にて良岱里に到り良岱里所在鑛山事務所より本山の假事務所に至る約一里は徒歩にて一時間を要す。

地質及鑛床 附近の地質は花崗片麻岩にして鑛床は裂隙充填石英鑛脈なり主なる鑛脈一條にして走向露頭に於て北二十度、三十度東なれとも地下に於て南北となり傾斜露頭に於て六十二度東なれとも三百尺下底に於ては八十度東となれり鑛脈の幅は五寸乃至三尺露頭の延長は甚だ大にして南は天安郡の中央鑛山北は安城郡安城金山に連れるが如し。

鑛石は白色石英硫化鐵、硫酸鐵、及閃亞鉛鑛を含有し硫化鐵鑛の密集せる部分は含金量品位貧弱にして閃亞鉛鑛の散點せる部分良好なり。

探 鑛 探鑛は手掘發破法にて階段掘による坑道は第一坑道より三百五十尺にて第一堅坑を掘鑿し其の深さ三百三十尺あり第一堅坑の南七十尺に第二堅坑ありて深さ三百七十尺に達す第二堅坑を中心として大體五十尺の間隔をおきて左右に水平坑道を開鑿し現在下七號坑道を最下底坑道とす。

鑛石は坑内主要坑道に軌條を敷設し鑛車にて捲揚機まで運ぶ第一坑道の第二堅坑口及其の百五十尺下方の二個所に手捲揚機を設け三百尺を二段に區分して捲揚を行ふ排水は捲揚機により通風は自然通風による。

運搬及製鍊 坑内よりの鑛石は選鑛場にて小割手選を行ひ牛車にて良岱里中央鑛山所屬製鍊所に運び同所搗鑛機を借りて製鍊を行ふ。

鑛夫員數及賃金(昭和三年十二月末現在)

種 別	人 員	賃 金			
		最 高	最 低	平 均	
坑 夫	三五	〇・八五 ^円	〇・五〇 ^円	〇・六八 ^円	
支 柱	五	〇・七五	〇・五〇	〇・六三	
運 搬	一〇	〇・六〇	〇・六〇	〇・六〇	
機 械	二	一・五〇	〇・七〇	一・二〇	
工 作	三	一・二〇	〇・六〇	〇・九〇	

滿里金山 (金)

昭 和 三 年	昭 和 二 年	昭 和 一 年	大 正 十 五 年	年 次	販 賣	
					數 量	價 額
			地 金			
					一五、三七五	五二、九三四
					二二、三一六	五七、三〇七
					一七、三九七	七四、五七七

鑛
產
額

計	外 坑					雜 夫
	雜 夫	工 作 夫	運 搬 夫	選 鑛 夫	採 鑛 夫	
八 七	五	二	五	五	九	六
	〇・六〇	二・〇〇	〇・八〇	〇・七五	〇・八〇	〇・六〇
	〇・五〇	〇・八〇		〇・五〇	〇・五〇	〇・四五
	〇・五五	一・四〇	〇・八〇	〇・六三	〇・六五	〇・五三

忠清南道保寧郡川北面

鑛業權者 久恒貞雄
鑛業代理人 松本増太郎

登錄第四五三六號

面積 四四〇、七二〇坪

沿革 本山は山田某等大正七年三月許可を得、同八年水車を設備し混末及青化製鍊を行ひ、同九年よりは賣鑛を行ひ更に十年十月搗鑛杵二十本及吸入瓦斯一エンジン」を設備し一日約八百貫の鑛石を處理したり、同十三年四月現鑛主の手に移轉し専ら探鑛に努め同十五年夏十五馬力の發動機及百封度の鐵製搗鑛杵二十八本を新設して、更に昭和二年二十馬力發動機及搗鑛機を増設し、現在鐵製杵五十六本を以て一日約一千貫の鑛石を處理するに至れり。

交通 事務所は、鑛區の北部河滿里に在り南は鰲川港に臨み、東南三里半にて京南線廣川驛に達す。

地質及鑛床 地質は準片麻岩にして鑛床は該岩中に胚胎せる裂隙充填石英鑛脈なり。

已に發見せられたる鑛脈八本の中五本は有望視せらるゝも、現在探掘中の鑛脈は二條にして主要脈は走向北二十八度西、傾斜直立、脈幅三尺乃至十二尺平均四尺にして、事務所の南方に於ける大露頭の如き幅三十尺に達するものもあり、而して露頭の延長二十餘町に達すれども探鑛本た充分ならずして其の連絡明かならず。

鑛石は白色石英に硫化鐵鑛、方鉛鑛及閃亞鉛鑛を含有し外觀良好にして本鑛脈の各露頭に於ける試料五十餘種の平均品位は金〇、〇〇三四%を示せり。

參考試料の分析左の如し。

一、金	〇・〇一一七三%	銀	〇・〇〇二六六%	事務所の南方約二百間にある舊坑外の貯鑛 平均硫化鑛
二、金	〇・〇〇三〇三	銀	〇・〇〇一八〇	搗鑛元鑛
三、金	〇・〇〇一八〇	銀	〇・〇〇一四三	搗鑛々尾の青化原鑛
四、金	〇・〇〇〇一六	銀	〇・〇〇〇二三	青化鑛尾廢鑛

採鑛 總て手掘にして爆發藥を使用し、階段法に依り掘進し切羽よりは人背によりて搬出し、坑口前に於て手選鑛を行ひ自動鐵索にて製鍊場に運搬す。

製鍊 搗鑛は百封度鐵製杵五十六本を以て一晝夜約千貫の鑛石を處理し、臼内にて混汞金を採收し臼外銅板を備ふ。

青化製鍊は木製溶解槽（徑四尺五寸深三尺二寸、容量四百五十貫）十四個及混凝土造（四尺五寸平方深三尺容量七百七十貫）八個あり、其の操業は每槽に砂鑛四百五十貫に對して石灰五升青化加里百七十匁の割合にて溶解し、十二時間靜止せしめたる後貴液を亞鉛箱に通さしめ、其の液を更に元の青化槽に循環せしむること五晝夜にて操業を終るものなり。

坑口より二十八尺下底に疏水坑道あり、坑内水は手押一ポンプにて揚げて疏水坑道により、之を搗鑛所に導きポンプにて揚げて搗鑛用水に使用せり。

原動機 超ディーゼル式自點火發動機 二〇馬力一臺 一〇馬力一臺

此の發動機は豎式にして高五尺なり故障を生ずること少く、此外豫備として横式發動機六馬力一臺あり之れにては搗鑛杵二十本を運轉し得と云ふ。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑柱	一	三・〇〇	〇・六七 ^円	一・三八 ^円
支柱	一	二・五〇	二・五〇	二・五〇
運鐵	三	〇・七〇	〇・四四	〇・五八
運搬	三一	〇・六七	〇・四〇	〇・五三
製鍊	一八	〇・八〇	〇・四五	〇・六一
機械	四	二・七〇	〇・四二	一・五三
計	六九	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇

鑛 産 額

年 次	販 賣		價 額
	數 量	高 額	
大 正 十 二 年	精 鑛 一、二、三五〇斤	一、〇、二五五	
同 十 四 年	青 金 七、五五五	二五、〇九〇	
昭 和 二 年	同 一、二、五五九	四〇、一〇一	
昭 和 三 年	同 一、〇七九	三六、六六五	

九 峰 山 金 鑛 (金)

忠清南道青陽郡斜陽面

鑛業權者 外 城 市 郎

登錄第九〇三號

面積 三八五、四四七坪

沿革 本山は明治四十四年冬金泰圭許可を受けて徳太式稼行を行ひしが、大正五年六月現鑛主之を買收し更に大切坑を開鑿して下底の採掘をなすに至り、又鹿兒島式水車を建設して作業一新せり。然るに大正七年雨期に際し鑛滓を附近の田地に流入せしめたるため、鑛毒問題の紛争を生したるが

妥協の結果、毎年四月二十日より八月二十日に至る四箇月間、水車運轉を中止することゝして無事落着せり。

交通 本山は青陽の南西二里弱にあり京釜線天安驛より京南線にて禮山に下り自動車にて約九里青陽邑に着し、徒歩或は馬背にて約二時間を要して本山事務所に達するを得。

地質及鑛床 附近の地質は雲母片岩及花崗片麻岩より成る。

鑛床は裂罅充填石英鑛脈にして主なる鑛脈七條あり、内六條は走向北三十度乃至五十度東、傾斜三十度乃至七十度の間にありて或は南落或は北落あるも略々互に平行し、他の一條は之れと略々直角に交叉し傾斜二十度乃至六十度東、走向北西二十度乃至五十度を示し共に脈幅三尺乃至八尺に膨縮し平均四尺にして品位良好なり、鑛石は乳白色の堅緻なる石英に黃鐵鑛、閃亜鉛鑛、方鉛鑛、黃銅鑛、硫砒鐵鑛等を含育し平均含金量品位十萬分の二内外なり。

現況 第三坑附近の四條の鑛脈は前鑛主時代亂掘せられたるものにして、現鑛主も少しく探鑛を行ひしも製鍊能力の關係上採掘を中止し、専ら第四坑附近の鑛脈三條を採掘中にして、一日鑛夫約六十名を役し一日採鑛量約四千貫なり。

探鑛及採鑛 第四坑に於て一號鑛の掘進延尺千餘尺、二號鑛五百餘尺、三號鑛四百餘尺あり主に一號鑛及二號鑛を採鑛を兼ねて採鑛中なり、總て手掘採掘にして三交代作業をなせり。

母岩比較的軟弱にして爆發藥の使用量鑛夫一人常平均三十匁、坑内の湧水少く手押ポンプを以て排水を行ふ。

選鑛及運搬 主要坑道及坑外選鑛場までは軌條を敷設し、鑛車にて鑛石を運搬し鐵格子を通し塊鑛は小割手選を行ふ。

精鑛を水車場に運ぶには人肩若くは馬背に依り請負制を採用す。

製 鍊 木製搗鑛杵十本立の鹿兒島式水車七臺あり、中射式にして水車の直徑十五尺あり、從來搗鑛量一日百五十貫位なりしも自動給鑛機を設備して以來二百五十貫位に増加せり。

此の自動給鑛機は現鑛主の考案にして左の如き特點あり。

- 一、搗鑛量は從來に比し五割以上増加す。
- 二、給鑛均一なるを以て收金率増加し搗鑛機の磨損を減少す。
- 三、人力を要せず。

四、給鑛機の製作簡便にして如何なる小鑛山にても作製使用し得。

從來青化製鍊として徑四尺高三尺容量二百貫の青化槽十三個を設け、青化製鍊を行ひしか最近汰鑛採取の有利なるを試験し全く青化法を廢し、鑛主の考案になれるネコ流しを以て汰鑛を採取し鎮南浦製鍊場に賣鑛せり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑夫	三〇	〇・七〇 <small>円</small>	〇・四〇 <small>円</small>	〇・五五 <small>円</small>
支柱	一	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇
坑內運搬	三	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇
坑外運搬	五	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
選鑛	五	〇・三〇	〇・二五	〇・二八
製鍊	七	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
雜計	五九	〇・四〇	〇・四〇	〇・四〇

鑛產額

年次	販賣	
	數量	價額
大正十二年	青金 一一、八八五 <small>磅</small>	三八、六〇〇 <small>円</small>
同 年	青金 四、一二〇	一四、四二〇 <small>円</small>

昭 和 三 年	昭 和 二 年	昭 和 十 五 年	大 正 十 四 年
汰 精 青 金 鑛	汰 青 金 鑛	汰 青 金 鑛	青 金 鑛
八、〇〇〇 〇	六、〇〇〇 〇	八、七五〇 〇	三、〇〇〇 〇
八、〇〇〇 〇	八、三一三 〇	一、五〇〇 〇	六、〇三七 〇
三六、九六五	三一、七九五	二二、五四四	七、五九〇 〇
			二四、六六七 〇

中央 鑛山 (金 銀)

忠清北道鎮川郡鎮川面、栢田面

忠清南道 天安郡笠場面、聖居面、北面、葛田面
芽山郡陰峰面

登錄第五六八六號 外六

面積 四、九五九、〇七四坪

鑛業權者 朝鮮中央鑛業株式會社

沿革 本會社は大正十五年二月稷山金鑛の一部事業を繼承して成立したるものなり、稷山金鑛は元安城金鑛と稱し朝鮮王室の所有に屬せしが明治三十三年八月澁澤、淺野兩氏の稷山金鑛となり、同

三十八年十月朝鮮探鑛會社と共同經營の契約を締結し、同四十年砂長洞に鑿坑を開鑿して作業せしむ。好結果を見るに至らず、同四十四年八月米國ハアジニア州に於て稷山鑛業株式會社の創立せらるゝや、同社は専ら採取を目的とせり、大正十五年二月本會社新設せられ、前記鑛區及製鍊所を買收して坑内作業及買鑛をなすに至れり。

交通 會社の事務所は笠場面良釜里に在り、京釜線成歡驛の東方三里にして、自動車一日二回定期往復す。

地質及鑛床 附近の地質は黒雲母花崗岩及灰色花崗片麻岩より成り、鑛床は此の兩岩の接觸部に於て花崗片麻岩中に胚胎せる石英鑛脈にして、本山事務所所在地良釜里を中心として露頭の延長三里に及ぶ。主要鑛脈は走向北五十五度乃至六十度東、傾斜東南六十五度乃至八十度にして鑛石は白色石英に黃鐵鑛、黃銅鑛、閃亜鉛鑛、方鉛鑛及硫砒鐵鑛を含有し脈幅最大十三尺平均四尺なり。

採鑛及開坑 從來主に採掘せられたるは砂長洞及文珠洞の二個所なり、砂長洞坑は水平坑道十一階あり其の間隔百尺にして掘進延尺最大三千尺、脈幅最大十三尺平均五尺。

文珠洞坑は水平坑道八階あり其の間隔百尺にして、掘進延尺最大千五百尺、脈幅最大七尺平均四尺。露頭部より鑛床に沿ひて斜坑を掘下し、垂直百尺毎に水平坑道を設け百尺毎に坑井を掘下して相連絡せり。現在採鑛中の主なるは堂谷鑿坑にして五番坑道舊坑を取明排水を了し採鑛し鑛石は坑口前に

於て手選鑛をなし牛車によりて製鍊場に運搬す。

製鍊 良岱里に搗鑛青化製鍊所あり、搗鑛機は鐵製千二百五十封度杵二十五本（五本立五百）を以て混成製鍊を行ひ鑛尾を青化製鍊に附す、青化槽は五十五噸裝入タンク五箇、二十五噸鐵製タンク二箇を設備し青化法を施せり。一日の採鑛精鑛約八十噸なり。

動力 動力は從來稷山金鑛所屬成歡發電所より供給を受けしが、同所の廢止と共に天安發電所より受電をなし排水捲揚及製鍊場に使用せり。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑夫	一〇八	〇・八五	〇・六八	〇・七六
支柱	四	一・〇〇	〇・八五	〇・九三
運搬夫	八三	〇・六〇	〇・五〇	〇・五五
製鍊夫	六	〇・八五	〇・七〇	〇・七七
機械夫	五	一・〇〇	〇・五〇	〇・八〇
工役夫	三	一・六八	〇・七五	一・一二
計	二三五	〇・六〇	〇・五〇	〇・五五

浩美金鑛

鑛産額

二〇

年次	取		賣		高	額
	數	量	價	額		
昭大 正和十元五年	青金鑛	青金鑛	青金鑛	青金鑛		七七、九二二 <small>圓</small>
昭 和 二 年	青金鑛	青金鑛	青金鑛	青金鑛		一二五、二九八
昭 稅 三 年	青金鑛	青金鑛	青金鑛	青金鑛		一三〇、七八六

浩美金鑛 (金)

忠清南道天安郡笠場面
京畿道安城郡瑞雲面

鑛業權者 徐承元

登錄第七〇九〇號

面積 五九三、一二七坪

沿革 本山は元稜山金鑛の一部なりしも大正五年頃鑛區整理の際廢區となりたるものにして、大正十年十一月崔永安鑛業權の許可を受け、登錄第六四五七號鑛區として一時稼行せり、其後現鑛主の

所有となり同十四年三月之を分割して登録第七〇八九號及七〇九〇號の兩鑛區となし、本山は同年四月金採準に移り同年十二月再び現鑛主の所有となりて同十三年以來盛に稼行中なり。

交通 京釜線成歡驛より三里にて本山事務所々在地良岱里に達す、定期に自動車發着し交通至便なり尙本山の西方一里に京南線稷山驛あり。

地質及鑛床 附近の地質は黑雲母花崗岩及灰色花崗片麻岩より成り、其の兩岩の接觸部に於て主に片麻岩中に鑛床賦存し、走向北四十度東傾斜東南八十度脈幅一尺乃至五尺平均二尺なり。

鑛石は白色の石英に少量の硫化鐵鑛を含有す。

採鑛 探鑿は總て手掘發破に困り階段掘法を行ふ。

鑛坑の深四百五十尺、水平坑道の最大掘進八百餘尺に達す。

排水は坑内に三臺の唧筒を設備し電動機十馬力二臺、五馬力一臺を以て運轉す。

製鍊 本山にて從來稷山金鑛所屬製鍊所の搗鑛杵十五本、淘汰盤三臺及び之に要する動力合せて一箇月使用料一千圓にて賃借し、相當の利益を擧げたるも該製鍊所が中央金鑛に移屬せられたる以來、鑛石一噸に付搗鑛賃四圓及鑛尾を提供せらるゝに至り、本山の如く合金品位比較的貧弱なるものにては收支相償はすして事業繼續困難となれり、依りて昨年中經費四萬餘圓を投して一日六十噸を處理する製鍊所を新設せり其の設備の大要左の如し。

- 一、ロツド、ミル 一臺 一日碎鑛量 四〇噸 所要動力 八、五馬力
- 二、スクリーン、ボール、ミル 一臺 一日碎鑛量 二〇噸 所要馬力 八、〇馬力
- 三、發電機 一臺 七十五馬力

而して此の一ロツド、ミル「ボール、ミル」「ウイルフレント、ライプル」は米國製にして發電機は瑞典製なり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金			
		最高	最低	平均	均
坑夫	三〇	〇・八五	〇・五〇	〇・六八	〇・六八
支柱夫	七	〇・七五	〇・五〇	〇・六二	〇・六二
坑内運搬夫	一〇	〇・六〇	〇・五〇	〇・五五	〇・五五
坑外運搬夫	五	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇
機械夫	四	一・五〇	〇・七〇	一・一〇	一・一〇
坑内工作夫	三	一・二〇	〇・六〇	〇・九〇	〇・九〇
坑外工作夫	二	二・〇〇	〇・八〇	一・四〇	一・四〇
坑外採鑛夫	八	〇・八〇	〇・五〇	〇・六五	〇・六五
選鑛夫	五	〇・七五	〇・五〇	〇・六三	〇・六三

製	坑	坑	試
錄	內	外	計
夫	夫	夫	夫
二	五	三	二
八	六	二	六
二・〇〇	〇・六〇	〇・六〇	一・〇〇
一・五〇	〇・四五	〇・五〇	一
一・七五	〇・五三	〇・五五	一・〇〇

鑛 産 額

年	次	販		賣		高
		數	量	價	額	
昭大	正和十元五	金	一〇、四五三 <small>加</small>			五二、四〇一 <small>円</small>
昭	和	青	一六、七九〇			三三、二九一
昭	和	青	九、二八二			三〇、一六七

稷 山 金 鑛 (砂 金)

京畿道安城郡薇陽面
忠清南道天安郡笠場面
登錄第二四一七號

鑛業權者 稷山金鑛株式會社

稷山金鑛

面積 五九七、四〇〇坪

沿革 本山は元朝鮮王室の所有に屬し安城金礦と稱したりしが、明治三十三年八月濫澤、淺野組合稷山金礦として特許を得、四十四年稷山礦業株式會社創立せられて之に移り、大正五年三月特許權を拋棄し同時に鑛業令に依る鑛業權を設定し、七年四月現鑛業權者之を繼承し爾來稼行を繼續せるも昭和三年五月限り作業を休止せり。

交通 事務所は笠場面良釜里に在り、京釜線成歡驛の東方三里半道路平坦にして自動車及車馬を通し交通甚だ便なり。

地質及鑛床 本鑛區附近は黑雲母花崗岩、片麻岩及洪積層より成る。洪積層は厚さ二十尺餘にして泥土、壤土、砂礫、甘土の累層をなし其磐岩は主として花崗岩よりなり甘土は褐色を呈し石英の角礫細砂を混入し雲母長石、石榴石、磁鐵礦、「モナヅ」石等を隨伴す。

採掘及製鍊 浚渫は長六十呎乃至百呎幅八呎乃至十二呎深二十呎を一浚渫と稱し「スウキング」と機體の進退によりて上部より深さ六吋乃至一呎餘宛掘り下り、三四時間にて一浚渫を終了す（バケツトの速度は一分間六十呎）一箇月間には二十萬立方碼を浚渫すると云ふ、即ち粘土及砂礫層の深さ二十呎とせば約七千五百坪を浚渫することとなる故に一ヶ年約九萬坪を浚渫し得べし、採金は船内に於ける淘汰設備に依る初め表土を作業するときは圓筒篩の右方回轉に因りて表土は速に篩の一端より出

で「ベルト」にて船尾より約百呎の堆積場に排出す、砂礫層に達せば豫め低壓水にて篩内の泥土を洗滌し砂礫の篩分に入るときは篩は逆回転し、砂礫は篩内面の螺旋砂止板にて妨げられて進行緩慢となり、篩内に装置せる放水管より出る高壓水に依り礫と土砂とは分離し、金粒は砂と共に篩目を通過して「テーブル」に至り粗大なる砂礫は篩の終端より出て堆積場に棄てらる、金粒は「リップル」の間に投入せる水銀に觸れて汞化し細砂のみ船外に出づ、金の大部分は「テーブル」上にて收得せらる、も又一部は篩の上端三尺許の部分より逸出する細砂と共に「セーボール」に入り茲にて回收せらる水銀の投入量二日に一回四十斤を加へ十日に一回汞化金を集取し四尺角「クリーナ」ボックス」にて少量の「ソデウムアマルガム」を加へ尙遊離状態にある金を汞化せしめ之を良岱里に送りて精金を得。

浚深機々構大要

製造所 米國紐育エンヂニヤリング會社

バ ケ ツ ト クローズコンネクテット式滿筒鋼製ピッチ三十六吋總數六十三、一個の重量二千八百封度容量十立方呎

ラ ツ タ ー 長七十八呎、水平線下の掘鑿限度二十八呎

上 部 ダ ン プ ラ ー 甲板上の高二十九呎、軸徑十四吋、重量一萬四千封度

回 筒 篩 徑八十四吋長四十六吋傾斜十度五萬六千封度、孔徑八分の三、十六分

テーパーブル

の五、十六分の七、二分の一吋の四區分

上下兩段左右二列四箇の總面積四千八百平方呎、一テーパーブル千二百平

方呎は十四區に分たれ各區共上部は六度下部は七度傾斜

スタツカーベルト

長四十二呎幅八呎四吋

ガイドライン

鋼索二本は徑一時他の二本は徑四分の三吋

ヘットライン

鋼索徑一時八分の三

メーンウキンチドラム

數七箇ドラムの徑二十吋

唧筒

離心式電動機直結高壓、低壓二種あり

區別	主要送水管徑	落差	毎分送水量
高壓	一二吋	六〇呎	四五〇 <small>立方呎</small>
低壓	一六	二五	六〇〇

豎型ボイラー

一、徑六呎高十二呎冬季解氷用

電 動 機

バケツト	二百馬力
ウキンチ	三十馬力
高 壓 唧 筒	百二十五馬力
低 壓 唧 筒	七十五馬力
圓 筒 篩	六十馬力
スタツカー	五十馬力
工 作 用	七十五馬力

原動機 成歡驛を距る數丁、驛に隣接して火力發電所を設く、「バブコックアンドウィルコック」式汽罐三基（内一基豫備）六百六十馬力、「カーチスタービン」一臺及之れと直結せる五百「キロ」三相交流發電機一臺を設備す。

鑛 夫 員 數 及 賃 金（昭和二年十二月末現在）

使役人員七四人賃金は〇・六〇^円 一・七五^円なり。

鑛 産 額

鞍山金銀

年次	年	數	量	賣價	
				價	額
大正十二年	十二月	銀金	六四、六八八	一六、七五四	三、二六〇、一三〇
同 十三年	十二月	銀金	一七、九七二	一七、九七二	四〇三、九〇六
同 十四年	四月	銀金	一六六、六〇五	一六六、六〇五	三九五、三〇五
昭和一十五年	五月	銀金	一九九、九三二	一九九、九三二	四一四、三二四
昭和一十六年	二月	銀金	一七八、五八一	一七八、五八一	四〇四、五四四
昭和一十七年	三月	銀金	三〇、五一九	三〇、五一九	一五九、七八二

大興鑛山 (金)

忠清南道天安郡聖居面、北面一笠場面

鑛業權者 孫 泳 董

登錄第五三七五號

面積 二六八、九一五坪

沿革 本山は大正八年三月現鑛主許可を得、昭和二年九月事業に着手し最初水車搗鑛機により混

煉製錬を行ひしが後機械製錬の設備をなし事業を擴張して今日に至る。

交通 本山事務所は聖居面天興里にあり京釜線成歡驛より自動車にて笠場市場に至り、徒歩一里半或は天安驛より京南鐵道京畿線石橋驛に下車し更に徒歩一里にて達することを得。

地質及鑛床 附近の地質は花崗片麻岩より成り鑛床は該岩石中に胚胎せる石英脈にして、事務所の東方約二十丁北面内にあるを主要脈とす、その走向北七十四度東、傾斜北六十七度露頭の延長五十間脈幅一尺乃至三尺鑛石は白色石英に少量の黄鐵鑛を随伴せり。

採鑛 鑛入坑二百二十尺にて着脈し鑛押坑道三百餘尺を開鑿して階段掘法により採掘す、鑛石は坑外にて小割手選を行ひ精鑛を自動索道にて製錬場にて運搬す。

製錬 鐵製百五十封度五本並二台の搗鑛機を備へ、五馬力石油發動機により運轉し一日精鑛七百貫を處理す、尙在來の木製水車二十本立搗鑛機は増水時臨時之を使用す、鑛尾は混凝土築造溶解槽（徑六尺深四尺）二個を以て汚化製錬を行ふ。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

種別	人員	賃			平均
		最高	最低	平均	
坑夫	二六人	〇・八〇	〇・五〇	〇・六五	

光陽鑛山

支	運	製	機	策	雜	選	計
柱	搬	鍊	械	治	鐵	夫	夫
二	八	四	四	四	六	六	六〇
一・一〇	〇・六〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・六〇	〇・六〇	〇・六〇
〇・九〇	〇・四〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・四〇	〇・四〇	〇・四〇
一・〇〇	〇・五〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇

三〇

鑛產額

昭 和 三 年	年 次	數	販		量	價	高	額
			賣	賣				
精鑛	青鑛	二、〇〇〇	九、七〇〇	〇・九	〇・九	三三、九九二		

光陽鑛山 (金銀銅)

全羅南道光陽郡光陽面

鑛業權者 野口 直 邊 外二名
鑛業代理人 飯沼 直 鋼

登錄第一九八號 第二五三八號
第三五六三號 第六七六七號

面積 合計 一、八二七、五九五坪

沿革 登錄第一九八號鑛區は大正四年冬朴在根許可を受けて、鑛業に着手したるものにして實に本地方に於ける金鑛業の創始なりとす。大正五年頃一時鑛況隆盛にして鑛山に従事する鑛夫二千餘名の多數に達せり。

其後或は興り或は衰へ大正十年五月に至り、現鑛主の所有するところとなり採鑛、選鑛、運搬、動力等の設備を改良して今日に至れり。

登錄第二五三八號 本鑛區は大正五年六月松原早藏許可を受けて一時盛に稼行せしが、露頭附近の鑛石を掘盡して中止せり、大正十五年十一月現鑛主の所有となれり。

登錄第三五六三號 本鑛區は大正六年六月の許可にして同九年五月松原早藏の所有となり、前記第二五三八號鑛區と共に松原鑛山と稱せしが大正十五年十一月現鑛主の所有に屬せり。

本鑛區は從來地表に於て殆ど採掘せられたること無きも、登錄第一九八號鑛區の南部に隣接し其の二號鑛の鑛光が本鑛區内に連れり。

登錄第六七六七號 本鑛區は大正十二年六月木田竹二郎許可を受けて探鑛に着手し、同年八月現鑛主の所有となれり。

以上四鑛區を合せて光陽鑛山と稱す。

交通 本山は光陽灣に臨み光陽の南一里、朝鮮郵船の密航地下浦の北方二里に位し、光陽下浦間一日一回自動車定期往復し水陸の交通運搬甚だ便利なり。

地質及鑛床 地質は主として花崗片麻岩より成り眼球片麻岩、河東片麻岩及中生層の砂岩、頁岩等を夾在し鑛床は片麻岩中に胚胎し裂罅充填石英鑛脈にして、附近一帯に多數の鑛脈賦存し光陽全鑛地帯と稱して世に名あり。

鑛脈の主なるもの十數條あり其の幅五寸乃至四尺時に一寸位の細脈あり、多く走向斷層を伴ひ玢岩の岩脈は鑛脈を切斷し或は之に沿へることあり。

鑛脈の走向は北二十度東及北四十五度東の二種に大別し得べく、傾斜は八十度乃至九十度に急斜せり、鑛石は黃鐵鑛、方鉛鑛、黃銅鑛、閃亜鉛鑛、硫砒鐵鑛、磁硫鐵鑛又時としては菱鐵鑛を含有する含金銀石英鑛なり、而して鑛脈は玢岩脈に切斷せられ又は接近する際は品位貧弱にして遠ざかるか又接觸する際は富有となり、而して硫化物より見るときに其結晶質の時貧弱にして非晶質の時富良なる傾向あり。

當時主に採掘する鑛脈は登一九九八號鑛區に於ける一號及二號鑛にして脈幅一尺金の品位平均十萬分の四なり。

現 狀 當時使役する鑛夫は約五百名、一箇月採鑛量十五萬貫なり鑛石は坑外にて手選を行ひ汽船にて岡山縣宇野港外三菱直島製鍊所に賣鑛中なり。

採鑛及開鑿 一坑は横切百六十五尺にて一號鍾に着脈せり。

二坑は一坑の直下百十尺にして横切五百尺にて一號鍾に着脈せり、而して西方へ鍾押掘進九百尺にて一號鍾及二號鍾の交叉點に着し、更に西方へ採鑛を兼ねて掘進し二千三百尺にして旭坑に貫通せり。尙交叉點より東向に二號鍾を進み二千三百尺を進めり。

三坑（通洞坑）は二坑の直下百八十尺にして横切二千百尺にして、一號鍾及二號鍾に着脈し鍾押にて左右に掘進し一號鍾は面白交叉點を過ぎ既に尙百尺を進めり。

主要なる坑道の開鑿には鑿岩機を使用し、其の他は總て手掘にて上向階段掘を行ふ。

選 鑛 採掘せる鑛石は軌道により坑外選鑛場に運びて、一寸目の鐵格子を通し塊鑛を分ち大塊小割手選を行ひ、粉鑛は水洗して上鑛を送別し下鑛は昭和三年中新設せる機械選鑛場に於て處理す、その設備左の如し。

一〇吋×七吋ブレイキ、クラツシヤ一 一 臺

六呎×十六吋コニカル、ボールミル 一 一 臺

六呎×十八吋複式ドル型クラツシフアイヤ一 一 一 臺

- 一〇 呎KK式フロテーター
- 二 臺
- 十番型ウイルフレター、テーパー
- 一 臺
- 五〇馬力瓦斯エンジン（ボールミル用）
- 一 臺

一晝夜處理鑛量一貫元鑛品位含金十万分の三、五精鑛品位十万分の一四内外なり。

運搬方法設備 主要坑道及選鑛場より海岸まで十二封度の軌條を敷設し、二百貫入り木製鑛車にて鑛石の運搬を行ひ、精鑛は包装の上海岸より光陽灣内貯鑛小島に舁を以て運搬貯鑛し、更に貯鑛場より補助船又は帆船にて岡山縣直島製鍊所に賣鑛す。

原動機 從來七五馬力吸入瓦斯機關一臺を以て鑿岩機用空氣壓搾機、唧筒、電燈等に配電せしが本山の事業擴張に伴ひ動力の不足を感じたるを以て、昨二年中二百馬力の吸入瓦斯機關及百二十キロの空氣壓搾機を設置せり。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

種 別	人 員	賃 金			
		最 高	最 低	平 均	
坑 夫	二七三	一・二五 <small>円</small>	〇・七八 <small>円</small>	一・〇二 <small>円</small>	
支 柱 夫	一八	一・一〇	〇・五六	〇・八三	

高靈鑛山

三六

昭	昭	昭大	大	大
和	和	正和	正十	正十
三	二	元五	四	三
年	年	年	年	年
同	同	金銀銅鑛	金銀銅鑛	金銀鑛
一、四一八、〇〇二	一、五六六、一三〇	一、三六八、〇二九	一六一、八九一	七六〇、三四四
				二五、五三四
				七六〇、三四四
				二、五、〇〇〇
				四八六、四四一
				四一六、二〇〇
				五二二、四六三

高靈鑛山 (金銀)

慶尙北道高靈郡雲水面 鑛業權者 佐藤周藏

登錄第一八五號

面積 三一六、九四八坪

沿革 本山は約五十年前の發見にして當時韓國政府により經營せしものなるが日露役の交、内地人荒木嘉作の操業する處となり、明治四十一年、同四十四年、大正四年權者を代え大正七年末前權者慶田利吉外二名より譲受けたるものにして、爾來五年間經營に苦み悲境にありしが大正十三年度鑛況の好轉に加へ經營法の改革により順調となり、以來引續き純益を擧げ昭和二年五月製鍊所を新設し今

日に及びり。

交通 本山は大邱府の南西九里高靈邑の北方二十餘町に在り、高靈は大邱より慶南普州居昌に至る定期自動車通路にして山元へは臨時自動車を通す。

地質鑛床 附近地質は中世層珠羅紀の蟹岩、砂岩、頁岩等にして其の走向北七十度東、傾斜南二十度前後をなす、鑛床は砂岩、頁岩間には岩床を成す、柱長岩中に胚胎せる鑛脈にして方鉛鑛、閃亜鉛鑛に輝銀鑛を含み自然銀を産す、一時産出せしものは厚さ三四分に過ぎざれとも銀五〇%に及びしものあり、本鑛の外繁昌鑛三號鑛其他數十の細小脈あり、本鑛は其の走向北三十度西傾斜南七十乃至九十度西を示し脈幅三四寸乃至二尺あり、多くの細脈を分岐するも延長一千尺以上に發達す、三號鑛は本鑛の東百五十尺にあり走向北二十度東、傾斜西八十度を示し脈石に石英を増し含金に富む、脈幅五寸乃至二尺五寸延長八百尺あり、繁昌鑛は三號鑛の東約四百八十尺にあり走向北十度東傾斜東八十度をなし幅一尺内外の石英脈にして三百尺前後の採掘跡を存す。

探 礦 目下本鑛のみを採鑛す則ち二百四十尺の斜鑛入を以て之に着脈し鑛押に移り約六百尺延長す、其の着脈點より百四十尺にして第一堅坑あり七十二尺を降る、更に百八十尺にして第二堅坑を穿ち下ること七十尺にして第二水平坑を鑛押し約三百五十尺を延長し第一堅坑とも連絡す、兩堅坑中間第二水平坑より掘下ること更に七十尺にして最下低とす、目下の採掘は主として是等掘下附近とす採

掘は手掘爆破法を以てし鑛脈不規則なる切羽を備ふ。

選鑛及製鍊 坑内に於ては單に脈石と母岩を選別するに止め、坑外手選により更に硫化鑛を選別し一時位の小割となし日本鑛業馬山買鑛所に賣鑛す、其の品位普通銀千分の二前後にして以下の鑛石は製鍊により、從來の貯鑛と共に一部混汞銀とし大部汰物として處理せり製鍊系統及設備左の如し。



碎鑛機 プレーキクラツシャー 八×一二吋 一臺

搗鑛機 四百五十封度 五本立 二臺

鍍銀銅板 三尺×一尺二寸 四枚 三組

ウキルフレー汰盤 六番型 一臺

油選鑛機 一臺

原動機 蒸氣汽鐘及汽機を使用し燃料は九州炭を以てす。

汽鐘 六×一二呎 ランカシャー 一臺

汽機 二段單氣筒 三十五馬力 一臺

動力傳達はプーレー及ベルトを以てす。

運搬 採掘切羽よりは人背により堅坑底に送り人力捲により第一水平坑に揚げ、半噸鑛車により坑外に搬出し選鑛所に至る、賣鑛石は二十貫入味とし汰物は同麻袋入として牛車を以て十里餘を大邱に至り鐵道により馬山久原買鑛所へ送鑛す。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑夫	二〇	一・二〇 ^円	〇・五八 ^円	〇・八五 ^円
支柱夫	三	〇・六五	〇・五五	〇・五八
運搬夫	四	〇・六五	〇・五五	〇・六〇
選鑛夫	四	〇・六〇	〇・五〇	〇・五七
製鍊夫	一三	〇・六五	〇・三五	〇・五三
鍛冶夫	二	〇・五五	〇・三八	〇・四七
機械夫	二	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇
雜計	一八	〇・七〇	〇・五〇	〇・六七
計	六六	〇・八〇	〇・五〇	〇・六七

鑛產額

年次	取		量	價	高
	數	額			
大正十一年	金	23,900 <small>兩</small>	11,529 <small>兩</small>		
	銀	11,200 <small>兩</small>			
大正十二年	金	16,650 <small>兩</small>	27,600 <small>兩</small>		
	銀	60,000 <small>兩</small>			
大正十三年	金	150,000 <small>兩</small>	90,000 <small>兩</small>		
	銀	175,000 <small>兩</small>			
大正十四年	金	128,000 <small>兩</small>	61,867 <small>兩</small>		
	銀	52,200 <small>兩</small>			
昭和元年	金	6,000 <small>兩</small>	24,847 <small>兩</small>		
	銀	7,000 <small>兩</small>			
昭和二年	金	21,000 <small>兩</small>	27,732 <small>兩</small>		
	銀	33,000 <small>兩</small>			
昭和三年	金	30,000 <small>兩</small>			

金井金鑛 (金)

慶尙北道奉化郡春陽面 鑛業權者 金 庸 柱

登錄第六七四二號

面積 九〇二、〇〇〇坪

沿革 本山地方は往時盛に砂金を採取せられし地にして、大正十一年四月金台原外一名此の地を探鑛し翌年三月出願同四月許可を得着手せしも良好ならざりしが、大正十四年九月山頂に露頭含金頗る豊富なるを發見し、搗鑛水車四臺及青化工場等を建設し直營並に徳大掘にて稼行し來れり、十四年十二月其の名義を金台原の長男金庸柱に移し金台原之れが經營に當れり。

交通 本山は南鮮の高峯太白山の西方連峰の間に在り、京釜線金泉より分岐する慶北線店村驛より自動車二十三里春陽邑に至り更に馬背北方五里にして達す、山元春陽間約三里溪流に沿ふを以て車馬を通せず交通便ならず。

地質及鑛床 本山附近の地質は甚だ複雑し正片麻岩、准片麻岩及陽徳層よりなり、鑛床は准片麻岩中噴出せる「ヘクマタイト」岩脈の中に散點せる金粒即ち含金岩脈にして極めて微粒の黄鐵鑛及方鉛鑛を伴ふことあり、含金不規則に散在し良鑛は百分臺を示す時に痕跡に過ぎざることあり、脈は時々斷層によりて切斷せられ走向を變化すれとも走向大約北二十度内外西を示し、傾斜六十度西より垂直をなし又時に磐返へしの如き反對の傾斜を見ることありて局部的變化に富めり、金は大粒は岩脈中石

英長石の間に夾在し、一見網狀を呈することあれとも檢微鏡下に見るときは石英長石中一様に流紋狀をなして、黃鐵鑛方鉛鑛の微粒來りその中に金を散點するを望むべし、斷層は走向に沿ひ或は之れを切り種々變化を與ふるもその跳返り遠からず、又岩脈に近く石英脈を見ることがありベクマタイト岩脈よりの石英脈と見るべきか又は石英脈か金を持ち來りしや研究を要すべし、岩脈は幅四尺を普通とし一尺乃至六尺餘に膨縮せり。

採鑛及運搬 徳大直轄を併用し鑛入錘押の坑道或は切下り式にして姑息なる方法によれり、錘押坑に於て合金の良好なる部分を切下り切上り式に採鑛し、鑛石は母岩と區別容易なるを以て坑内に於て手選をなし、擔軍人背運搬をなし坑口に出し更に吠詰（麻袋詰）として人背水車搗鑛場に運搬せり。

製鍊 製鍊は朝鮮式木製搗鑛機十本立四臺にして、臼内混汞法によりて搗鑛し鑛尾は沈澱地によりて沈澱し乾燥の上青化製鍊を行ふ、青化滲出槽は徑四尺六寸の木製槽二十本にして一回五日乃至七日を以て終了せり。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

支 出 費 夫	種 別	人 員	賃 金			
			最 高	最 低	平 均	均
五			〇・九〇	〇・七〇	〇・八五	

金井金鑛

年次	販賣		買入
	數量	價高	
大正二年	青金 一、五五九 <small>兩</small>	六、三八〇 <small>兩</small>	
大正三年	二、五〇〇	一、二、五〇〇	
大正四年	二、五〇〇	三、〇、〇〇〇	
大正五年	六、〇〇〇	三、〇、〇〇〇	
昭和二年	六、六一一	三、三、〇五五	
昭和三年	六、〇〇〇	二、九、四〇〇	

鑛產額

種計	選鑛	製鍊	運搬	坑夫	採鑛
七〇	一三	一三	二七	二五	七
〇・六〇	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	〇・九〇	〇・八〇
〇・五〇	〇・六〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七五	〇・七五
〇・五五	〇・七〇	〇・七五	〇・七五	〇・八〇	〇・七五

栗浦金山 (金)

黄海道延白郡海月面 鑛業權者 東洋拓殖株式會社

登錄第一七七七號

面積 九九八、七八〇坪

沿革 本鑛山の發見は最近の事に屬し砂金採取より偶々鑛脈の存在を知り、大正四年五月林洪錫の鑛區となれるものとす當時鑛況甚だ良好なりしたため、遠近の鑛夫此所に集り來る者日に加はり暫くにして千餘名の多きに達し、盛に亂掘したるを以て遂に湧水のため採掘不能に陥り大正六年一月谷口與四郎に讓渡する事となれり、其の後排水探鑛の結果漸次鑛量の確認せらるゝに伴ひ、大正八年第二製鍊所を増設し更に大正十一年十一月第三製鍊所の竣工を見、大正十四年八月までは相當の産金額を持續したれ共其後漸減状態に陥り、昭和三年一月現權者の手に移り今日に至れり。

交通 京義線土城驛より海州街道に沿ひ西方一里二十六町碧瀾渡あり、之れより禮成江を渡り更に西方三十町にして達す、土城碧瀾渡間は自動車の便あり、碧瀾渡山元間は人力車を通す。

物資は主として京城、仁川方面に仰ぎ其運搬經路としては次の四路あり。

一、龍山より川船十八里碧瀾渡に運搬するもの

物資機械類は主として此の經路にして事務所々有の十五噸船に依る。

二、仁川より海上十六里碧瀾渡に到るもの

大貨物機械類及内地より直接移入するものに對しては此の經路に依り百噸積帆船を通す。

三、鐵路土城驛に到り之より牛車二十町深橋より禮成江支流を下る事一里にして碧瀾渡に達するもの

本經路は小貨物の急を要する場合に使用す。

四、土城驛より牛車一里二十町碧瀾渡に到るもの

當經路は結氷期に於ける唯一の運搬經路なれ共、運賃高價のため冬期又は最も急輸送の場合に限らる、而して碧瀾渡元山間は事務所專屬の牛車を使用す。

地質及鑛床 附近地質は主として准片麻岩を挾有する正片麻岩にして、巨晶花崗岩の噴起に依る不規則なる岩脈各所に亂走せり。

鑛床は片麻岩並に花崗岩中に胚胎し殊に准片麻岩の剝理中に存する場合多しと雖、又片麻岩花崗岩の間を充填し或は全く花崗岩中に介在する箇所あり、鑛床は栗浦洞部落の南方約二百間の低地に埋没し大體に於て大なる褶曲をなし、局部的に階段斷層によりて陥落せしめられ共に採鑛上支障を來たす事少なからず、鑛石は白色含金銀石英にして朝鮮内金鑛に多く見らる、硫化物の含有極めて少なく、

僅に一%前後に過ぎず而して硫化物は黄鐵鑛を主とし之に微量の方鉛鑛を伴ふ、金粒は硫化物及脈中に母岩を挾有する附近は粗粒のもの多く時に樹枝結晶の自然金を見る、硫化物中の金粒は微細にして方鉛鑛に比し黄鐵鑛中の含金多く而も結晶形の大なるもの豊高なるが如きも異例なりと云ふべし、大體に於て當鑛石は粗粒金の含有割合多量にして富鑛部含金品位十萬分の二―三なり。

採鑛 現今作業中のものは所謂栗浦鑛床の本坑のみにして、東西の鑛脈傾斜に沿へる斜坑の延長坑口より三千尺に達し約八百七十尺の箇所には大堅坑を設け坑外との連絡を計れり、採鑛は林洪錫時代は主として露頭部の亂掘にして坑内の採鑛も全く不規則なるものなりしが、谷口與四郎に至りて採鑛法を殘柱式に改め二番坑以下は一下り二下り三下り等の斜坑を堀鑿し、之より左右六十尺毎に錘押坑道を延ばし大體に於て六十尺平方の鑛柱を殘留する方法を採れり。

現權者に移りてよりは採掘可能の鑛量減少せるため採鑛を主とし、其の主要坑道は二東三東四東の三と鑛脈幅は平均三尺に及び、品位良好の部分は含金品位十萬分の二―三あり、現今の出鑛量は十五噸内外其の平均品位は含金十萬分の一に過ぎざれ共、採鑛の結果より推察して將來出鑛量及含金品位の増大明かなり。

開鑿はすべて手掘發破により坑道の大きさを六六又は五五加脊とす。

磐は比較的堅硬なる故坑道に支柱を要する事多からず採掘跡は僅かに捨石にて充填するのみ。

坑内運搬は「チゲ」に依り又は主要水平坑道に十二封度軌道を布設し、半噸入鑛車にて人力を以て大堅坑に運搬す堅坑は六尺、十三尺にして三區割に分ち其の一は排水送電に他は捲揚用に使用せり、捲揚機は一五馬力複胴式（ドラム $24\frac{1}{2} \times 21\frac{1}{2}$ ）ロープスビード一分間二七〇尺ロープ $\frac{3}{8}$ （ $\frac{3}{8}$ ）にして一回の捲揚數量約半噸とす。

坑内湧水多量にして排水作業は採鑛上最も重要な問題の一に屬す、而して平時に於ける坑内湧水量は普通一分間二十七立方尺なれ共、雨季に際しては降雨の地表浸水のため六十立方尺にも達することあり、平時に於ける排水は主として「プランチャヤ、ポンプ」一五馬力一臺同五馬力二臺「セントリフューガルポンプ」三馬力二臺同一馬力一臺を使用す、坑内水はすべて堅坑より排水し製鍊場及原動所用水に供せらる。

通風は普通自然通風に依るも雨季通氣不良の際又は掘下りの場合には「ルーツブローア」唐箕等を使用し坑内主要坑道には電燈を點すれ共坑夫は「カーバイト」を使用せり。

選鑛 選鑛は坑内外に於ける手選鑛のみにして、鑛石の品位良好なるときは坑内選鑛のみなれ共、然らざる場合は坑外にて更に水洗手選鑛を行ふ。

製鍊 製鍊場としては第一第二第三の三製鍊所あれ共、現時運轉しつゝあるは第三製鍊所のみなり左に各製鍊所設備の概要を擧げん。

第一製鍊場

一五馬力吸入瓦斯エンジン

四五〇封度搗鑛機八本立

第二製鍊所

ブレーキクラッシュヤー 4' x 2'

六五〇封度搗鑛機 一〇本立

九〇〇封度同 四本立

青化槽(コンクリート)製一二尺角(深五尺)

同 鐵製 (徑九尺)

セントリフューガルポンプ

貴液槽 4' x 2'

亞鉛箱

第三製鍊所

ブレーキクラッシュヤー 10' x 7'

一、〇五〇封度搗鑛機(アリスチャルマ製)一〇本立

一

一

一

一

一

一

五個(五、〇〇〇貫入)

二個(三、〇〇〇貫入)

一

一

一

一

一

一

九五〇封度	同	(クルツプ製)	一〇本立	一
ピアース捕汞器				四
陶法盤	(大塚製十番型)			二
コーリル分吸機		3' x 3'		一
カロウ同		5' x 3'		一
集砂機	(鐵製)	10' x 5' (一一、〇〇〇貫入)		三
溶解槽		12' x 5' (九、五〇〇貫入)		九
攪拌槽		10' x 3'		一
貴液槽	(鐵製)	4' x 6' x 2'		一
亞鉛箱				二
カンバステープル		8' x 15'		八
セントリフューガルポンプ				一

製鍊方法は搗鑛混汞法並に青化法により第三製鍊所にかける取扱鑛量は一日約六〇噸なり、坑内より搬出せられたる鑛石は先づ鑛舎に入り $\frac{1}{2}$ 鐵格子を経て「クラッシュヤー」に到る鑛舎の容量は五〇、〇〇〇貫にして、取扱鑛量の約三日分の原鑛に堪え鑛石の塊粉の割合は $\frac{1}{2}$ 以上の塊鑛約六割に相當

するを以て「クラッシュヤー」の粉砕量は一日約九、〇〇〇貫なり。搗鑛機の給鑛は「チャレンジ」式自動給鑛機四臺を使いし混汞は臼内及臼外銅板に於て行ふ。搗鑛機は「アリスチャルマ」製一、〇五〇封度一〇本「クルップ」製九五〇封度一〇本の二組にして、碇付基礎は地下十一尺の處より「コンクリート」基礎を造り之れに直接麻袋ゴム板（厚五分）等を敷きたるものと「コンクリート」基礎の上に更に角材基礎を組みたるものとの二あれ。其前者の成績良好なり、杵の揚程 $1\frac{1}{2}$ 乃至 $1\frac{1}{2}$ 網の高 $1\frac{1}{2}$ — $1\frac{1}{2}$ 搗數一分間九〇にして網は英國製打抜〇、〇三八時を使用し「スプラッシュプレート」に鐵板、銅板の二種を用ふ。混汞銅板としては臼内及臼外二あり、臼内は臼の前方のみに設置するものにして臼外銅板は $12\frac{1}{2} \times 11$ の無階段にして、傾斜一呎に付 $1\frac{1}{2}$ とす。臼内混汞に對する水銀の裝入量は鑛石の種類によりて加減するも大體に於て合金の三倍乃至四倍とし、水銀の消耗は鑛石一〇〇貫に對し一匁乃至二匁にして夏季に比し冬季の消耗多量なり、搗鑛機の床揚は一箇月二回と定め銅盤及「ピアス」捕汞器の汞化金の採集は一日二回混汞法による、實收率は金六三%なり。銅板捕汞器を流出せる鑛尾は「ローレル」分級器に入り泥鑛砂鑛に分類し、砂鑛は第一淘汰盤に送り溢流は「カローコーン」に入り更に砂鑛泥鑛に分ち砂鑛は第二淘汰盤にて汰鑛し採集す、汰鑛の量は少く取扱鑛量の一%に過ぎず。其大部分は第一淘汰盤に於て採集せらる。汰鑛は木製の溝を刻める流板にて溢流せる汞化金を捕集したる後麻袋入（一五貫入）として鎮南浦に賣鑛せり、其品位萬分の一なり。「カロー」分級器の溢水及淘汰盤の鑛尾は集砂

槽に流導し「バッターズ」自働配鑛器により均一装入をなす集砂槽の沈澱砂鑛は二四時間毎に「スコップ」にて掬上げ一旦乾燥したる後篩掛けをなし溶解槽の原鑛とす、集砂槽の溢水は之を「カンバスターブル」に流導す、溶解槽は容量九、五〇〇貫入九槽あり初め千分の二、二の青化液を以て略々一晝夜の滲透をなし、其の後五日間千分の一乃至〇、八の弱液溶解を行ひ最後に水洗滌をなす、中和劑としては約鑛量の千分の一の石灰を混和す青化鑛尾の品位は約百萬分の二乃至一、五にして鑛車により製錬所附近の低地に廢棄す、貴液槽は鐵製角形亞鉛箱は $22 \times 22 \times 21$ の二槽通過液槽は「コンクリート」製 22×12 の二槽にして適度の濃度として唧筒にて循環せしむ、而して青化加里の消耗は百貫に對し三十乃至四十貫にして青化實收率約八五%なり、集砂槽の溢流は「カンバスターブル」に導き微粒汰物の採取をなす「カンバスターブル」は 22×12 の八臺にして泥鑛取扱量鑛量の約二〇%即ち一日三千貫前後二時間毎に水洗をなし汰鑛を採集せり、一日の汰鑛採取量約四十貫其の品位萬分の一とす製錬用水は本坑々内水を揚水して使用す。

製錬場使用動力は約五八馬力にして其の主要なるものは搗鑛機四五馬力「ウキルフレーターブル」三馬力「クラッシャー」一〇馬力とす。

原 動 機

種 別 個 數 馬 力

栗 浦 金 山

吸入瓦斯機關
發電機

四 四

總計 二五五
同 二一五 K.V.A

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

外 坑					內 坑					種 別	人 員	賃 金			
雜	鍛	機	運	製	選	雜	選	機	運			支	坑	最 高	最 低
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	円	円	円	
冶	械	搬	煉	鑛	鑛	械	搬	柱				一・一〇	〇・八四	〇・六〇	〇・八〇
五	五	八	八	二	一	九	一五	一二	二八	二	五七	一・二〇	〇・三六	〇・二七	〇・七五
〇・八六	〇・六五	〇・七〇	〇・七五	〇・三二	〇・三二	一・二〇	〇・七五	〇・七二	〇・八四	〇・六〇	〇・六〇	〇・三〇	〇・五〇	〇・四五	〇・七二
〇・三〇	〇・五〇	〇・四五	〇・五五	〇・七〇	〇・三二	〇・四〇	〇・二七	〇・三八	〇・五〇	〇・八四	〇・六〇	〇・三〇	〇・五〇	〇・四五	〇・五五
〇・六六	〇・七二	〇・五五	〇・六五	〇・七二	〇・三二	〇・七五	〇・三四	〇・六六	〇・五九	〇・八四	〇・八〇	〇・六六	〇・五九	〇・六六	〇・六六

計

一五二

鑛 産 額

年 次	數		價 額	
	量	販 賣	價	高 額
大 正 十 二 年	汰	青	一四一、一八四	五三三、〇一〇
	鑛	金	三九、四六九	四一〇、二九九
同 十 三 年	汰	青	一一一、三一五	四五〇、二九九
	鑛	金	二七、〇七〇	四一一、七二八
同 十 四 年	汰	青	九三、一五〇	四一一、七二八
	鑛	金	二一、〇七六	四一一、七二八
同 十 五 年	汰	青	五七、八二四	二一五、八三七
	鑛	金	二一、八三五	二一五、八三七
昭 和 二 年	汰	青	二二、一〇四	八六、六五四
	鑛	金	一三、五二二	八六、六五四
同 三 年	汰	青	一一、二七〇	四七、九六二
	鑛	金	七、七八一	四七、九六二

栗 浦 金 山

五 三

遼安金鑛 (一切鑛物)

黃海道遼安郡水口面、泉谷面、道所里
梧桐面、大千面

鑛業權者　ゼセウル、マイニング、コンパニー

登錄第二號

面積　一四、五二四、六三八坪

沿革　當山の開發は遠く數百年前にありと云ふも舊記の徵すべきなく、後明治三十四年一月、一時邦人の手に入りしが間もなく、韓廷の回收する所となり、三十八年二月英人「アーサー、レウエレン、ピアース」の名を以て鑛業特許權を獲得し、其の後「コーレアン、シンデゲート、リミット」の手に歸す、同權者は二箇年直接作業せしも不振に終り、四十年十一月「コールブラン、ポストウイツ」組合に作業を委ね探鑛の結果沔洞鑛床の有望なるを認め、四十一年米國漢城鑛業會社作業權利を買收し、事業を擴張し、四十三年現楠亭鑛床の有望なるを認め、四十四年平壤梧野洞に電力設備を完成し、大正二年十月楠亭選鑛場の運轉を開始せり、かくて一日二〇〇噸以上鑛石を取扱ひ、年額一〇〇萬圓以上の鑛産額を見つゝありしが、大正十四年八月に至り既發見鑛床を殆んど採掘し盡くし、新たに探鑛の必要を生じたるの故を以て、同月限り探鑛及選鑛の作業を休止したるのみならず平壤よりの送電線をも取り除けり。然るに其後楠亭南坑特に No.1 Level 附近に於て續々新鑛體を發見したる

ため、大正十五年八月再び選鑛作業を開始し、又笏洞にても探鑛結果有望なる鑛體を發見し、朝鮮式永車十數臺にて混乘製鍊を行ふに至れり。尙ほ昭和二年六月には「コレアン、シンダケート、リミテッド」は形退し現權者のみの經營に移れり。

交通 當山事務所は遂安郡大千面楠亭里にあり、京義沿線より此の地に到達するには新幕、瑞興及中和驛より自動車の便あれとも寧ろ平壤よりの自動車を利用するを良しとす、山元への物資の運搬は主として平壤東支線船橋里驛を経て、陸路一六里牛車を利用す。

地質及鑛床 金山附近の地を構成する岩類は左の如し。

花崗片麻岩、下部古生層、中部古生層、角閃花崗岩、閃綠岩、玄武岩

此等岩類の分布を概覽するに中部古生層は此の地の大部を領し、之を貫きて噴起せし角閃花崗岩は其の中央に於て一の岩瘤をなして、彦真山の峯嶺を構造し、又其の周圍に點在す花崗片麻岩は南西に屹立する大清山を構成し、其の周圍に存する下部古生層に被覆せらる、而して閃綠岩及玄武岩は各小岩脈となりて現出するに過ぎず、

楠亭鑛床について見るに本鑛區内に於て噴起せる花崗岩は附近の古生層岩類を變質せしめしこと甚しく、其の結果銅着鉛及金の接觸鑛床を形成せるものにして、鑛床は古生層變質石灰岩粘板岩及雲母片岩の異層中主として石灰岩中に胚胎す、岩層の構造複雑なるも大約北一五度西より北四〇度西の走向

北東五〇度の傾斜を有せり、石灰岩は白色又は暗灰色にして、接觸變質作用により砒化石灰岩又は大理石となる、花崗岩はその接觸部にて石英斑岩の岩枝を出すことあり、又閃綠岩の岩脈を出し南坑と北坑とを分ち平均四五〇尺の幅員を示せり、尙花崗岩の近く幅數寸より數尺に達する玄武岩脈を見、その噴起同區域内の最近期に屬する火成岩の如く花崗岩、古生層及鑛床を切斷す、接觸鑛物は砒灰鐵鑛、柘榴石、石綿角閃石、電氣石等接觸帶及其附近變質石灰岩中に胚胎す。

南坑鑛床は接觸帶又は石灰岩中にあり、上部は黃銅鑛及斑銅鑛等銅鑛に富むも含金少く下部は銅鑛少く含金に富めり、鑛物は斑銅鑛、黃銅鑛、閃亞鉛鑛、磁鐵鑛、磁硫鐵鑛等の外、時に方解石の美晶を産し三纏に達する結晶を見ることあり。

北坑は南坑との間約四五〇尺の閃綠岩岩脈を隔てて北方に位し、全く石灰岩中に胚胎するものにしてその鑛物南坑に同じ、北坑の西坑銅岩坑は「ホルンヘルス」片岩と石灰岩の接觸帶にあり、北々東約四五度傾斜し鑛石は甚だ微細にして浮游選鑛法によりて回收せらるも、銅鑛と金は關係少く頗る微細なる砒鑛と密接なる關係を有するが故に、同法によるもその金の回收は大を望み難しと云ふ。

次に笏洞の地質を見るに斑狀角閃花崗岩と中部古生層との接觸部は笏洞の南方分水嶺にあり、嶺の南は花崗岩北は古生層より成る兩岩類の境界は複雑にして突入屈曲甚だしく、又花崗岩及古生層は各母體より隔離して各一方の岩體中に二三の小露頭を存す、古生層の構造は花崗岩との接觸部に於ては

頗る亂雜なるも大體に於ては走向西北西、傾斜北北東二〇度乃至六〇度を普通とし、石達洞以東禹江の縱谷にては一〇度乃至二〇度の傾斜を示す、而して笏洞溪谷の西に於て溪谷と略々併走する南北線を境として、其の西は主に粘板岩及雲母片岩又其の東は石灰岩より成り該境界線附近は地層の構造頗る複雑を極め茲に一の斷層を存す、斷層以東の石灰岩は厚層にして笏洞及其の東方に延び花崗岩に接觸す、該石灰岩の上位即北方には粘板岩及雲母片岩の交層あり、禹江の縱谷を縱斷す、此の交層は斷層以西のものと岩種を同じくし、同層準にあるもの、如し、而して此交層中には屢閃綠岩の岩脈を挾有し、又笏洞分水嶺の南側に玄武岩の露出あり。

鑛床は笏洞の南方分水嶺の北側に於て花崗岩と接觸する變質石灰岩中に胚胎す、此處の石灰岩は白色又は暗灰色を呈し、硅化石灰岩となり主に透輝石並柱灰鐵鑛及少量の磁鐵鑛、綠簾石、柘榴石、雲母等を含むし、又其の他に石綿、蛇紋石、螢石（淡綠色半透明八面體徑七八分以内）方解石及水晶等を存在する處あり、此等の鑛物に伴うて黃銅鑛及斑銅鑛を産し鑛床を形成す、其の分布並形狀ともに最も不規則にして、且鑛體より母岩に漸移し、兩者の境界明かならず、鑛床の露頭は略東西に繼續し其の延長約一、〇〇〇尺あり。

鑛石は石灰岩中に主として透輝石及硅灰鐵鑛に伴うて黃銅鑛及斑銅鑛を含むものよりなり、金銀銅の外に少量の蒼鉛を含むす、鑛石中硫化金屬鑛の配置は最も不規則にて其の内の一種のみ斑狀に

散在することあり、又は兩種相集りて斑紋狀又は縞狀を呈することあり、一般に硫化金屬鑛の量多き程合金多量なるを普通とす其の最良鑛と稱するものは主に黃鐵鑛及斑銅鑛の密に集合して斑紋狀又は縞狀を呈するものなり。

採鑛 現今の採鑛法は單に昔時取り残しの鑛體を遂うて手掘法にて採掘するのみにて至つて簡單なれども、昔時盛んに採行せる際には相當組織的採鑛法を採れり、今參考のため之を述べんに精亭に於ける通洞坑は鑛山事務所北方約二丁の地にあり、南より鑛床に向ひ複線坑道幅十呎高七呎七吋にて一、六〇〇尺にて南坑鑛床に會し、更に八〇〇尺にて北坑鑛床に會す、南北坑は共に上下二〇〇尺毎に水平坑を開き一〇〇尺乃至二〇〇尺毎に坑井によりて連絡す、南坑は通洞以上四坑道通洞以下四坑道北坑は通洞以北三坑道通洞以下五坑道を開き銅岩坑にては全部にて七坑道あり、その上より五番坑は北坑の上二番坑の鑛入坑に連絡す、普通坑道加脊幅六呎高七呎七吋坑井は六呎×八呎とす、採掘には主として鑿岩機を用ひ又鶴嘴を使用す、鑿岩機は「チャックハンマー」B. C. R. 二四〇型「インガージールストーパー」B. C. 二一型の二種にして一臺二人時に一人の鑛夫を以てせり、鑿岩機用「ドリルスチール」は八分の七吋徑のものにして爆藥は米國製「ノーベルゼリグナイト」を以てし毎日午前三時より四時迄「三の方」正午より午後三時迄「一の方」午後七時より九時迄「二の方」の三回發破を行ふ、此の使用壓氣機は「インガージール」型にして三臺あり、各空氣量毎分一、二〇〇立方呎壓力一〇〇

封度とし、各二一〇馬力の電動機を以て運轉す、採鑛方法は「シュリンケージ」及び「スクエヤセツト」の二法を折衷せる「フイーリンググメンツド」に依る之れ鑛幅不足にして幅員亦大なるを以て普通の上下階段法を採用せられざるかたみにしてその法「シュリンケージ」法の如く掘り上り約一〇尺に至れば「スクエヤセツト」法により梓組をなし、その梓間一二を除き他の部に坑内選別廢石を、又は地表より土砂を運搬し充填し、之を足場として又採掘に移る採掘鑛石は充填せざる梓間を坑井として運搬す、この梓間「セツト」の大き幅五呎長六呎高七呎とし八乃至一二呎の丸太材「時に角材」を使用す、尙ほ上部には「シュリンケージ」法によりし箇所ありてその鑛石運搬用坑井は丸太梓を積みたるあり、坑道は凡て三つ留とし八吋乃至一二吋の丸太を以てせり、矢木は普通末口三吋長さ八乃至一〇呎のものをしてせり、支柱材は殆んど松材にして矢木には雜木（主に檜）を用ふ。採掘跡の支柱は「スクエヤセツト」の充填によるも坑道附近時に空木積又は實木積を採用せり、坑木は凡て坑外にて切組し、坑内に於ては單に組立つるのみ、其の壽命は一箇年乃至二箇年なりと云ふ。運搬法は切羽採掘物は選別をなしつゝ「ショベル」を以て鑛車又は坑井に投げ込み鑛車は一噸積二噸積の二種とし、主要坑道には二噸積を以てし中段坑の如きには一噸積鑛車を以てす、通洞以上は凡て坑井により以下は斜坑小捲揚「エーヤホイスト」を以て容量五〇〇封度以内の「キツブル」にて捲揚ぐ南坑には「ゲージ」三呎二吋三〇封度軌條五〇〇封度「スキップ」一箇所の設備あり、銅岩坑の鑛石は全部坑井により五番坑に集め之

れより踏入坑にて北坑上二番坑北二七號坑井より通洞坑に落し坑井に搬出す、坑内中段坑には九封度軌條を普通坑道には一二封度を通洞及坑外選鑛場間は二五封度軌條を以てし「ゲージ」二眼とせり、通洞坑内主要幹線を除き全部手押とし通洞坑内約一、〇〇〇呎及坑外選鑛場間三、〇〇〇呎間は驟を以て曳かしむ。

坑内の湧水少く通洞上部降雨の際稍々水量多きも全部通洞坑にて之を絞り、通洞以下に影響することなしと云ふ、通洞坑以下には「ウオシントンポンプ」「カメロンポンプ」の小型のものを用ゐる何れも壓搾空氣を以て動力とせり。

點燈は一般鑛夫は蠟燭を用ゐる定備夫は會社より、請負所屬のものは請負者より何れも毎日二本宛を無料にて支給せらる。蠟燭は坑道等通行の際風のたの吹き消さると、恐るがため、罐詰空罐の一方の蓋を取り去り一方に小孔を穿ち提灯代用とせり、係員は「カーバイトランプ」を使用す。通氣は自然通風にして要所に風戸を設くるのみ、而もその通風甚だ良好にして下底坑道共に通氣よし。

旁洞に於ては大通洞は鑛床の中央部に通ず、大通洞の水準は露頭より垂直約二六〇尺下方にあり、坑口より約四〇〇尺を隔つる坑内に斜坑を堀下し以て坑内に於ける全體の主要運搬路となせり、大通洞以下斜坑の深さ四五五尺あり、斜坑は三區に區分せられ各區は六尺に四尺の角にて向て右の二區を捲揚用とし左の一區に梯子を設け人道とす、斜坑の傾斜は南に向て六〇度あり斜坑中垂直每一〇〇尺

に坑道を設け上より順次に第一、第二、第三及第四の坑道と稱す、又大通洞より上方約一二〇尺に上部坑道あり、同じく其西方には猶上方に約一二〇尺を昇りし處に第四坑道あり、此等の各坑道よりは更に坑井を垂下し以て探掘を進行す、然れども鑛床の形狀は不定なるに依り坑道の形狀も不規則なり。

採鑛法は鑛床の性質上一定の規則を設くる能はず、而して掘鑿は主に手働鑿孔に依れども又鑿岩機を併用す、鑿孔掘進の速度は坑内岩石の硬軟に關するも平均すれば手働鑿孔にて一日一人に付き四尺鑿岩機なれば一日四〇尺なり、爆發藥は總て「ゼリグナイト」を用ふ労働時間は十二時にて晝夜交代せしむ、支柱は岩石堅硬ならざるも概ね耐壓力に富むに依り之を設けざる部分多し、其の木材は主に樫を用ゐるも稀には松を使用することあり、坑内の排水には日本製（口徑二吋半）及第七番「カメロン」（口徑三吋）の二吋筒を用う然れども坑内水少く常時水曳を以てす通氣はすべて自然通氣なり、燈火は蠟燭を使用す、運搬は坑内にありては十二封度の軌條を布設し、鑛車は獨逸製二噸積「ホツバー、カー」六臺及亞米利加製一、六〇〇封度積「ヘンデース、カー」十四臺を使用す、鑛石は各採鑛場より鑛車にて第一坑道以下の諸坑は斜坑に、其の他の坑道にては坑井に運び大通洞を経て坑外に搬出せらる、而して斜坑の捲揚機は鼓胴の徑四呎長さ八呎あり、鋼索は徑一時のものを使用す、又坑外の運搬は石達洞の製鍊場迄約一哩の間に同様の軌條を敷設し、同様の鑛車にて運搬す、此間の軌條は高低の

關係上之を上中下の三段に切られ上中間及中下間は各坑井を設けて鑛石を落す、坑内に使用せる諸機
の原動力は「インガール、ランド」空氣壓搾機を用ふ其の馬力一五〇なり、而して之に要する燃料
は新材を用る晝夜十二把乃至十五把を消費す。

以上は楠亭及笏洞採掘所に於て盛んに稼行せる當時の採掘状況なるが、最近に於ては兩所とも小規
模の鑛體を追うて手掘發破法、又は鶴嘴にて採掘するに過ぎず、即ち楠亭に於ては北坑の第二隧道附
近南坑の大通洞、第一坑道、第一、第六坑道附近笏洞に於ては大坑道西部北先の附近に於て謂はば盛
況時代の取り残しの鑛體を採掘し居るに過ぎずして、昭和三年度に於ける採鑛高は

楠 亭 二九、四一二噸 一日當り 八一・八噸

笏 洞 三、三二八噸 同 一一・二噸

計 三二、七四〇噸

但し笏洞は八月上旬減區せるを以て七月迄の採鑛高を示す。

選 鑛 附圖は楠亭選鑛作業の系統圖なるが事業縮少前の磨鑛設備に比して「ボールミル」一基及
「ベツブルミル」一臺を缺き原動機として「ダイゼルエンジン」五〇馬力一〇〇馬力名一臺宛を新たに
設置せる外他は舊設備そのまゝなり、選鑛場は通洞坑口を離る西南三、〇〇〇呎の地に位し大約四區
に區分せらる即ち一、碎鑛設備 二、磨鑛設備三、浮游選鑛設備 四、再磨鑛設備之なり。

一、碎鑛設備 通洞坑内よりの二噸鑛車は鑛舎前に於て秤量後「テツプラー」によりて廻轉せられ鑛石は五噸容量の鑛舎に装入す、此の鑛舎は嚙鑛襪に装入するための一時溜りとなすにすぎずして直ちに第一「クラッシュヤー」にて四吋以下に碎かれ、傾斜五五度の斜格子により一時二分の一以下のものと以上のものに分離せらる、此の格子上的ものは幅三六吋毎秒一呎の速力を有する水平運鑛帶により二臺の第二「クラッシュヤー」に送らる、此の運鑛帶にて運はるゝ間に男工の手によりて捨石を選別せらる、第二「クラッシュヤー」により一時二分の一以下に粹かれたる鑛石は前の斜格子以下の幅一五吋運鑛帶により運ばれたる鑛石と共に、長九八呎幅二四吋毎秒四呎の速力を有する水平運鑛帶により運ばれ「トリツパー」にて容量一、五〇〇噸の鑛舎に入る。

二、磨鑛設備 一、五〇〇噸鑛舎の下部に設けられたる二個の「ベルトファイダー」により鑛石に二箇の「ハーデンゲボールミル」に入る此の「ミル」には別に苛性曹達硫化曹達とを鑛石噸當り約二封度半（混合液としたるもの）及「ユーカープタス」油噸當り四分の一封度の割合にて装入す、又此の「ミル」は毎分廻轉數三〇にしてその排出口に四分の一吋目を有する廻轉篩を有す、「ボール」は「クローム」鋼製徑五吋にして一臺に一、一〇〇封度を入れ「ボール」の徑一吋半に磨滅せるとき之を取換ふ、篩下の鑛石は樋により「クラシファイヤー」に入り泥鑛は直に「スピッツカステン」に行き砂鑛は篩上のもとの共に再び「ハーデンゲベツブルミル」に行き碎かれ、第二の「クラシファイヤー」

にて再び分離せられ此の砂鑛は又この「ミル」により繰返へし碎かれ泥鑛は第一の「クラシファイヤー」のものと共に「スピッツカステン」に入る。

三、浮游選鑛設備 「スピッツカステン」よりの泥鑛は第一浮鑛機に入る、此の浮鑛機には「ルートツ」型送風機により二封度壓力の空氣を吹き込む、その第一區より第三區迄の浮鑛は亞硫酸曹達を加へ第三浮鑛機に入り第四乃至第八區のものは二吋渦卷唧筒を以て再び第一浮鑛機に入れ繰返す、尙その鑛尾は四吋渦卷唧筒により第二浮鑛機に入り、第二浮鑛機の第一乃至第三區の浮鑛は第一浮鑛機の第一乃至第三區のものと共に四吋渦卷唧筒により第三浮鑛機に入り、第四乃至第八區のものは第一浮鑛機の鑛尾と共に渦卷唧筒により第二浮鑛機に入り繰返され鑛尾は三箇の「フロストラップ」を漸次に流し浮鑛は三吋渦卷唧筒により前述の「スピッツカステン」よりの砂鑛が再び「ボールグラメラーター」にて碎かれたるものと共に「スピッツカステン」に繰返へさる、尙此の「フロストラップ」の鑛尾は遂安「フロストラップ」に入り浮鑛は前の唧筒により「スピッツカステン」に繰返へし鑛尾は川に放流せらる、第三浮鑛機に入りしものは第一區に浮きたる鑛石は精鑛となり濃泥槽に入り一噸鑛車にて乾燥場に送らる又二區よりの八區迄のものは四吋唧筒により第三浮鑛機にて繰返へし鑛尾は第二浮鑛機にて再び繰返へさる。

乾燥場 「コンクリート」床の幅五〇呎長一〇〇呎の温突式とし、一噸約二圓八十五錢にて請負はし

む請負者は乾燥用薪及袋詰袋縫ひ秤量場迄の運搬等を負擔し、袋又は罐は事務所負擔にして薪は「二」コ「下」(一二八立方呎)にて鑛石約四五噸を乾燥し得るも冬季は夏季よりもその量多く汰鑛乾燥前の水分は約一・八%乾燥後は殆んど水分なし。

尙選鑛工場全部に對し要所に蒸氣管の暖房装置を施し冬季五箇月間平壤炭を以て蒸氣を通す

選鑛用水は工場西約三丁の地に唧筒室を設け、溪水を六〇馬力渦卷唧筒二臺を以て又冬季は別に三〇馬力渦卷唧筒を以て一八〇呎の高さを有する選鑛工場背後の山頂に於ける貯水池に揚水す。

昭和三年度に於ける選鑛成績を見るに。

選鑛元鑛高	二九、九六四噸
產出汰鑛量	一、三二六・七九噸 (元鑛に對し四・四%)
含有品位	銅 二一・七二%
	銀 〇、〇二二一%
	金 〇、〇一四八%

汰鑛はすべて鎮南浦久原製鍊所に賣鑛す。

賣鑛量 一、二五五噸四四 價格 三五七、八九五・六〇なり

製鍊 大正十四年八月選鑛作業を中止せる當時に於ける選鑛作業の鑛尾の堆積量は約六〇萬噸に

の含金量は約一五〇萬弗にして、一噸當り二・五弗即ち一弗二圓とするときは約百萬分の四なり、此が處理法に就いては從來種々の研究ありしも、結局青化製錬法に依ることとなり、大正十五年四月作業を開始せり。

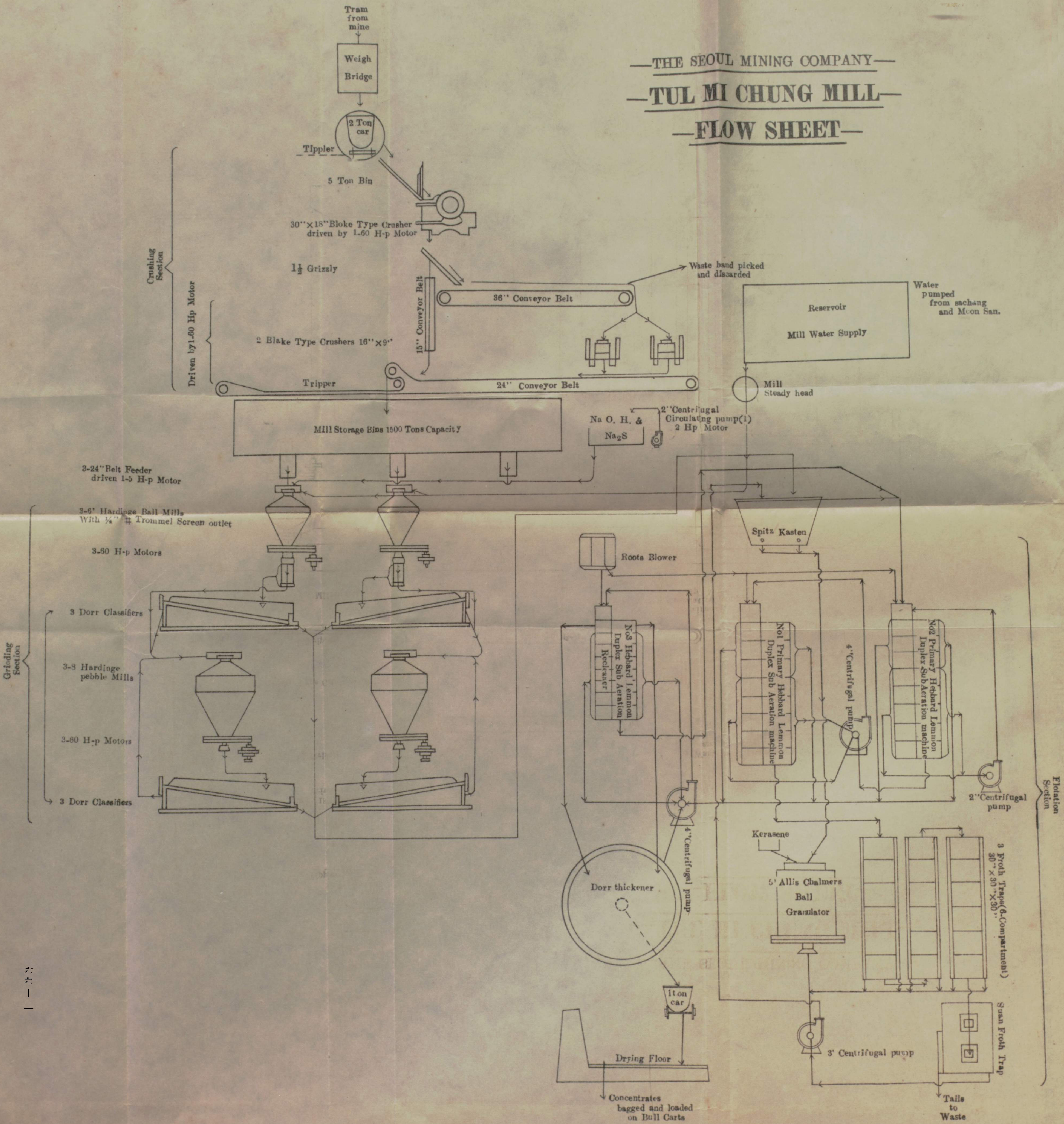
青化工場は鑛尾堆積場より約一町を距つる所にあり、一日取扱量鑛尾約二〇〇噸なり、原動機は五〇馬力「ライゼル、エンヂン」を使用、鑛尾の運搬は原則として木管を通る自然流水によれども、水量不足の際は軌道運搬車に依る、かくして鑛尾は先以て圓錐分級器に入り泥水は棄却せられ粗砂は「エレベーター」にて木製集砂槽に送らる、集砂槽は七本あり各直径三〇尺深さ一八尺なり、集砂槽よりの溢流は棄却せられ集砂槽は約一二時間にて粗砂を以て充滿せらる。

溶解作業は此の集砂槽にて滲出法による中和用石灰使用率は鑛尾に對し〇・一%、青化薬は青化加里の代はりに「エーロー、ブランド、サイヤナイド」を使用す、之は石灰を「ベース」とし其効力は青化「ソヂウム」の四八——五〇%に過ぎず、其の使用率は鑛尾に對し〇・一%なり溶解作業は約二晝夜を要す。

沈澱作業には亞鉛を用ゐずして木炭末を使用す木炭末の最良なるものは、年若き柔き松にて作りしものにして其の使用量は一晝夜約三〇〇封度鑛尾に對し千分の一以下なり。

含金木炭末は脱水乾燥の上鐵板上にて徐々に焼かれ含金灰は鎮南浦製錬所に賣却す。

—THE SEOUL MINING COMPANY—
 —TUL MI CHUNG MILL—
 —FLOW SHEET—



六六一

笏洞には純朝鮮式水車一六臺あり、昭和三年度に於て三、三二八噸の原鑛を搗鑛して地金銀(中六七分) (銀千分中三三〇) 二二、〇二三匁價格七九、〇三四圓三一を産出したり。

運搬 楠亭産の汰鑛は牛車に依り船橋里驛に至り、其れより鐵道便にて鎮南浦に送る、笏洞産の金銀鑛は遂安郡水口面禹江を輕出し船便にて鎮南浦に送る。

原 動 機

ダイゼルエンジン 池貝鐵工所製五〇馬力 一臺

發電機 同

ダイゼルエンジン 瑞典ストックホルム製一〇〇馬力 同

發電機 同

ダイゼルエンジン 瑞典ストックホルム製五〇馬力 同

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種 別	人 員	賃 金			
		最 高	最 低	平 均	
坑 夫	八七	一・三〇	〇・七五	〇・七七	
支 社 夫	一一	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	
運 搬 夫	一六	〇・八〇	〇・六〇	〇・六五	

運安金鑛

六七

鑛產額

年次	數			價高		
	地金	汰金	地銀	量	賣	額
大正十二年	地金	汰金	地銀	五、六七三	每	一、六二三、五一
同 十三年	地金	汰金	地銀	一、六六四、二三四	每	一、七三四、七六七
同 十四年	地金	汰金	地銀	六、〇九八	每	九一、三一五

計	坑			內		外
	雜	工	機	灘	工	
計	夫	夫	夫	夫	夫	夫
二二八	二二	六	四	二	一	二
	〇・七〇	二・四二	二・一五	〇・七〇	〇・七五	〇・六
	〇・六〇	〇・七〇	〇・九五	〇・六〇	〇・七五	〇・七五
	〇・六五	一・四三	一・四五	〇・六五	〇・九五	〇・九五

達安金銀

六八

三 德 鑛 山 (金銀銅鉛)

平安南道成川郡三德面新德里 鑛業權者 久保兵二郎

登録第三一四七號 外二

面積 一、二八一、二八六坪

沿 革 本鑛山は大正六年二月現鑛主の先代久保順吉許可を受け、最初は全部之を徳大掘を以て探鑛せしが同年十二月より直營に改め、爾來極力探鑛及採鑛に努め漸次事業を擴張するに至れり、大正十四年二月より現鑛業權者の名義に變更せり。

昭	昭	昭
和	和	和
三	二	十
年	年	年
汰	汰	汰
地	地	地
金	金	金
銀	銅	銅
鑛	鑛	鑛
三〇一、三〇五	四四、七〇六 三一、九七一	二〇、三五五 六四、九三二 四〇、一六八
五	六、〇一六	二五五、七六五
	三九四、六〇八	
	四一九、六〇四	

交 通 平壤の北東約十九里、成川邑の北方三里十町に位し、大同江の支流岐倉江の右岸にあり、平壤成川間は道路平坦にして毎日自動車の便あり、成川當山間も亦道路比較的平坦なり、而して一方岐倉江には舟楫の便あり、下航三日上航八日乃至十日にして鎮南浦に往復す。

地質及鑛床 本鑛山附近一帯の地は前寒武期重火成岩に屬する雲母片岩、碎質雲母片岩及粘板岩等より成り、地層中には所々に扁豆狀の珪岩を挿入す、大體に於て其走向は北三十度乃至四十五度西傾斜は北二十度なりとす、鑛床は之等の地層を貫きて含金銀石英脈の噴出せるありて其狀一樣ならず、時に地層に平行し時に之を貫くものありて其厚さ一―二寸乃至二十尺に及ぶ、其質甚だ堅緻にして屢々輝銀鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛、黃鐵鑛、黃銅鑛等を伴隨し、又自然銀の見ゆるもの尠からず、含金平均品位は千分の五を示せり。

採鑛選鑛及運搬 當山の鑛脈は比較的緩なるを以て、恰も炭鑛に於けるが如く走向及傾斜に沿ひて水平坑道又は斜坑を掘鑿し所謂殘柱法を行へり、而して各坑道の切羽が鑛脈の端若しくは全く貧弱なる部分に遭遇するや殘柱拂を行ふ事とし又鑛脈の厚さ六尺以上に達するときは一種の「シユリンケージ」法を以て採掘せり、鑛石は一旦事務所前に運搬し小割手選を施して八種に分ち吟詰となし、舟便を以て鎮南浦に送鑛せり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

昭	昭	昭	和	和	和
同	同	同	三	二	五
年	年	年	年	年	年
同	同	同	三二五、〇七五	一一〇、七一八	一六六、六〇二
			二二八、九七一	七三、一九七	一一八、七六一

雲龍金鑛（金）

平安南道安州郡雲谷面

鑛業權者 加藤義一

發錄第六三七一號

面積 五一八、五一八坪

沿革 本山は大正十年九月許可を得、同十三年九月探鑛に着手し相當有望なる鑛床を發見し製鍊所を新設して十五年五月より操業を行ひ昭和二年七月製鍊設備を増設して今日に及べり。

交通 京義線肅川驛の東四里順川の西四里安州の東南七里にありて何れも車馬の交通便なり。

地質及鑛床 附近の地質は濰片麻岩より成り、鑛床はその中に胚胎せる石炭脈にして脈數數條あり、白龍鍾及黃龍鍾はその主要鑛脈にして白龍鍾は走向北三十度西傾斜六十五度東脈幅平均三尺あり、黃龍鍾は鑛區の南端にありてその性質白龍鍾に相似たり、走向傾斜共に同様なるもその間四千尺の東南に存す。

採 鑛 手掘發破により階段掘法を行ひ請負制を採用す、採掘鑛石は軌道によりて坑外に搬出せられ手選の上製鍊所に送らる。

製 鍊 鐵製二百五十封度三本立搗鑛機一臺、同四百五十封度五本立搗鑛機二臺を以て混汞製鍊をなし、鑛尾は淘汰盤二臺及ネコ流三臺を以て汰鑛を採取す、動力は三十五馬力の蒸汽機關を以てして三千貫の原鑛を處理す。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種 別	人 員	賃 金		
		最 高	最 低	平 均
坑 夫	一八	〇・九〇 ^円	〇・六五 ^円	〇・七三 ^円
文 柱 夫	一	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇
運 搬 夫	八	〇・六〇	〇・五〇	〇・五五
製 鍊 夫	四	〇・七〇	〇・六〇	〇・六五
雜 計	三六	〇・六〇	〇・五〇	〇・五五
計	三七			

鑛 産 額

雲 龍 金 鑛

年次	販賣		高價額
	數量	價額	
昭大 正和 十元五年	青金 三、二五一匁	一三、〇二四匁	
昭 和 二 年	青金 四、七五五匁 汰金 二四、〇〇〇匁	二二、九五八匁	
昭 和 三 年	青金 八、二〇七匁 汰金 一六、二〇〇匁	三七、二〇三匁	

三成 鑛山 (金、銀)

平安北道龜城郡館西面造岳洞

鑛業權者 三井鑛山株式會社

登錄第六八三二號

面積 九九九、五八〇坪

沿革 大正十二年崔昌學外二名出願し、同年十一月許可を得たるものにして探鑛の結果良鑛を發

見して盛況を呈せり、大正十五年一月、三十噸處理の選鑛製鍊場を建設し七月落成せり、青化製鍊は

昭和二年七月より開始したるも、昭和四年八月現權者の有となる。

交通 鑛山事務所は館西面造岳洞に在り、此處は京義線宣川驛の東北十里にありて宣川より毎日

一回の定期自動車あり、二時間半にして達せらる坂嶺を横ぎる事二回あれとも牛車を通せらる。

地質及鑛床 本山附近の地質は準片麻岩にして、其層理に略並行して巨晶花崗岩脈の迸發あり、此岩脈より誘導せられたる鑛脈は即ち當鑛床なり、鑛床は裂罅充填の石英鑛脈にして脈石として方解石を伴隨す其重なる鑛脈は次の如し。

鑛脈名	走	向	傾	斜	脈	幅
上 臺 脈	北 十 度	西	東	四 十 五 度	八 寸 ヨ リ 一 尺 五 寸	
卓 脈	北 四 十 度	西	北 東	三 十 度	五 寸 ヨ リ 二 尺	
春 鳴 谷 脈	北 三 十 度	西	東	四 十 度	五 寸 ヨ リ 三 尺	
九 龍 谷 脈	北 二 十 度	西	東	三 十 八 度	一 尺 五 寸 ヨ リ 二 尺	
黃 哥 谷 脈	北 四 十 五 度	西	北 東	三 十 度	三 寸 ヨ リ 一 尺	
片 水 谷 脈	南	北	東	五 十 度	一 尺 ヨ リ 二 尺	

採 鑛 採鑛は徳大法によれり本鑛山の徳大法は期限六箇月、區域の延長は普通十四尺を以てせり又主要鑛脈たる卓脈、黃哥谷脈の如き多數の徳大の合同により組合を組織して之を採掘せしめる場合あり、但し組合員には監督者をも加入せしむる半直營にして採鑛、支柱、排水等は事務所費を以て負擔し、採掘、運搬、充填等に對する組合の責任を高むると同時に監督を徹底せしめることにせり。

黃哥谷捲揚機

電動機交流七・五馬力

スキップ八十貫入 掘下七十五尺 斜坑幅八尺 高五尺五寸

卓脈捲揚機 電動機五馬力

スキップ八十貫入 掘下三百尺 斜坑幅八尺 高五尺五寸

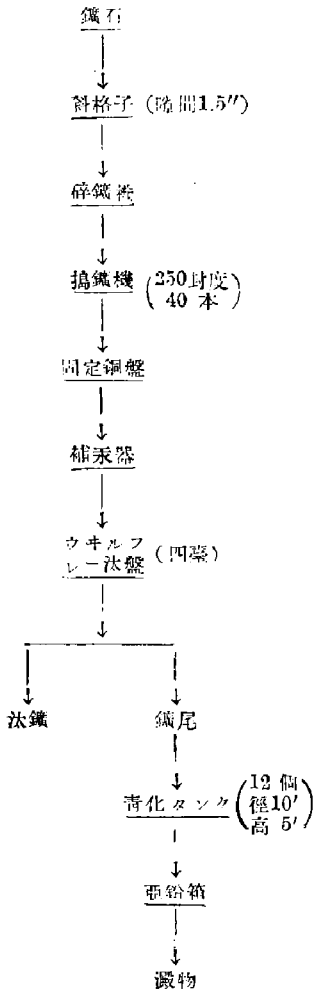
坑内排水唧筒(卓脈) 十馬力

三聯式ブランジージャボンブ 湧水量僅小ニシヌ一日數時間ノ運轉

尙最近下部大切坑の開鑿に着手し延長二千尺にて着脈するの計畫にして、五十馬力インガール壓氣機を設けチャックハンマー一臺ドリフター一臺を以て開鑿中なり。

選鑛及製鍊 選鑛は坑内に於て先づ捨石の大塊を選別し之を採掘跡充填に供し、粗鑛は坑口に搬出し坑口に於て更に精鑛と捨石とに選別し精鑛は製鍊所に搬送す。

製鍊系統



製鍊法は頗る簡單にして現在碎鑛機は使用せず、鑛石は直接人力により搗鑛機に投入し汞合金及法鑛を採集し、鑛尾よりは青化により採金せり。

原動機 原動機としては製鍊所に百馬力の瓦斯機關を設置し、調帶によりて製鍊諸機械を運轉せり同時に製鍊所内に四十キロの發電機を据付け瓦斯機關より調帶及滑車により運轉せり、此發電機は坑内捲揚、排水唧筒、點燈用に供せり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑	四三〇	一・一〇	〇・八〇	一・〇〇
坑	六〇	一・三〇	一・一〇	一・二〇
選	二九四	〇・九〇	〇・七〇	〇・八〇
樹	六	二・五〇	一・七〇	二・〇〇
管	二五	〇・八〇	〇・七〇	〇・七五
採	二〇	一・〇〇	〇・八〇	〇・九〇
鑛	一〇〇	一・〇〇	〇・八〇	〇・九〇
製鍊	三〇	二・〇〇	一・三〇	一・六〇

鑛 產 額

年 次	販 賣	
	數 量	價 高 額
大正二年	青 一、五〇〇	四、五〇〇 <small>円</small>
同 年	同 二〇〇、〇〇〇	八六〇、〇〇〇
同 年	同 三六五、〇〇〇	一、六四二、五〇〇
同 年	同 九〇〇、〇〇〇	三、三三〇、〇〇〇
昭和元年	同 三八八、〇〇〇	一、四七四、四〇〇
昭和二年	同 二三四、六〇七	八九一、五〇七

計	外				
	運 搬	機 械	工 作	試 験	普 通
一、二五八	四九	一六	一三	五	一一〇
	〇・八〇	二・五〇	二・五〇	二・五〇	〇・八〇
	〇・七〇	二・〇〇	一・〇〇	一・五〇	〇・七〇
	〇・七五	二・二五	一・八〇	一・六〇	〇・七五

三 成 鑛 山

七 八

雲山金鑛（一切鑛物）

平安北道雲山郡北鎮面 鑛業權者 オリエンタル、コンソリデーテッド、マイニング、コムパニー

登録第一號

面積 雲山郡一圓（即二十七億九千九百三十六萬坪）

沿革 本金鑛開發の年代は詳ならずと雖も口碑の傳ふるところによれば、已に高麗王朝時代にありし如く、李朝に至り官營として操業せられたりと言ふ、明治十九年頃より外人の此地方を踏査するものあり、明治二十八年七月米人「ゼームス、アール、モーリス」韓國政府と協約の結果、採掘の特約を得るが是れ實に朝鮮に於ける特許鑛山の先鞭なり。

明治二十九年四月「モーリス」は韓國政府と協同し、鑛業會社を組織して二十五箇年の採掘許可を得たり。會社の資本株を百とし内四分の一を韓廷の有とし會社の財産、生産品、外國輸入材料に對して總ての課税の免除すること、地方民との交渉、道路の開鑿等に就ては可及的便宜を與ふべきことを約せり。

明治三十一年現在の東洋合同鑛業會社之れを讓受け、翌三十二年三月前協約を更訂し、韓國政府所有の二十五株を全部會社に下當すると同時に會社に日本貨二十萬圓を貸付し、貸付年二萬五

千圓を上納することを約し以て廣大なる地域に於ける鑛業の特許を得たり、最初米人の事業を開始するや第一に著手せしは極城洞及橋洞にして傍ら砂金の採取に従事せしか、何れも不成功に終り一時事業の繼續は極めて疑はしき状態に陥りしも偶々泥踏里に良脈を發見して再興の秋を得たり。

泥踏里は三十七年頃廢坑となり鷹峯坑は三十三年より大正七年七月迄作業して廢坑となり、極城洞は三十三年製鍊の設備をなし大正四年廢坑となれり、現在に於ては雲山郡北鎮面に於ける大岩坑、橋洞坑、鎮後坑及東谷坑を稼行せり。

大岩坑は三十一年泥踏里の支山として事業を開始せし處にして、翌年製鍊設備を完成し現在に及べり、橋洞坑は大岩坑と相前後して製鍊設備を爲し、三十六年事業を擴張して大岩坑と共に本金鑛に於ける主要坑と爲れり、鎮後坑は三十九年頃又東谷坑は大正三年の開坑に係り、兩坑の産出鑛石は現在橋洞坑掲鑛製鍊所に送鑛して處理せり。

森林伐採の權は最初の協約に附與せられざりしが、明治四十一年八月農商工部との間に協約成り楚山岩瀆兩郡に涉る森林伐採の許可を得、代償として毎年二萬五千圓納付せしむる條件とせり。

動力は主として薪炭を燃料とする火力によりしが三十九年七月館登里に水力發電所を設け、更に大正二年十一月新安州に大倉組發電所新設後其の大半を同所の供給に仰ぎしが、大正七年七月總督府より二十五箇年間九龍江の水利權を特許せられ、之れにより棲鳳洞「スリポン」に發電所を起工し大

正八年十一月竣成せり、同時に大倉組よりの供給を解約し、九年七月には設備を擴張して千「キロワット」の全能率を出し運轉するに至れり。

本會社の資本金は五百萬弗拂込額は四百二十九萬三千九百弗にして、明治三十六年に第一回の配當を爲せしより昭和三年に至る迄總配當二五〇%に達せり。

交通 鑛山事務所は北鎮面大岩洞にあり、事務所の東方に大岩坑及大岩搗鑛所あり、南方二十丁に橋洞坑及橋洞搗鑛所及青化製鍊所あり。橋洞坑の南二十丁に北鎮の部落あり、北鎮には面事務所警察署及郵便局あり、北鎮は京義線孟中里驛の北方約二十三里の處にあり、道路平坦にして孟中里北鎮間は毎日一回の自動車便あり七時間にして達せらる、途中雲山博川の二邑を經由す。

地質及鑛床 當地方の基礎地體は前寒武利亞に屬する剝狀花崗岩の構成する所にして、之を貫きて粗粒花崗岩（長石の結晶一吋以上に及ぶものあり）の噴起あり附近の山嶺は大抵此岩石の營爲せる所にして、只氣界の外力之に作用し不等風化作用を受け山頂絶壁を形成するところあり、爲めに山谷稜々自ら怪異なる地貌を爲せるもの尠からず、海拔平均二千尺餘とす、鑛床上より見るときは粗粒花崗岩は重要な岩團にして、此の岩團中に裂罅充填鑛床として胚胎せる石英脈が自然金若しくは含金黄鐵鑛、方鉛鑛閃亜鉛鑛等を含蓄せるものなりとす、鑛脈は並行せる複脈にして走向約北東東、傾斜は東谷坑の南傾斜を除きては他坑道皆北傾斜にして五十度乃至七十度の急斜角をなす、鍾幅及品位に至

りては頗る變化に富み時としては鑛囊狀、團塊狀を呈する所あり、又鑛脈は分岐せるものあり支脈に至りては幅數寸に過ぎざるも其分岐點は幅廣く五十尺餘に達せるものあり、而して鑛石の分布は鍾の上磐側或は下磐側に偏するが又は中央帶を占むるものあり、品位は脈幅廣きもの必ずしも富鑛ならざるも一般に脈幅大なる所に良好なる部分を有するが如し。

本鑛には其成生後に起れる斷層及岩脈あり、之れが爲めに横斷され紛雜せられ鑛脈渺ならず、其最も著大なる斷層は大岩洞と橋洞との鑛脈を東西に分離せし一大池溝的斷層となりとす、其移動變位せし距離約四千尺にして、西半分は約六百尺沈下せる如く粗粒玄武岩の充填する所となり其の間鑛床の破片を交雜せる所あり。

岩脈も同様なる玄武岩の所爲にして幅、數寸より數十尺に達し所々地殻の弱點を穿ちて迸出し鑛床を横斷せる事勿論にして又時として平行せるものあり、之れが爲め採鑛上種々の問題を惹起すること渺なからず、概して岩脈は橋洞に少なく大岩洞に多し、尙注意すべきは石英脈は屢々石墨を分泌し薄膜狀に石英間に夾在し爲めに石英は一つの縞狀構造を呈せること多し。

採鑛 現在の採鑛場は大岩洞、橋洞、鑛後東谷及燭臺なり、内前三者は同一鑛脈にして其採鑛場は廣く磐は軟く且つ石英中の黒鉛の層理に溶びて滑り易きが故に、スクエアセット支柱法を採用せり然し一般採鑛法としては上向階段法を採用せらる。

總ての開鑿、採鑛共に請負にして、其方法は會社と坑夫との協議の上に定められたる法を採用せり
 最初露頭部より錘押掘進を爲し水準下には鑛床を追へる斜坑を設けて開鑿せり、水平坑道の間隔を普
 通百呎とし下底に於ては百二十呎、百五十呎とせり而して水平百呎毎に坑井を設けて相連絡せり、橋
 洞斜坑口は大岩斜坑口より百呎低く鎮後坑口より百二十呎低し、而して大岩橋洞及鎮後等を通して各
 水平坑道を合算するときは四十萬呎に達せり。

坑道の大きさは普通幅五呎高六呎又は幅呎高七呎とす斜坑の大きさは次の如し

	大	さ	區	分	數	傾	斜	深	度
大岩	横二十二呎	竖七呎			四		七十一度		二二九三呎
橋洞	横二十呎	竖七呎			四		七十二度		一一一六
鎮後	横十一呎	竖六呎			二		四十六—六十八度		一〇八五
東谷	横十二呎	竖六呎			二		六十八度		三五九

坑内最下底は大岩坑の二十二坑道にして、坑外より二千七百呎下に在り橋洞坑の最下底は坑外より
 二千三百呎下に在り。

開鑿は主として手掘にして工事を急ぐ箇所及切羽の一部に鑿岩機を用ふ。

鑿岩機 BBWC二一型 インガゾール、ランド、ハンマー、ドリル

電力供給の都合により一臺乃至七臺迄を使用し火薬は「ノーベル、ダイナマイト」を使用して爆破作業をなす一日の火薬使用量は約五十貫にして一箇月の使用量は次の如し。

ダイナマイト 二百五十箱 一千五百貫

雷管 六百九十箇

導火線 一萬八千呎

火薬庫は山腹斜面を利用し約十間距離を離て、階段状に地均して其處に二枚煉瓦造約九坪の倉庫を二列に設置す、火薬庫十一箇所内二箇所は雷管貯藏用にして一庫に付二百五十箱宛分納せらる、現品は英領加奈陀より年兩三回輸入せり。

上向階段法の大きさは高六呎幅五呎を普通とし又「スクエアセット」の大きさは幅四呎五吋乃至六呎高さ六呎乃至七呎横五呎とす。

支柱材は斜坑其他要部に角材を用ゆる外總て丸材にして徑六吋乃至十五吋なり。

運搬は大體走向に設けられたる水平坑道の各所に坑内鑛石溜を設け、漏斗口を備へ坑道には十二封度軌條十八吋「ゲージ」に敷設し、鐵製鑛車一噸入（自重一四〇〇封度）木製鑛車一噸入（自重五〇〇封度）を使用し大岩及橋洞坑には計二百臺其他には百臺を備ふ、人力にて鑛石溜より捲揚斜坑底に設けたる容量五〇乃至一〇〇噸入鑛石溜迄運搬す。

捲揚の要領

主要捲揚 二四封度軌條 三呎軌幅 複線複胸 二噸入スキップ

坑内捲揚 同 同 同 一噸入スキップ

主要鑛石捲揚装置として二區を設け、人の昇降及諸材料の揚卸用に「ケージ」を備へたる二區を設け更に一小區を置きて階段用とせり、鋼索の「スキップ」用は一時「ケージ」用には四分三吋を用ふ。

捲揚用原動機

坑外に水平還烟火 式汽罐三基を備へ主給管を以て連絡す。

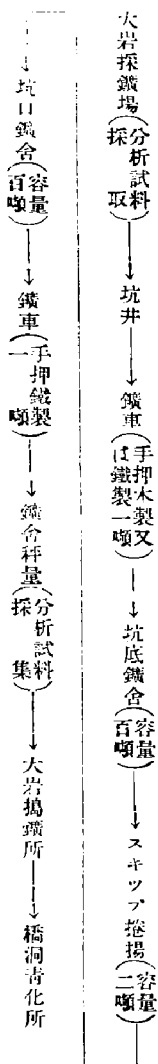
常用氣壓限度毎平 時に付一〇〇封度常時八五封度にて使用す。

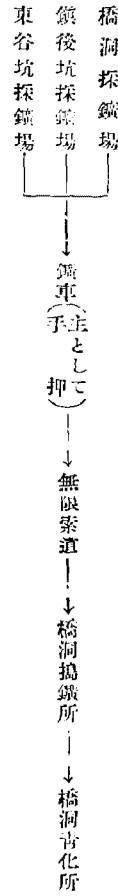
上部捲揚機 複式捲揚用(スキップ用) 九十馬力乃至百馬力 鼓胴徑七尺 幅四尺

上部捲揚機 複式捲揚用(ケージ用) 七十五乃至九十馬力 鼓胴徑八尺 幅三尺

下部捲揚機は電動機により運轉し馬力二〇、捲揚徑二尺、幅二尺にして「スキップ」を使用せり。

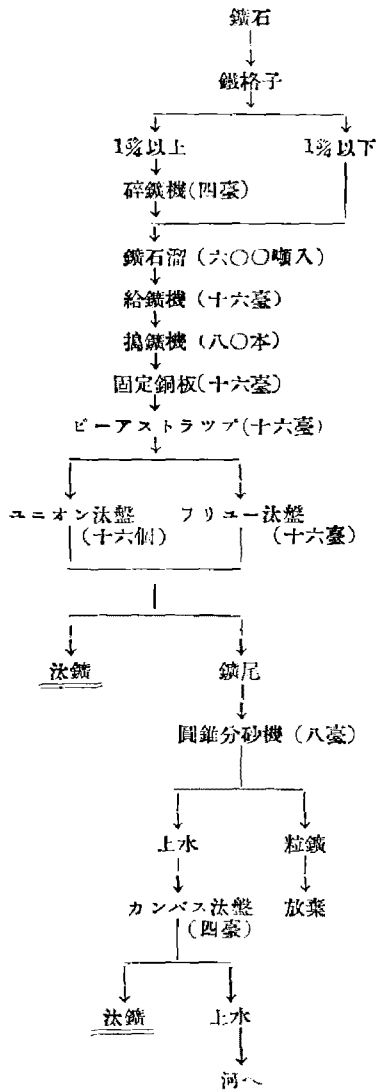
大岩坑其他一般作業運轉系統





選鑛及製鍊 選鑛製鍊所は大岩及橋洞の二箇所があり、大岩坑よりの鑛石は大岩搗鑛所にて處理し其他よりの鑛石は橋洞搗鑛所にて處理す、兩搗鑛所に於ける搗鑛製鍊の系統は略同一なり。

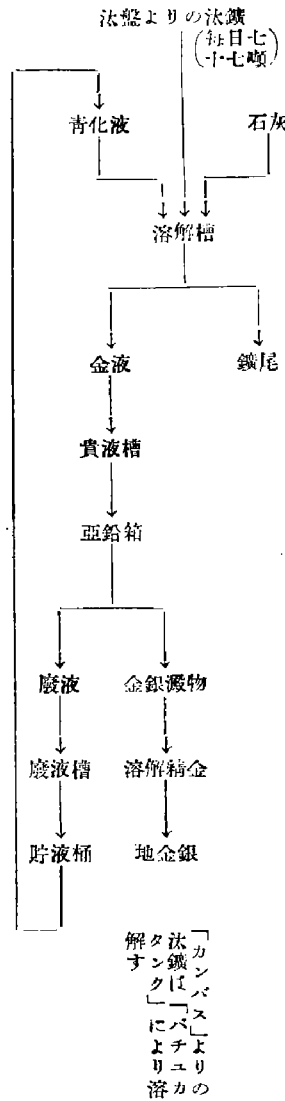
大岩搗鑛所系統圖



橋洞搗鑛所に於ては汰盤を悉く「フリー」型とし、三十二臺を使用し圓錐分級機が大岩の八臺に比し七臺を使用せるを相違の點とす。

一日の取扱量は兩搗鑛所にて七百噸なり、而して汰鑛の採取量は元鑛の一割一分程度にして約七十噸なり、此汰鑛は橋洞青化製鍊所に送鑛せらる。

橋洞青化製鍊所系統圖



重なる搗鑛製鍊機械

碎 鑛 機 ブレーキ式 隙間二吋 能力一臺十噸

給 鑛 機 チャレンヂ式自働給鑛機

搗 鑛 機 重量一千五十封度 搗鑛能力一日一本四噸半

汞 面 銅 板 長さ九呎幅四呎傾斜一呎に付一・二吋なり

ピアーストラップ

雲山金鑛

「ユニオン式と、フリュー式との二種、兩式とも同じ大きさにて幅六呎
「ペルト」の長さ二十七呎 傾斜一呎に付一、二吋

圓錐分級機

帆布法盤

溶解槽

貴液槽

亞鉛箱

廢液槽

青化液循環唧筒

空氣壓搾機

パチユカタンク

原動機

鷲峰水力發電所

ペルトン水車

發電機

勵磁機

幅二呎 長さ十六呎 傾斜一呎に付一、二吋

鋼製 徑二十五呎 高さ六呎 二〇個

同 徑十呎 同六呎 一個

同 幅四十四吋 長さ十六呎 同二呎 (六區)一個

同 同十五呎 同三十呎 二個

二 聯 十馬力 一

インガートンル單筒 二十五馬力 一

鋼製 高さ三十呎 徑八呎 四個

二臺 實馬力各八〇〇 回轉數三〇〇 水量一二八呎 落差四五呎

二臺 三相交流 電壓二、四〇〇ヴォルト 電流一五〇アンペア

二臺

勵磁機用原動機

二臺

ベルトン水車

變壓機

四臺

一次 二、四〇〇 二次 三三、〇〇〇

草里發電所

フランシス型水車

一臺

實馬力八〇〇 回轉數三六〇

發電機

一臺

三相交流 電壓一三、二〇〇ヴォルト 一二二アンペア

勵磁機

一臺

勵磁機用原動機

一臺

實馬力二五

大岩洞火力補助發電所

汽機

重聯成機

實馬力二三〇 回轉數一〇〇

汽罐

横置圓筒式 容量二三〇

發電機

三相交流

容量二〇〇 電壓四五〇 電流二五七

勵磁機

橋洞火力補助發電所

汽機

重聯成機

實馬力三〇〇 回轉數八四五

汽罐

横置圓筒式 容量一〇〇

發 電 機 三 相 交 流 容 量 五 〇 〇 電 壓 一、三 二 〇 電 流 二 一 八

勵 磁 機

勵 磁 機 用 原 動 機 一 台 實 馬 力 五

鑛 夫 員 數 及 賃 金 (昭 和 三 年 十 二 月 末 日 現 在)

種 別	人 員	賃 金			均
		最 高	最 低	平	
坑 支 柱	六〇四	一・二〇	〇・四〇	〇・七六	
捲 揚 機	二〇九	一・三〇	〇・五〇	〇・七七	
運 搬 機	九四	一・〇〇	〇・七〇	〇・七三	
火 藥	三四一	一・〇〇	〇・五〇	〇・七七	
機 械	六〇	二・五〇	〇・八〇	一・六五	
雜 業	二六	一・五〇	〇・七〇	〇・九八	
坑 製 鍊 工	一七五	〇・八〇	〇・四〇	〇・六〇	
選 鐵 工	二七	一・〇〇	〇・七〇	〇・八五	
製 鍊 工	四五	二・二〇	〇・六四	一・四二	
運 搬 工	九〇	一・二〇	一・〇〇	一・一〇	
大 工	四一	一・〇〇	〇・七〇	〇・七三	

計	外			
	鍛	雜	棍	機
	冶		排	械
	夫	夫	夫	夫
一・八二一	二四	三二	三	五〇
	一・三〇	〇・六六	一・〇〇	五・〇〇
	〇・七〇	〇・六〇	〇・七〇	〇・八〇
	〇・七三	〇・六三	〇・八五	一・九〇

衛生に關する施設 病院を設置し院長として外人醫師一名、醫員として鮮人醫員二名、看護婦一名を置き會社に關係ある患者に對しては無料施療をなし、一般外來患者に對しては實費を以て治療を爲せり。

鑛 産 額

年 次	販 賣		高 額
	數 量	價 額	
大 正 十 二 年	銀 四七三、七九〇 金 三五七、四六五	二、四二五、〇五八	
同 十 三 年	銀 五一一、九四一 金 三九〇、六一七	二、六二一、二八〇	
同 十 四 年	銀 四〇四、九二八 金 二九五、〇九七	二、三二二、一七〇	

雲山金鑛

桃花金山

昭	昭	昭大
和	和	和
三	二	十
年	年	年
銀	銀	銀
金	金	金
二六八、七〇〇	三九一、一五五	二七六、四二四
	二六六、六七七	三八一、六二一
	三七三、二八〇	二、一五七、一〇三
		一、八九八、六二九
		一、九四五、五九三

桃花金山 (金)

平安北道宣川郡東面桃花洞 鑛業權者 波邊節

登錄第六五九六號

面積 三七九、六二二坪

沿革 大正十年冬印鳳麟の發見したる鑛床にして、十一年五月大菅竹次郎、印鳳麟の兩名にて鑛業權を得探掘に着手し、同七月池邊惣市を加へて三名共同經營とし探掘及探鑛を爲すと共に水車を建設して混汞製鍊を爲せり、其後兩三名の權者を経て大正十四年宮崎某の手に移り大正十五年には二十噸を處理する選鑛場を建設せしが後二名の手を経て昭和四年四月現權者の有となる。

交通 本山は京義線宣川驛の東北一里半の處にあり此の間牛車を通し得交通便なり。

地質及鑛床 附近の地質は花崗岩及花崗片麻岩よりなり、鑛床は該岩中に胚胎する裂罅充填の石英鑛脈なり、主要鑛脈を本鑛と稱し脈幅七尺に達するも鑛石の部分は其内五寸乃至二尺五寸にして、走向は略南北、傾斜は直立にして露頭延長八百尺に達せり、鑛石は白色石英に方鉛鑛及黄鐵鑛を多量に含有し、品位は概ね良好にして百分の一以上に達するもの少なからず方鉛鑛の多き程上鑛なり。

本鑛脈は斷層及び岩脈を伴ひ是等の爲め錯亂せられたる處多し、西側即ち普通下磐と稱せらるゝ側に存せる鑛石に良好なりと云はる。

採 鑛 德太法及直營により稼行す、德大採鑛は露頭より切下り井戸掘式にして十數個の小堅坑を掘下げその左右鑛石を採掘し手捲揚により搬出せらる、直營は大堅坑より下部水平坑道を開鑿し階段掘をなすものにして採掘物は捲揚機により搬出せらる、而して此の捲揚及排水用として堅坑附近に二十五馬力吸入瓦斯機關を設置し、之れに交流十五キロ發電機を聯結し捲揚機は單式單胴七・五馬力、電動機付にして排水は十五馬力電動三聯プランジャー唧筒一台を以てす。

選鑛及製鍊 坑口附近に於て手選を施し上鑛を選別し鎮南浦製鍊所に賣鍊する外、下鑛は大正十五年建設せる一日二十噸處理能力を有する搗鑛場に於て混汞製鍊せらる、製鍊設備は八十五馬力吸入瓦斯機關により三十五キロ發動機を運轉し、八五〇封度五本立二臺の搗鑛機及ウキルフレーターブル二臺を備へ鑛尾より汰鑛を採取す。

原動機 坑内排水及捲揚用として大鑿坑附近に吸入瓦斯機關十五馬力を設置し、是れに聯結せられたる發電機は小田電機工場製十五キロワット、二二〇ヴォルトの交流發電機にして、唧筒は一分間の排水量十立方尺十馬力電動機付三聯成プランジャー唧筒有効揚程三百尺、捲揚機は單式單胴七馬力半電動機付有効高低三百尺排水唧筒と捲揚機とは交互に運轉せり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金			
		最高	最低	平均	均
坑内機	六五	〇・七五 ^日	〇・六五 ^日	〇・七三 ^日	
支柱	三	一・三〇	一・一〇	一・二〇	
運搬	三一	〇・七五	〇・六〇	〇・七〇	
坑内機	四	一・〇〇	〇・六〇	〇・九五	
坑内機	四三	〇・七五	〇・六五	〇・七〇	
選礦	二一	〇・六五	〇・五〇	〇・六〇	
坑外機	一二	一・四〇	〇・七〇	〇・九〇	
坑外機	一五	〇・七〇	〇・六〇	〇・六五	
計	一九四				

鑛 産 額

年 次	販 賣		高 額
	數 量	價 額	
大 正 二 年	鑛 石 六六、〇〇〇 <small>買</small>	九、九〇〇 <small>円</small>	
同 三 年	五四四、三〇〇	一六〇、五六八	
同 四 年	七四二、五〇〇	三二五、四九二	
同 五 年	四二〇、〇七〇	五二、三六〇	
昭 和 二 年	一八八、四八七	四二、七四三	
昭 和 三 年	三八六、四四〇	一二〇、六七四	

新 府 面 金 山 (金、銀)

平安北道宣川郡新府面安上洞

鑛業權者 東洋拓殖株式會社

登錄第六二號外六鑛區

面積 二、九一二、七九二坪

沿革 本山は明治三十年頃より砂金地として知られ、三十九年獨逸人特許を得採掘及製鍊を爲し一時盛大なりしが、四十三年に中止し附近鑛夫の徳大式稼行に委せたり、大正三年谷口與四郎の手に

新 府 面 金 山

移り七鑛區を合併して新府面金山と稱し直營にて作業せしが、大正七年鑛況不良に陥り徳大式經營に移り更に其後一時梨城鑛山又は三面金山と稱し核行せしが再び新府面金山と改め、昭和三年一月東洋拓殖會社に權利を讓渡し目下直營徳大兩式により作業せり。

地質及鑛床 宣川方面は一般に片麻岩系に屬し、之を貫き多數の小岩脈所々に噴出し金鑛脈は多く該岩脈に接して成長するものなり、其鑛脈数は現在探知し得たるもの二十九條あり、其走向は一定せざるも何れも北東より南西に走るものにして傾斜は東南に七、八十度なるもの多し、脈幅は二、三寸より最大三尺に及び延長數十尺より數百尺に及ぶ、品位は頗る良好にして平均十萬分の五を下らず、萬分の一を示すものも多し、隨伴鑛物として方鉛鑛、黃鐵鑛を有する事普通の例に見る如し。

採 鑛 採鑛は殆ど全部徳大により僅に一部の採掘を直營によれり、徳大法は數年前より賃借料を徵收して三名の徳大に委任經營とし、採掘鑛石の殆ど全部を久原鎮南浦製鍊所に賣鑛し、鑛石代價の五分の一を鑛主に納付せしむるも、酸化鑛及下鑛は附近の水車にて處理する事あり。

選鑛及運搬 選鑛は簡單に坑口に於て手選し、精鑛は吸入として馬背又は牛車により宣川驛に搬送し、更に鐵道により鎮南浦に至り久原製鍊所へ賣鑛せり。

年次	年	數	販賣	
			量	價額
大正十二年	青	金	六、三三三 <small>匁</small>	一五、八三二 <small>円</small>
同十三年	鐵	石	六三、五八〇 <small>匁</small>	九、五一九
同十四年	同	同	八八、五〇〇	二〇、三七八
同十五年	同	同	一一一、二〇〇	一六、九〇五
昭和二年	同	同	一九六、〇〇〇 <small>匁</small>	六〇、七一八
昭和三年	青	金	三六〇 <small>匁</small>	三五、六七〇
昭和四年	金	銀	二二四、五六〇 <small>匁</small>	

鑛產額

種別	人員	貨		
		最高	最低	平均
坑夫	八〇	〇・八〇 <small>円</small>	〇・六〇 <small>円</small>	〇・七〇 <small>円</small>
子夫	八〇	〇・七〇	〇・五〇	〇・六〇
選鑛夫	八〇	〇・七〇	〇・五〇	〇・六〇
計	二四〇			

昌城鑛山 (一切鑛物)

平安北道昌城郡東倉面

鑛業權者 シンジカ、フランセーデー、チャウセン
鑛業代理人 ウェー、アール、ワイゴール

登錄第九四號

面積 一二〇、七二七、八三六坪

沿革 昔鮮人の採掘せしと言ふも詳かならず明治三十四年各國が韓國政府に對し鑛山利權を獲得せしとき、佛國人「サルタレル」は本鑛山地方に於ける特許に就て韓廷と協約を締結し、事業開始後二十五箇年の採掘期間を得たり、而して協約調印の日より二箇年以内に鑛區を選定する事、鑛山附屬の諸建築物、道路、土地、鑛山器械、鑛業輸出入品に對する諸税を免除する事、鑛業純益金の四分の一を政府に納入する事等を條件に入れたり。

明治三十六年「サルタレル」の代理人「ル、フェーブル」は昌城郡内に鑛山を選定し開鑛すべき旨を韓國政府に通告せしに、同地方は政府に於て保留すべき意志あるとの理由にて却下せられしが、久しく懸案の儘經過して統監府時代に至り、明治四十年七月一日遂にその承認を得、同日附より二箇年以内に鑛區選定すべきことを以て解結せり、明治四十二年六月「サルタレル」は昌城郡内に於て二鑛區を選定し鑛業權を獲得し、南部區域は東倉面の大半大倉面、青山面の各一部を占め北部區域は昌城面祐

面の一部及南倉面の全部より成れり。

明治四十三年八月東倉面大榆洞に一大良鑛脈（大榆洞鑛脈）を發見し徳大掘にて稼行せしが四十五年一月より「ルイ、ロンドン」専ら之が經營の任に當れり。

大正元年八月東倉河畔に五本立鐵製◇鑛機及九月に青化製鍊所を新設し、次で東榆洞鑛脈の發見に伴ひ搗鑛機を三十本に増加し大正三年十二月には泥鑛製鍊所をも開始するに至れり。

其後大榆洞及東榆洞の二坑を主要なるものとして稼行し、北部區域は久しきに亘り探鑛せしが良好なる結果を得ず、而して大正十三年十一月に至り黃海道遂安郡遂安金鑛を經營せる「ソール、マイニング、コムバニー」は「ロンドン」より本鑛業權を讓受け資本金二十七萬五千磅の朝鮮「シンジゲート」を組織せんとせり、然るに佛國政府は條約第十四條により佛國人又は佛國法人以外に特許權讓渡につき抗議する所あり、讓渡行惱の態なりしが遂に佛國法人「シンジカ、フランセデー、チャウセン」を組織し前記「ソール、マイニング、コムバニー」一派の英國人を資本主とし大正十四年六月讓渡登錄を了せり、次で大榆洞坑内「ルール」堅坑の改修掘進を爲し、大正十五年製鍊場を改築し新式設備を以て金鑛製鍊を爲し今日に至れり。

交通 本鑛山事務所は東倉面大榆洞に在り、其東南方七里には雲山金鑛所在地たる北鎮あり、道路は概ね平坦にして牛馬車或は自動車を通じ得べく、北鎮より京義線孟中里に至る道路は亦平坦にし

て此間二十三里毎日一回の定期自動車便あり、又鴨綠江岸甲岩洞は北部區域の中心地なるが大榆洞より十八里餘あり牛車を通ず、甲岩洞は安東縣及新義州より通航する舟便あり、又新義州及碧潼に至る自動車の通路に當れり。

地質及鑛床 常稼行地附近の地質は太古大統に屬する黒雲母花崗岩より構成せられ、壓力變質作用を蒙ること甚だしく剝狀花崗岩及壓碎花崗岩の發達せるを見る、又變質砂岩の薄層を介在し淮片麻岩往々にして存在し玢岩々脈も亦各所に存するを見る。

鑛床は花崗岩中に胚胎せる石英脈にして走向、傾斜竝に厚さ等を異にするのみならず時に支脈を分派し不規則なる形態をなすことあり、鑛脈の走向北六十五度乃至七十度西、傾斜西南四十三度乃至四十五度を普通とせり。

大榆洞鑛床は最も有力なる鑛床にして又盛に採掘せられつゝあり、鑛脈の走向は北七十度西傾斜西南へ四十五度なるを常とす、脈幅平均七尺にして幅十數尺に達する所あり、富鑛帶は東南三十度の方向に落し東、西二帶ありて内西方の富鑛帶は下部に品位良好なるを見る、其の品位は十萬分の二乃至五を示せり。東榆洞鑛床は前者の東方約四町にあり、露頭附近に於て鑛幅數尺にして上磐、中磐、下磐との三鑛に分かれ、下るに従ひ合體して膨大し三番坑道に於て八十尺の脈幅に達せる處あり、平均品位十萬分の一、五なり。

採 鑛 大楡洞鑛床の下底十番坑道附近以下を採掘し採掘場は年々下降せり、此十番坑道は「ルー、シャフト」と稱する斜坑口より斜に一千七十六呎ありて垂直七百七十七呎なり。

採鑛法はスクエヤセット或はストーピング法にして採掘跡は土砂廢石を充填せり、一「セット」間五尺乃至六尺にして充填物としては手選捨石を以てし手掘及鑿岩機を以て穿孔せり、鑿岩機はジャツク、ハンマーBCRW二四〇型及インガ、ゾール、ストーパーBC二十一型にして其壓氣機内容次の如し。

エヤ、コムプレッサー インガゾール、ランド、ロンパニー インベリアアルタイプ #二〇
 エア、シリンドー 22" X 10" 13" X 16" プレンシユアー 七五ポンド
 電 動 機 二一〇馬力 回轉數 一一、〇〇〇

開坑は主として鑿岩機を以てし地表及東楡洞の採鑛には手掘を用ゆ、而して大正十四年より昭和二年に至る掘進開坑の延長左の如し。

年 次	大楡洞坑内	東楡洞坑内	探 鑛 坑 道	合 計
大 正 十 四 年	一一、九三五 <small>呎</small>		一一、二六一 <small>呎</small>	二四、二三四 <small>呎</small>
同 十 五 年	六、五一四	三八 <small>呎</small>	七、一九六	一三、七一〇
昭 和 二 年	六、七二三		七七二	七、四九五
昭 和 三 年	八、九五一			八、九五一

運搬は主要坑道に十二封度及十八封度軌道を敷設し鑛車(容量四分三噸入)を運轉し「ルールシヤフト」により空番坑道迄捲揚せ之れより坑外に搬出す。

ルールシヤフト捲揚 七十五馬力 四八〇ヴォルト 一一〇アンペア
ブリテイツシ、ウエスチングハウス會社製捲揚機

スキップ容量二噸

排水は大楡洞坑に於ては「フランジヤーポンプ」(一分間の排水量)を五臺ウオシントンポンプ一臺(一分間の排水量五〇〇ガロン)小ウオシントンポンプを(一分間の排水量)以てせり、通氣は自然通風なり。

選鑛及製鍊 採掘鑛石は十八封度軌道を容量一噸の鑛車によりて人力にて製鍊場に運送せらる。製鍊場の設備左の如く全青化法による。

第一工場(荒碎)

鐵製斜格子 長さ十呎 幅三呎九吋 傾斜五十度 間隔一吋四分の三
ブレーキ式啮鑛機 七吋×十一吋 二臺 九吋×十二吋 一臺 斜格子を處理す
木製鑛舎 容量三百五十噸

第二工場(粉碎)

給 鑛 機 鑛舎よりの鑛石を自動的に搗鑛機に給入す

搗 鑛 機 一、一〇〇封度 十本 一、二〇〇封度 四十本 處理鑛量一日二〇〇噸

第二「ドール、クラツシ、ファイヤー」 泥砂二分級

第二「ドール、クラツシ、ファイヤー」 同 泥鑛を第三工場に送る

水壓分級器 砂鑛の分級

ウキルフレ、テーブル 分級器により分離せられし粗、細、兩鑛を處理す

アーレン式分水器 鑛尾、泥砂を放棄す

ハーデング、コニカル、ミル テーブルの汰鑛、中鑛のみを處理す

第三「ドール、クラツシ、ファイヤー」 更に粉碎す
細鑛はコニカル、ミルに返送し泥鑛は第三工場に送る

第三工場（青化）

第二工場に於ける第一、第二、第三「クラツシファイヤー」よりの泥鑛は第一二工場に於ける第一

「シツクナー」に入り濃集せらる。

・第一「シツクナー」 徑三十五呎 深さ 十尺

第一、第二、第三「アジテーター」 各徑 十尺 各深さ 十四尺

ソリュウシヨシヨシ 徑 三十尺 深さ 六尺

第二、第三、第四、第五「シツクナー」 各徑三十五呎 各深さ 十尺

昌城 鐵山

バーレン、ソリュウシヨシヨシタンク 徑二十五呎 深さ 八呎
 ファイルター、タンク 徑 二十呎 深さ 五呎
 プレシビテーションボックス 長さ十一呎 幅二呎十一吋 深さ二呎六吋

工場の動力として次の原動機を有せるも最近平壤電興會社より送電を仰ぎ電動機運轉に改む。

英國製 瓦斯機 關 三百馬力 一臺
 同 二百五十馬力 一臺
 内地製 同 百五十馬力 一臺
 同 同 百三十馬力 一臺

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種 別	人 員	賃 金			
		最 高	最 低	平 均	
坑 夫	三七六	〇・九〇 ^円	〇・七〇 ^円	〇・八〇 ^円	
支 柱	二〇	一・〇〇	〇・八〇	〇・九〇	
運 搬	二九	一・〇〇	〇・七〇	〇・八五	
機 械	一九	一・二〇	〇・七〇	〇・九五	
工 作	一四	二・〇〇	〇・七〇	一・三五	
雜 夫	二〇	〇・七五	〇・六五	〇・七〇	

衛生に關する施設 衛生に關する施設として病院を設置し、外人醫師二名により従業員及其家族の
 醫療を掌れり。

鑛 産 額

計	外 坑				
	雜	工	機	運	製
	夫	作	械	搬	鍊
	夫	夫	夫	夫	夫
七一四	三〇	二八	六四	一五	九九
	〇・七〇	五・〇〇	五・〇〇	〇・九〇	一・〇〇
	〇・六〇	一・〇〇	二・五〇	〇・七〇	〇・六〇
	〇・六五	三・〇〇	三・七五	〇・八〇	〇・八〇

年	次	販 賣		高 額
		量	價	
大正	二	金	一七六、九二六	五七九、八九四
同	三	金	一〇一、七一八	三九五、九七七
同	四	銀	一六六、六二三	九八四、三二二
同	五	銀	八五、四二二	
昭和	十	金	一八三、三七六	九六一、〇七六
	十	銀	一一一、九七〇	

昌城鑛山

新延金山

一〇六

昭	和	三	年	金	銀	金	銀
				二二二、四五六	一三九、七七〇	二四三、六七四	一三七、八五三
				一、一九四、〇三三	一、三〇四、八三九		

新延金山 (金、銀)

平安北道朔州郡九曲面 鑛業權者 朴根湜 外四人

登錄第一三〇八號

面積 九二九、九二八坪

沿革 本山は明治四十二年八月張輔衡外一名の出願許可を得て着手し、一時頗る盛況を極め數千の鑛夫蟻集せしも間もなく衰へ、大正二年六月荒井初太郎外二名の手に移り、鑿坑を開鑿し製鍊場を設けしが坑内の湧水多くして遂に大正八年休止するに至れり、然るに後十四年冬現鑛主の手に移り探鑛の結果良好部を發見すると共に六十五馬力瓦斯機關により運轉する製鍊場及排水唧筒を設け今日に到れり。

交通 朔州邑の北西一里新安洞に事務所及製鍊所あり、京義線定州驛或は新義州驛より定期自動車により朔州邑に到り徒走一里にして達するを得。

地質及鑛床 本山附近の地質は正片麻岩及准片麻岩よりなり花崗岩、珪長斑岩、長石斑岩及玢岩等の岩脈を有す、鑛床は主として准片麻岩中にある石英脈にして、本鑛の走向北七十度西傾斜六十度西南を示し、堅坑の下底に於ては鑛脈三本に分岐し其の中各八尺乃至十五尺に達す。鑛石は白色石英に少量の磁硫鐵鑛、黃鐵鑛、方鉛鑛、閃亜鉛鑛等を随伴し含金甚だ良好なり。

採 鑛 主要採鑛場なる新安坑は事務所の後方山腹に在りて、堅坑の深さ二百四十二尺にして東西に鑛押坑を開く、東向は四坑道にして最長四百五十尺西向は三坑道にして最長三百尺に達す、採鑛は手掘發破により階段掘を行ふ、採掘物は鑛車によりて堅坑口に運搬し三十馬力、電動スキップ捲揚により坑外に搬出し更に約百間を距る製鍊場迄軌道運搬をなせり。

排 水 堅坑底は附近河底水準以下に降れるを以て相當多量の湧水あり、現在堅坑百尺及二百尺の二個所に各十馬力十五馬力の電動渦卷タービン唧筒四臺を設く。

製 鍊 混汞製鍊は三百封度五本立搗鑛機六臺、五百封度五本立搗鑛機六臺により一日一萬貫の鑛石を處理す、鑛尾は容量各六千貫の鐵板製青化槽十二個を備へ青化製鍊を行ふ。

原動機 原動機として横置式複筒吸入瓦斯機關二百馬力一臺及同單筒吸入瓦斯機關六十五馬力一臺を設け、製鍊場動力とし尙日立製作所製百キロ發電機一臺により發電し捲揚排水等を運轉す。

鑛 夫 員 數 及 賃 金 (昭和三年十二月末日現在)

鑛產額

年次	數量	販賣	價	高	額	坑		種別	人員	最高	最低	平均	金額
						外	內						
一九二	八	〇・七一〇	〇・六〇〇	〇・七〇〇	〇・六五〇	雜	雜	夫	一〇	〇・七〇〇	〇・六〇〇	〇・六五〇	〇・七五〇
						機	機	夫	六	一・二〇〇	〇・九〇〇	一・〇五〇	
						製	製	夫	六	一・〇〇〇	〇・九〇〇	〇・九五〇	
二〇	七	〇・八〇〇	〇・七〇〇	〇・七五〇	〇・七五〇	運	運	夫	二〇	〇・七五〇	〇・六五〇	〇・七〇〇	〇・七五〇
						採	採	夫	七	〇・八〇〇	〇・七〇〇	〇・七五〇	
						鑛	鑛	夫	七	〇・八〇〇	〇・七〇〇	〇・七五〇	
計	八	〇・七一〇	〇・六〇〇	〇・七〇〇	〇・六五〇	一〇	六	六	二〇	〇・七〇〇	〇・六〇〇	〇・六五〇	〇・七五〇

橋洞鑛山 (金, 銀)

昭	昭	大	大	大	大	大	大	大	大
和	和	正	正	正	正	正	正	正	正
三	二	十	八	七	六	五	四	三	二
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
青	青	精青	精青	精青	精青	精青	精青	精青	青
金	金	鑛金	鑛金	鑛金	鑛金	鑛金	鑛金	鑛金	金
六四、八〇七	三七、八八〇	一五四、八九〇 六〇〇	一八一、五七〇 二、六九九	三一五、〇〇〇 三、九〇四	一九五、九二〇 五、四〇七	二八〇、〇〇〇 三、八三〇	二一八、四六〇 三、六二四	四〇、〇〇〇 一、〇三四	二四二
二二六、八二五	一三二、五八〇	四四、八五九	一一、五〇一	三三、〇二四	五五、三二四	八四、五二七	五六、二〇八	五一、八五二	八三八

平安北道朔州郡外南面 鑛業權者 方應 謨 外二人

登錄第七四七九號

面積 五九六、三八〇坪

沿革 本山は大正十五年八月現權者許可を受け徳大式にて稼行し水車搗鑛製鍊をなして今日に至る。

交通 京義線定州驛より自動車にて龜城を経て南倉に下車し更に三里徒歩或は馬脊によるべし。

地質及鑛床 附近の地質は綫狀花崗岩及准片麻岩より成り、鑛床は准片麻岩中に胚胎せる石英鑛脈なり。本山に於ける本鑛は隣鑛登錄第七四〇四號三泰金鑛の第二脈鑛先にして、鑛石は灰白色石英に少量の黄鐵鑛を随伴し走向北五十度東、傾斜東南三十五度、脈幅五寸乃至四尺五寸あり。

採鑛 手掘發破を以てす坑道によりて上下を採鑛す、總て徳大式にして産額の六分の一を分鐵として事務所に納入す、採掘鑛石は坑口前に於て手選鑛となし精鑛は駄馬又は人背にて製鍊場に送らる。

製鍊 木製水車十本立搗鑛機十臺によりて混汞收金をなし鑛尾は木製六百貫容量の青化槽十本により青化製鍊を行ふ。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金			
		最高	最低	低平	平均

坑	製鍊	運計
夫	夫	夫
三八	一八	一五
一・〇〇〇	一・〇〇〇	〇・八〇〇
〇・六〇〇	〇・五〇〇	〇・四〇〇
〇・八〇〇	〇・七〇〇	〇・七〇〇

鑛産額

年次	販賣		高
	數	量	
昭和二年	青金	四、三二四 <small>匁</small>	一五、一三四 <small>匁</small>
昭和三年	青金	一七、〇八二	五九、七八七

泉浦金山 (金、銀)

江原道旌善郡東面 鑛業權者 金 貞 淑

登録第六六九〇號

面積 七二七、五二〇坪

沿革 本山は大正十一年五月崔應柱の出願に係り、同年十一月許可と共に稼行に着手せしものに

泉浦金山

して、後大正十四年十二月現鑛主の名義に移れり、而して本山は大正十二年頃富鑛部を發見して一時盛況なりしが永續せずして衰微せしも、大正十五年七月再び良鑛を發見し次で大富鑛部に逢着し盛況を呈せり。

交通 本山は旌善邑の東四里餘に在り、京城より原州を経て平昌に到り更に旌善に至る間、自動車の便あるも旌善山元間は溪谷に沿へる小徑にして漸く馬背によるのみ、然れども近く旌善より北東下臨溪を経て東海岸三陟に至る道路新設計畫中なれば將來の交通は稍便利となるべし。

地質及鑛床 本山の地質は主として石灰岩粘板岩及び花崗岩よりなり、鑛床は石灰岩及粘板岩中に胚胎せる石英脈にして三條あり、互に平行し鑛區の南方に於ては之れを横切る東西脈ありて晝岩金鑛に接す、而して鑛脈は走向南北にして傾斜八十度西を示し、幅三寸以上三尺に達し脈は時として母岩たる石灰岩の層理に沿ひて枝脈を出し、その分枝點は幅員大となり富鑛部をなし母岩の傾斜に浴び深く連亘することあり。

鑛石は少量の方鉛鑛、蓄鐵鑛を有し金は屢々自然金の結晶をなすも銀分多く、品位は含金五〇%となる鑛脈の平均品位は甚だ變化あるも、現在採鑛する富鑛部は萬分毫を示すものゝ如し。

採鑛及運搬 從來徳大法の切下り採掘なりしも最近富鑛部の出現により直營に改め、坑道又は切下りにて手掘發破法を採用せり、排水は捲揚により採掘物の捲揚と同時に揚水し、採掘物は人背擔軍に

より坑外に搬送せり、選鑛は坑内手選にて選別せられ直ちに製鍊原鑛として麻袋入擔車又は牛車により製鍊場に運搬す。

製鍊 従來朝鮮式水車木製搗鑛機により製鍊を行ひしが、最近鹿兒島式百封度五本立四臺百五十封度五本立二臺を設け、木製水車により運轉し臼内混汞法により製鍊し、その搗鑛々尾は毛布流によりて汰鑛を取り更にその鑛尾を沈澱乾燥して青化製鍊に附せり、青化法の滲出槽は二百貫入木製槽十九本を以て五日間の溶解滲出を行ふ。

鑛夫 鑛夫は食料煙草履物の現品給與を受け、尙採鑛石の五分の一を分與し、その鑛石は事務所々右搗鑛機を以て混汞製鍊せしめ産出地金より一俵（二十貫）につき一分五厘を搗鑛賃として差引き尙その鑛尾は直轄の所有とす。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

種別	人員	賃金			
		最高	最低	平均	
採鑛夫	六六	○・八〇 <small>円</small>	○・七〇 <small>円</small>	○・七五 <small>円</small>	
製鍊夫	四	一・〇〇	○・八〇	○・九〇	
雜計	八七	○・八〇	○・六〇	○・七〇	

北洞金山

鑛産額

一一四

年次	販賣		價額
	量	高	
大正十二年	青金	二五、二五〇 <small>匁</small>	三八、〇七一 <small>匁</small>
同十三年	同	四、八三五	一二、五七一
同十四年	同	六、三九二	一七、八九八
昭和十一年	同	三五、〇〇八	八七、五二〇
昭和十二年	同	三六、九一一	九九、六六〇
昭和十三年	同	二四、四〇一	六八、三二二

北洞金山 (金)

江原道旌善郡東面 鑛業權者 稻葉ウタ

登錄第六六八七號

面積 七三五、四〇五坪

沿革 本山は大正十一年冬崔永器外二名許可を受けて着手し、同十二年九月金柄球に移り同十四年十二月稻葉某の手を経て昭和三年十二月現鑛主の有となる、而して本山は開山以來水車搗鑛機にて

混汞製鍊を行ひしが、昭和三年秋百五十封度鐵製搗鑛機及三・五馬力、瓦斯機關を増設し青化製鍊を併せ行ひ今日に至る。

交通 京城より自動車にて原州平昌を経て旌善邑に至り、更に四里半馬背又は徒歩にて溪谷の小徑を辿り本山事務所に達す。

地質及鑛床 附近の地質は石灰岩及粘板岩より成り時に閃綠岩の岩脈露出す、鑛床は該岩中に胚胎し走向北十度乃至三十度東、傾斜北西六十度乃至七十度を示す鑛脈にして並行せるもの七八條あり、鑛石は白色石英に少量の硫化鑛を含み大粒の自然金を認むること多し、脈幅は各脈共同様にして三寸乃至二尺に達す。

採鑛 手掘發破により徳大式拔掘を行ふ、即ち露頭より切下り坑道等により不規則なる採鑛をなし採掘物は手捲揚及擔車によりて製鍊場に運搬せらる。

製鍊 山許附近は水利に乏しく水車製鍊甚だ困難なり、開山以來朝鮮式水車搗鑛機四臺を以て雨季搗鑛をなし來り季節以外は南方一里餘の泉浦金山附近の搗鑛機により製鍊せしも、運搬に困難なるを以て昭和三年秋、百五十封度鐵製搗鑛機五本立二臺を鹿兒島より購入し三・五馬力瓦斯機關を設けて、水車と共に併用せり、而して鑛尾は北洞及泉浦の二箇所に於ける青化工場に送り、各溶解槽十四個（徑四尺三寸深さ三尺四寸）を備へ青化製鍊をなせり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金		
		最高	最低	平均
坑夫	二三	一・二〇	一・一〇	一・一五
支柱夫	四	一・三〇	一・一五	一・二〇
運搬夫	五七	一・〇〇	〇・八〇	〇・九〇
製鍊夫	四	一・二〇	一・〇〇	一・一〇
鍛冶夫	二	一・一〇	一・〇〇	一・〇五
雜計	九三	一・〇〇	〇・八〇	〇・九〇

鑛產額

年次	販賣	
	數量	價額
大正十一年	二〇、四九六 <small>母</small>	五一、二四〇 <small>円</small>
同 同 十 二 年	二一、三六〇	五五、二二四
同 同 十 三 年	六七、二九六	八六、七一三

昭	和	同	同
和	和	十	十
三	二	五	四
年	年	年	年
			三一、二八四
			六、五〇〇
			四、八四〇
			二〇、七九〇
			四六、〇四七
			一六、二五〇
			一二、一〇〇
			四一、三七六

佑益鑛山 (金、銀)

江原道平康郡高挿面、榆津面 鑛業權者 三菱鑛業株式會社

登錄第六七五九 七〇〇〇 七〇四〇號

面積 (合計) 一、三四四、八三二坪

沿革 本山は大正十二年金允玉許可を受け徳大式採鑛をなし、水車搗鑛を行ひしが昭和三年六月朴基佑の手に移り、更に四年四月現權者の買收するところとなり、目下探鑛を主とし坑道を開鑿し探鑛をなし搗鑛製鍊を行ひつゝあり。

交通 京元線洗浦驛の西北七里高挿面馬輪里に事務所を設く、道路未だ開けざるも溪流に沿ふ道は坂嶺少きを以て將來道路の改修によりて交通稍便となるべし。

地質及鑛床 附近地質は粗粒及細粒花崗岩よりなり山頂には粘板岩、石灰岩及雲母片岩等を露出し花崗岩中時に巨晶花崗岩及玢岩の岩脈噴出せり、鑛床は花崗岩中の石英脈にして其數多く走向南北よ

り北二十度東傾斜二十度乃至四十度西南を示し、脈幅二寸乃至三尺岩脈の爲めに切斷せられ、走向斷層の爲めに膨縮す、鑛石は乳白色石英の脂肪様光澤を有し黄鐵鑛、方鉛鑛、黃銅鑛を伴ひ方鉛鑛は時に塊狀をなして多量に存することあり。

採鑛 直營探鑛開坑と共に徳大式採鑛をなせり、目下直營開坑に努め錘押掘進中にして良鑛を得つゝあり、採鑛は主として徳大法により上部露頭附近を採鑛せしむ、坑道は軌道運搬によるも徳大掘は擔軍にて搬出す、近く索道運搬の計畫中にして完成の上は面目を一新すべし。

製鍊 未だ探鑛時代なるが爲め在來の朝鮮式水車搗鑛機十本立十八臺を以て混汞製鍊をなし、鑛尾は混凝土造（八尺角深さ五尺）の青化槽二個を以て青化製鍊を行ふ。

鑛夫員數及賃金（昭和三年十二月末日現在）

種別	人員	賃金			
		最高	最低	平均	均
坑	夫	〇・八五	〇・七五	〇・八〇	〇・八〇
支	夫	〇・八五	〇・七五	〇・八〇	〇・八〇
運	夫	〇・七五	〇・六五	〇・七〇	〇・七〇
雜	夫	〇・七〇	〇・六〇	〇・六五	〇・六五
計	二二一				

年次	販賣	
	數量	價額
大正十三年	三、九〇〇 <small>匁</small>	一一、七〇〇 <small>匁</small>
大正十一年	一六、八五八	三九、六九二
昭和二年	一、〇〇〇	二、九〇〇
昭和三年	一三、七五〇	六〇、九〇二

鑛產額

總計	坑				
	雜計	工作	機械	運搬	製鍊
四二〇	一一九	二六	二	六	七二
	〇・六五	一・五〇	一・三〇	〇・九〇	〇・八五
	〇・七〇	一・二〇	一・〇〇	〇・八〇	〇・八〇
	〇・六八	一・三五	一・一五	〇・八五	〇・八三

翰興鑛山 (金)

咸鏡南道永興郡鎮坪面 鑛業權者 元 成 煥 外二人

登錄第四八五八號

面積 七〇七、七四二坪

沿革 本山は大正五年春鮮人の發見にかゝる、後張某外二名により出願せられ七年七月許可を得たり、十四年金潤鴻を経て十五年許潤に移り更に二月現鑛主の有となれり。

交通 咸鏡線旺場驛の南東二里にして鎮興場の市場あり其の東方一里半に位置す、道路平坦車馬を通じ東方猪島の碇泊場迄一里弱海陸共に交通便なり。

地質及鑛床 本山附近の地質は正片麻岩及粒狀花崗岩よりなりて玢岩脈之を貫く、鑛床は片麻岩中に胚胎せる乳白色の石英鑛脈にして、閃亞鉛鑛、方鉛鑛、黃鐵鑛、磁硫鐵鑛及少量の黃銅鑛を隨伴し閃亞鉛鑛の多少によりて含金量位を増減す、是等硫化鑛は石英中に不規則に散點し帶狀構造をなすことなし、現在採掘せらるゝ鑛脈は一脈にして走向北六十度西、傾斜西南七十度を示しその南東に枝脈を分岐す、枝脈は走向北十度西、傾斜北東七十度にして走向斷層によりて尖滅する傾向あり。

本脈は露頭にて二、三寸の細脈なるが下底八十尺にして一尺乃至四尺に膨大し且つ品位良好となり

現在採鑛せる枝脈との分岐點に於ては十數尺に及ぶものあり、本脈の下底は平均三尺枝脈の下部は八寸乃至一尺五寸の鍾幅を有せり、而して坑道地竝以上の富鑛都は全部採掘し盡され下部を稼行す。

採鑛及運搬 採鑛は直營竝に德大法により手掘發破により採掘す、脈幅大なるを以て殆んど鑛石のみを採掘す、故に直ちに選鑛元鑛として捲揚げらる、捲揚は手捲揚（木洞）により坑道地竝迄搬出し更に鑛車にて坑口に出さ、坑口より索道及び駄馬又は擔車にて手選鑛場に搬出す、鑛石捲揚及排水は共に石油罐を以てす。

選鑛製鍊及賣鑛 選鑛は手選によれり而して閃亜鉛鑛の多きを上鑛とし、含金十萬分の五以上を賣鑛々石として秋田縣小坂鑛山に賣鑛し、下鑛は鑛山附近の水車搗鑛機によりて混汞製鍊を行ひ鑛尾は瀧古流によりて汰鑛を採取せり、賣鑛々石は採掘鑛の三分の一にして残り三分の二は水車元鑛となれり、水車搗鑛機は本山の西方一里餘の地に散在し十數臺あり、何れも木製八本立にして一臺一晝夜百二十貫を處理し良鑛よりは百貫につき六五割の青金五匁を採取すと云ふ、賣鑛々石は山元選鑛場に於て試料を採り隣鑛區輪洞里鑛山に於て分析し、且つ鑛石を藤田會社の猪島貯鑛場に經船運送をなし、海路本船により青森港經由同社秋田縣小坂鑛山迄鐵道輸送せらる。

鑛夫 主として直營とし僅に枝脈の一部を德大にて採掘せり、直營鑛夫は鑛主より食料煙草履物等の現品給與を受け且つ採掘鑛石の二割を分配せられ運搬夫は工程請負にして其他は本番とす。

翰興鑛山

鑛夫員數及貸金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人	員	貨金	
			貸	金
坑柱夫	7	6	—	110
支機夫	4	—	—	100
運搬夫	1	7	—	110
工作夫	1	7	—	110
雜作夫	2	7	—	75
選鑛計	1	5	—	60

年次	年	販賣		高
		數	價	
大正四年	鑛	2,000	1,000	—
昭和元年	同	7,000	2,100	—
昭和二年	同	1,500	5,250	—
昭和三年	同	2,500	6,900	—

鑛產額

翰洞里鑛山 (金、銀)

威鏡南道永興郡鎮坪面 鑛業權者 藤田鑛業株式會社

登錄第三〇三六號

面積 九六八、六五一坪

沿革 本山は大正六年一月現權者許可を得て着手せしも財界不況のため同九年以降一時休止し、後十一年夏より德大式にて再開せしが現時一部直營に改め德大式を併用操業せり。

交通 威鏡線馬場驛より鎮興市場に至る二里自動車の便を借り、更に東方一里半にして本山に達す道路平坦にして車馬の交通便にして、尙本山の西南十數町永河里より東一里の猪島には本山の貯鑛場ありて汽船を碇泊せしめ海運の便あり。

地質及鑛床 附近の地質は正片麻岩及准片麻岩よりなり石英斑岩及玢岩々脈を露出す、鑛床は片麻岩中に胚胎せる石英鑛脈にして其數多く走向の異なる脈の交叉分岐して脈幅膨大となることあり、而して鑛脈群は東部に萬代中央北部に新盛、西部に永久の三群あり現時稼行の主なるは萬代區にして、鑛脈は三、四の走向の異なるもの交叉し、その交叉分岐する點に於ては幅員大となり時に二十尺に達す、鑛石は灰白色石英にして脂肪様光澤を有し閃亞鉛鑛、方鉛鑛、黃鐵鑛、磁硫鐵鑛及少量の黃銅鑛を隨

伴し閃鋅鑛の多きに從て合金多く時に萬分の三を示すものありと云ふ、脈幅は普通一尺乃至三尺ありて富鑛部は眼鏡鑛をなすが如し。

採鑛 直營徳太共手掘發破切下り式にして時に階級掘切上等を行ふ。採掘せる鑛石は手捲揚により坑道地竝に捲揚は軌道によりて坑外に出し更に自動鐵索によりて手選鑛場に送らる。

運搬及賣鑛 手選による精鑛は叭詰とし牛車にて永河里船積場に運び船にて猪島貯鑛場に送り、更に本船積として海路青森港を經汽車便秋田縣小坂鑛山に賣鑛す。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

種別	人員	賃金			
		最高	最低	平均	均
坑夫	一五	一・八一	〇・六〇	〇・八八	〇・八八
支柱夫	一	〇・八三	〇・八三	〇・八三	〇・八三
選鑛夫	一三	〇・三五	〇・二六	〇・三〇	〇・三〇
鍛冶夫	一	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇
雜計	五三	一・〇〇	〇・五五	〇・五九	〇・五九

鑛産額

年次	販売		高
	数量	金額	
大正六年	精鐵	七、八四三 <small>貫</small>	四八九 <small>圓</small>
大正八年	同	一六八、三九四	一四、七四九
大正九年	青金	一、八八五 <small>貫</small>	五、七〇七
大正十年	同	五、四五〇	一六、八九五
大正十一年	精青金	三〇五 <small>貫</small>	一六、二二〇
大正十二年	精鐵	一〇六、八二二	一六、二二〇
大正十三年	同	二六七、〇七四	二〇、九六七
大正十四年	同	二〇〇、六七四	一四、三〇二
昭和元年	同	一三一、〇八三	一五、八二二
昭和二年	同	一六六、二七〇	五六、四八九

青岩金山 (金、銀、銅)

咸鏡北道富寧郡青岩面

鑛業權者 米山喜源太外一人

登錄第七六〇二號

面積 七七一、七六〇坪

沿革 大正十四年末青岩面斑竹洞に金鑛を發見せられてより内鮮人の山野を跋渉して探鑛するも

青岩金山

の多く、本山は十五年八月朴昌浩なるものによりて発見せられ、同十月現鑛主出願をなし昭和二年五月許可登録せられたり、而して土幕洞に水車搗鑛機を設置し今日に至れり。

交通 本山は咸北の要港清津府の北約三里半青岩面土幕洞にあり、梨津雄基間の街道に當り清津府より本山迄は毎日定期自動車を通じ甚だ便利なり。

地質及鑛床 附近の地質は稍複雑し清津港に於て見る蛇紋岩は清津より會寧に至る鐵道線路に沿ひ北西に走り、その東方に粘板岩、石灰岩、片麻岩ありて東海岸一帯に發達せる花崗岩地帯に接す。

鑛床は粘板岩及片麻岩中に在りて玢岩脈は常に鑛脈に沿ひて走り、鑛脈は石英質にして二條あり約五十尺を隔てて並行す、第一脈は脈幅三寸乃至八寸にして上磐又は下磐に走向斷層を伴ふも鑛脈は之によりて切斷せらるゝことなし、石英は乳白色又は稍無色にして櫛齒狀をなす、兩磐に近き部分は粒狀を呈し硫化鐵鑛は酸化せられて石英は褐色又は黄色に着色せらる、走向は北方に於て北三十度乃至三十五度西、傾斜西南七十度を示し、南方に於ては走向南北に近く傾斜西八十度乃至垂直となる、延長は土幕洞より倉洞嶺の南方に至り、其の距離約三千尺に達し其の間富鑛部は約千尺に及ぶ、第二脈は第一脈の上磐五十尺乃至百二十尺を隔てて並行し、走向北二十度西又は南北にして傾斜西七十度を示し脈幅及脈石の状態殆ど前者に同じ、唯第二脈は時に二脈に分岐するも二尺乃至四尺を隔つるのみ、以上二脈共に南方には石英の間に方鉛鑛を散點し北方には稍少し、走向斷層は鑛脈を切斷することなく

殆ど之に沿ふのみなるも、母岩を壓縮粉碎して粗鬆質となし鑛石又酸化せられ採掘し易く、且つ酸化帯は相當の深さに達すべく推測せらる、金粒小なれども含金量位高く良好部は高分臺を示せり、朝鮮式水車搗鑛機によるも尙且百貫の原鑛より青金五匁乃至三十匁を産し地金品位八〇——八五%を示せり

採 鑛 採鑛は手掘發破法による、脈石は採掘し易くして爆薬を使用すること少し、採掘せる場所は第一脈に十二坑、第二脈に五坑あり皆水平坑を以て鑛押せり、現在事務所の對岸より南方に向ひ鑛入鑛押の大切坑を開坑中なれば將來の運搬主要坑道たらしむる事を得べし、採鑛は坑道掘及上向下向階段掘にして操業一切を請負人の手に委せ、請負人は總ての經費を負擔し産金率を以て分配す、その分配金は販賣先なる京城德力商店の報告により通貨を以てし一切青金を交附せず。

製 鍊 産出鑛石は坑口に於て手選をなし、麻袋入として水車場に運び搗鑛混汞製鍊を行ふ、搗鑛水車五臺あり朝鮮式木製にして水車一臺十本立とし、杵三寸角約八十封度とし一臺（十本立）の搗鑛量一晝夜三百貫を處理せり。

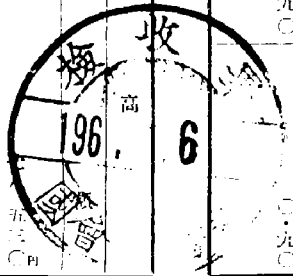
鑛尾は銅板によりて收金し沈澱池に流入して青化製鍊法を行ふ、白内混汞のみにて三百貫の處理量より十五匁乃至八十匁の青金を得たり、青化製鍊は搗鑛製鍊場の傍側に設け、徑四尺の滲出槽六箇を以て處理せり。

運搬及原動機 坑内運搬及坑口より製鍊場に至る運搬は共に人背擔軍運搬にして、軌道の設計中に

して製鍊場原動機として六七幕川による木製水車にして三五臺を建設せり。

鑛夫員數及賃金 (昭和三年十二月末日現在)

昭 和 三 年	昭 和 二 年	年	次	鑛 産 額		種 別	人 員	賃 金					
				取 出 量	取 出 價			取 出 高	取 出 低	取 出 平	取 出 均		
				計	計	計	計						
				選 別	選 別	選 別	選 別						
				鐵 石	鐵 石	鐵 石	鐵 石						
				機 械	機 械	機 械	機 械						
				運 搬	運 搬	運 搬	運 搬						
				支 柱	支 柱	支 柱	支 柱						
				坑 木	坑 木	坑 木	坑 木						
				計	計	計	計						
				四〇七	四〇七	四〇七	四〇七						
				三	三	三	三						
				四	四	四	四						
				二七	二七	二七	二七						
				六	六	六	六						
				二八	二八	二八	二八						
				二〇	二〇	二〇	二〇						
				〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇						
				一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・五〇						
				二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇	二・〇〇						
				一・二〇	一・二〇	一・二〇	一・二〇						
				一・六〇	一・六〇	一・六〇	一・六〇						
				二・一〇	二・一〇	二・一〇	二・一〇						
				〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇						
				一・二〇	一・二〇	一・二〇	一・二〇						
				一・三〇	一・三〇	一・三〇	一・三〇						
				一・二五	一・二五	一・二五	一・二五						
				〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇	〇・九〇						
				一・七五	一・七五	一・七五	一・七五						



昭和四年十月三日 印刷
昭和四年十月五日 發行

朝鮮總督府殖産局

朝鮮京城蓬萊町三丁目六二

印刷所 朝鮮印刷株式會社